

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成 2 年度

1991年

奈良市教育委員会

平成2年度 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書・正誤表

		調	正
回次	I. 20	第202-103-104次	第202-203-204次
回次	I. 21	第205-106-120次	第205-206-220次
D. 22	I. 8	70	71
p. 24	攝印土器一覧表14	S E0	S E09
p. 26	註 1	西院寺調査調査報告	西院寺発掘調査報告
p. 28	I. 19	捲狀	捲狀
p. 30	座標敷帳三段目	Y---16, 478.8	Y---16, 465.2
p. 30	註 1	(1980)	(1980)
p. 30	註 2	(1989)	(1988)
p. 32	炎	遺構番号	遺構番号
p. 33	註 3	(1988)	(1987)
p. 34	I. 10	9:10	9:10
p. 35	I. 10	獨立柱列	獨立柱列
p. 36	I. 13	獨立柱列	獨立柱列
p. 36	I. 15	獨立柱列	獨立柱列
p. 42	I. 29	2.4m, 2.4mと	2.4m, 2.4m, 4.0mと
p. 95	I. 1	S A10	S A21
p. 104	I. 22	古い	新しい
p. 113	I. 6	がはなく	がなく
図版11	13.	北東から	北西から
図版20	2.	S B01-02	S B04-05
図版46	2.	S D01	S D02
図版60	3.	S G03-08	S G17-18
図版60	4.	S E11-S X06-13	S E25-S X24-30
図版60	5.	S X14-15-16	S X27-28-29
図版67	7.	S G03-09	S G17-18
付図	墳丘測量図	/2000	/200

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成 2 年度

1991年

奈良市教育委員会



埋葬施設全景（南から）



第2埋葬施設 馬具（鞍）出土状態（南から）

序

奈良市は、かつて「青丹よし寧楽の京師は咲く花の薰ふがごとく今盛りなり」（万葉集3－328）とたとえられたように、天平文化の華が咲きほこった平城京のおかれた地で、地中には数多くの貴重な文化財が眠っています。近年の発掘調査成果から、奈良時代以前の遺跡も数多くあることがわかつてきており、奈良市が埋蔵文化財の宝庫であるということを改めて認識させられます。

しかし近年の急速な開発により、保存すべき埋蔵文化財が破壊されようとしています。この現状に対応するため奈良市では、この十年来、埋蔵文化財の発掘調査を中心に、保護、保存、活用、啓蒙に努めてきました。特に今年度は年々増加する発掘調査に対応するため、発掘担当職員を11名増員し、調査体制の充実をはかっております。

本書は平成2年度に奈良市が発掘調査を実施して得られた成果の概要をまとめたものであります。これらの調査成果が学術研究の資料として活用され、文化財保護に役立つことを願ってやみません。

最後に、調査から本書の作成に至るまで御指導、御協力を賜りました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係諸機関の方々、調査に御理解と御協力をいただいた土地所有者の方々に対しまして心より御礼申し上げます。

平成3年3月

奈良市教育委員会

教育長 久保田 正一

例　　言

1. 本書は、平成2年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書を集録したものである。なお、昨年度に実施した第178・188・191次調査の概要報告書も集録した。本年度に実施した発掘調査は、調査地一覧表に示した45件であるが、平城京東市跡推定地第11次調査については、別に概要報告書を刊行する。また、第200次調査で検出した埴輪窯跡を含む古墳時代の遺構・遺物と大安寺旧境内第44・45次調査（杉山古墳整備に伴う調査）については、来年度にその概要報告を行なう予定である。
2. 発掘調査は、下記の調査体制で実施した。

奈良市教育委員会文化課　課長　小林謙一

埋蔵文化財調査センター　所長　大原和雄　主任　藏内康良　事務吏員　吉谷正宣
技術吏員　森下恵介、西崎卓哉、中井　公、篠原豊一
三好美穂、立石堅志、森下浩行、鐘方正樹
技術員　秋山成人、関野　豊、松浦五輪美、武田和哉
安井宣也、中島和彦、池田裕英、原田憲二郎
宮崎正裕、川越邦江、久保清子

3. 本書の執筆は、それぞれの調査担当者が分担して行ない、文末に文責を明らかにした。
4. 調査次数は、平城京及び各遺跡ごとに、奈良市教育委員会が実施した調査を通算したものである。本書で使用する遺構記号、遺物の名称・型式等の標示は、奈良国立文化財研究所、及び当市教育委員会の刊行物に準拠している。遺構番号は、各調査ごとの仮番号である。
5. 本書で表示した方位・座標は、平面直角座標系VIに準拠している。標高は、すべて海拔高で示した。
6. 現地調査及び本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会の御指導・御協力を賜った。記して感謝したい。
7. 発掘調査及び出土遺物の整理には、下記の方々の参加、協力があった。
安藤美保、岩下和江、小川順子、太田景子、大中博文、笠井賢治、裡根逸子、角谷和美、川北洋子、河岸美幸、小紫治子、近藤詔子、赤瀬和子、白代幸恵、新本真之、清喜裕二、瀬尾真由美、芹川順子、芹野恒代、高橋直子、高橋浩樹、高橋光代、竹原茂幸、谷口富美、玉林尚子、池鶴耐絹子、津川瑞穂、寺澤京子、友永慶子、水井邦仁、中島満寿江、中西省二、長原亘、根上直子、楚田伊公子、浜本美和恵、林佐知代、林　典子、日高慎、平尾有加、深澤敦仁、保坂香恵、星野さやか、松山征子、村田律子、村松京子、森内恵子、森本章子、山前智敬、山田浩子、山村光子、山本美子、吉川直子、和田彰子、渡辺典子
8. 本書の編集は、鐘方正樹が担当した。

目 次

I. 平城京の調査

1. 近鉄西大寺駅南地区画整理事業に伴う調査	1	
平城京右京三条三坊八坪の調査	第 196-1・2・3次	4
平城京右京三条二坊十五坪の調査	第 200、213-1・2・3次	9
平城京右京三条三坊二坪の調査	第 196-4・5、213-4次	17
2. 近鉄西大寺駅北地区市街地再開発事業に伴う調査	19	
平城京右京一条二坊四坪の調査	第 207次	19
3. JR奈良駅周辺土地区画整理事業に伴う調査	27	
平城京左京四条四坊十六坪・四条五坊一坪・東四坊大路の調査		
平城京左京四条四坊十三坪の調査	第 178・188・199・218次	28
平城京左京四条四坊十坪の調査	第 208次	31
4. 平城京左京三条三坊十一坪の調査	第 191次	36
5. 平城京左京三条二坊九坪の調査	第 192次	38
6. 平城京左京三条四坊四坪の調査	第 193次	40
7. 平城京左京三条四坊六坪の調査	第 194次	42
8. 平城京左京五条五坊五坪の調査	第 195次	46
9. 平城京右京四条一坊一坪の調査	第 197次	51
10. 平城京右京五条四坊三坪の調査	第 198次	55
11. 平城京左京九条四坊十坪の調査	第 201次	57
12. 平城京左京八条三坊三坪の調査	第 202・103・104次	60
13. 平城京左京三条二坊十坪の調査	第 205・106・120次	65
14. 平城京左京八条二坊八坪の調査	第 209次	71
15. 平城京左京一条三坊十四坪の調査	第 210次	73
16. 平城京左京三条三坊十三坪の調査	第 211次	74
17. 平城京左京三条三坊十四坪の調査	第 212次	76
18. 平城京右京四条一坊十六坪の調査	第 214次	77
19. 平城京右京一条二坊六坪の調査	第 215次	78
20. 平城京左京八条二坊一坪の調査	第 216次	79
21. 平城京左京五条三坊九坪の調査	第 217次	80
22. 平城京左京三条一坊十坪の調査	第 219次	82

II. 寺院の調査

1. 元興寺旧境内の調査	第24~29次	85
2. 史跡大安寺旧境内の調査	第42・43次	96
3. 新薬師寺旧境内の調査	第3次	103
4. 薬師寺旧境内の調査	第5次	107

III. その他の調査

1. ベンショ塚古墳の調査	109
2. 南紀寺遺跡の調査	113
3. 奈良阪町遺物散布地の調査	115
4. 小規模調査・立会調査	116

付図

1. 平城京右京三条三坊八坪発掘調査遺構平面図	(1/200)
2. 平城京右京三条二坊十五坪発掘調査遺構平面図	(1/250)
3. ベンショ塚古墳墳丘測量図	(1/200)

図版目次

巻首図版 ベンショ塚古墳 埋葬施設全景 第2埋葬施設馬具(鞍)出土状態

図版1	平城京右京三条三坊八坪	(1) 第196-1・2・3次	1. 第196-1次発掘区全景航空写真 2. 第196-2・3次発掘区全景航空写真
図版2	同上	(2) 第196-1次	3. 第196-1次発掘区全景 4. S F101・S D102 5. 第196-1次掘立柱建物群
図版3	同上	(3) 第196-1・2・3次	6. 第196-1次東拡張区 7. 第196-2・3次発掘区全景 8. 第196-2次発掘区全景
図版4	同上	(4) 第196-2・3次	9. S F101、S D102 10. S D03 11. 第196-3次発掘区全景
図版5	同上	(5) 第196-3次	12. S D04 13. S E156・S K02 14. S E154出土石製壺
図版6	平城京右京三条二坊十五坪(1)	第200次	1. 調査地全景航空写真 2. 第200次発掘区全景
図版7	同上	(2) 同上	3. S B104・113 4. S B117・139・143
図版8	同上	(3) 同上	5. S B119・137、S K120~132 6. S B107
図版9	同上	(4) 同上	7. S B139柱穴土器出土状況 8. S X105 9. S X105断面状況
図版10	同上	(5) 第213-1・2次	10. 調査地全景航空写真 11. 第213-2次発掘区全景
図版11	同上	(6) 第213-2次	12. S B06 13. S B05 14. S B118・133・134
図版12	同上	(7) 第213-1・3次	15. 第213-1次発掘区全景 16. 第213-3次発掘区全景

- 図版13 平城京右京三条三坊二坪 (1) 第196-4・5次
1. 第196-4次発掘区全景
2. 第196-5次発掘区全景
- 図版14 同上 (2) 第213-4次
3. 第213-4次発掘区全景
4. 谷埋土除去状態
- 図版15 平城京右京一条二坊十四坪(1) 第207次
1. 東発掘区全景
2. S D02・03
- 図版16 同上 (2) 同上
3. 西発掘区全景
4. S D02、S X13
- 図版17 同上 (3) 同上
5. S E09
6. S E10
7. S E11
- 図版18 平城京東四坊大路・左京四条四坊十六坪・五坊一坪(1) 第186・188・199・218次
1. 第186・188・199・218次発掘区全景
- 図版19 平城京東四坊大路・左京四条四坊十六坪(2) 第199次
2. S F01・02、S D03、S A07
3. S F02、S D03・09・10、S A07
- 図版20 同上 (3) 第218次
4. S D03・09、S A07
5. 第218次発掘区全景
- 図版21 平城京左京四条四坊十六坪・五坊一坪 (4) 第178・188次
6. 第178次発掘区全景
7. 第188次発掘区全景
- 図版22 平城京左京四条四坊十三坪(1) 第208次
1. 第208次発掘区全景航空写真
- 図版23 同上 (2) 同上
2. S F01・02
3. S F01・02、S E28
- 図版24 同上 (3) 同上
4. S E28
5. S E28断面状況
6. 弥生時代自然流路
- 図版25 平城京左京三条三坊十一坪 第191次
1. 発掘区全景
2. 発掘区全景
- 図版26 平城京左京三条二坊九坪 第192次
1. 発掘区全景
2. S B01・02
- 図版27 平城京左京三条四坊四坪 第193次
1. 発掘区全景
2. S B01・02・03・04
3. S A11・12

図版28	平城京左京三条四坊六坪(1)	第194次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景 3. 井戸枠取り上げ風景（その1） 4. 井戸枠取り上げ風景（その2） 5. 井戸枠取り上げ風景（その3） 6. 井戸枠取り上げ風景（その4） 7. S E21櫻と櫛 8. S E21箇所の埋木 9. S E21井戸枠に刻まれた文字
図版29	同上	(2) 同上	
図版30	平城京左京五条五坊五坪(1)	第195次	1. 調査地全景航空写真
図版31	同上	(2) 同上	2. 北発掘区全景 3. 北発掘区全景
図版32	同上	(3) 同上	4. S B02 5. S B04 6. S B05・S D08
図版33	同上	(4) 同上	7. 南発掘区全景 8. 南発掘区全景
図版34	平城京右京四条一坊一坪(1)	第197次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版35	同上	(2) 同上	3. S B03、S D04、S K05～14 4. S B03
図版36	平城京右京五条四坊三坪(1)	第198次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版37	同上	(2) 同上	3. S D01・02 4. S D04、S E05 5. S E06
図版38	平城京左京九条四坊十坪(1)	第201次	1. 発掘区全景
図版39	同上	(2) 同上	2. 発掘区全景 3. S B01
図版40	平城京左京八条三坊三坪(1)	第202次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版41	同上	(2) 第203次	1. 発掘区全景 2. S E18

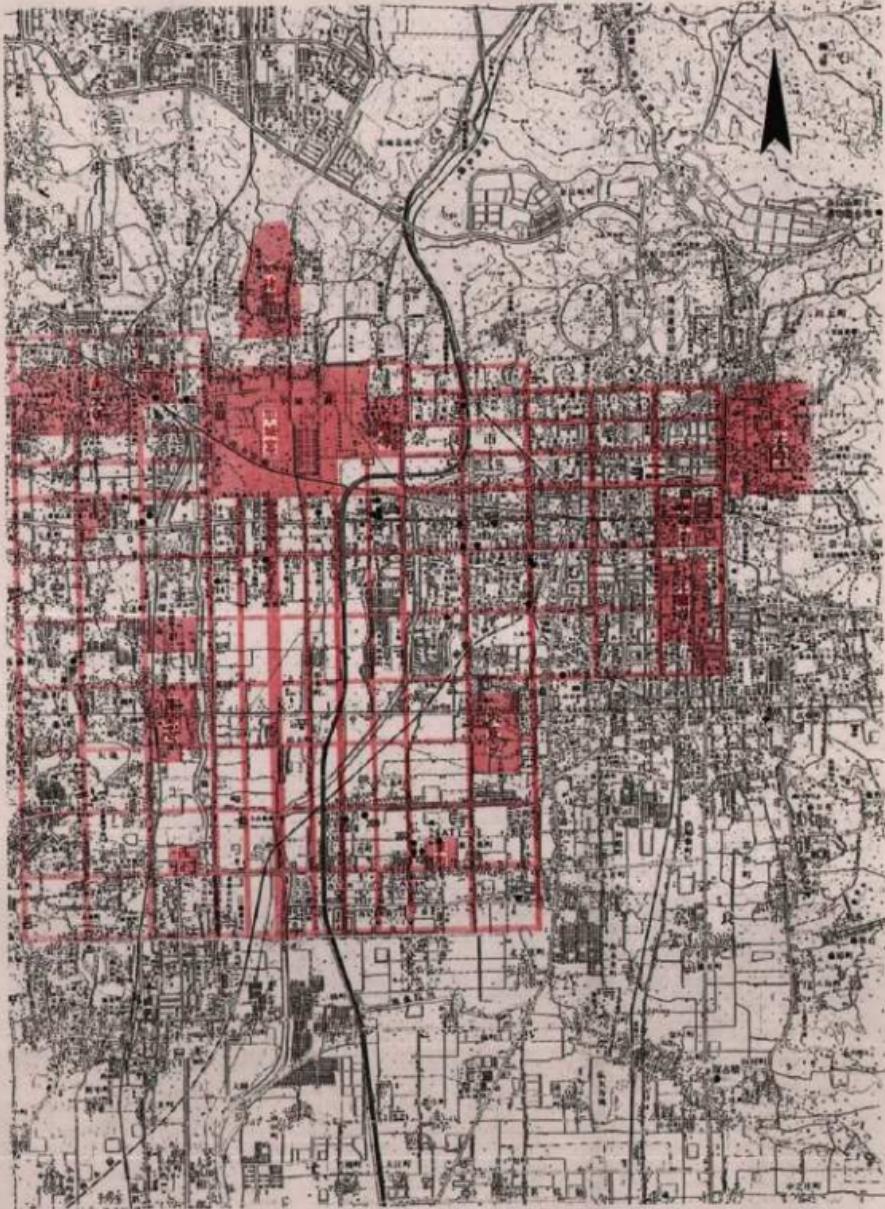
				3. S E 18遺物出土状態
図版42	同上	(3)	第204次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版43 平城京左京三条二坊十坪(1)			第205次	1. 発掘区配置状況 2. 発掘区全景
図版44	同上	(2)	同上	3. S E 01 4. 綱代出土状態
図版45	同上	(3)	第206次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版46	同上	(4)	第220次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版47 平城京左京八条二坊八坪			第209次	1. 発掘区全景 2. 発掘区北半部
図版48 平城京左京一条三坊十四坪			第210次	1. 発掘区全景 2. S E 01
図版49 平城京左京三条三坊十三坪			第211次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版50 平城京左京三条三坊十四坪			第212次	1. 発掘区全景 2. 自然流路西岸
図版51 平城京右京四条一坊十六坪			第214次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版52 平城京右京二条一坊六坪			第215次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版53 平城京左京八条二坊一坪			第216次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版54 平城京左京四条三坊九坪(1)			第217次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版55	同上	(2)	同上	3. S D 03, S K 05 4. S D 04
図版56 平城京左京三条一坊十坪(1)			第219次	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版57	同上	(2)	同上	3. S K 08 4. S K 08遺物出土状況

図版58	元興寺旧境内	第24次	1. 発掘区全景 2. S E 04
図版59	同上	第26次	1. 発掘区全景 2. S X 02
図版60	同上	第27次	1. 東発掘区上層遺構全景 2. 東発掘区下層遺構全景 3. 西発掘区全景
図版61	同上	第28次	1. 発掘区全景 2. S X 12
図版62	元興寺旧境内(大乗院)	第25次(1)	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景
図版63	同上	同上(2)	3. S D 01 4. S X 02・03 5. S E 06・S X 07
図版64	同上	同上(3)	6. S E 04・05 7. S X 08 8. S X 09
図版65	同上	第29次(1)	1. 西発掘区全景 2. 西発掘区全景
図版66	同上	同上(2)	3. S G 03・06 4. S E 12、S X 06・13 5. S X 14・15・16
図版67	同上	同上(3)	6. 東発掘区全景 7. S G 03・09
図版68	史跡大安寺旧境内	第42次(1)	1. 発掘区全景 2. 発掘区全景 3. 発掘区東半部
図版69	同上	同上(2)	4. 基壇土内軒丸瓦 5. S E 03 6. S E 03転用軒平瓦
図版70	同上	第43次	1. 発掘区全景 2. S K 02・03
図版71	新薬師寺旧境内	第3次(1)	1. 発掘区全景航空写真

図版72	同上	同上(2)	2. S X20出土羽釜 3. S X21出土瓦質土器 4. 埋甕1
図版73	同上	同上(3)	5. S X10 6. S X16
図版74	同上	同上(4)	7. S X21・22 8. S X23・24
図版75 薬師寺旧境内		第5次	1. 発掘区全景 2. 西面大垣
図版76 ベンショ塚古墳(1)			1. 古墳全景航空写真 2. 第2主体部全景
図版77	同上 (2)		3. 短甲出土状態 4. 眉庇付冑出土状態 5. 工具出土状態
図版78	同上 (3)		6. 馬具出土状態 7. 第3主体部全景 8. 円筒埴輪列
図版79 南紀寺遺跡			1. 発掘区全景 2. 基壇状遺構
図版80 奈良阪町遺物散布地			1. 調査地近景 2. 発掘区全景

平成2年度 発掘調査一覧

次数	場所名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者	備考
192	平城京東京三條二坊九井	二条大路町丁目50-1.51	82. 4. 2~ 4. 27	185m ²	西崎、秋山、池田	貴重資料:事務所ビル建設
193	平城京東京三条四坊四井	大富町3丁目194-1.194-5	82. 4. 13~ 5. 27	264m ²	宍井、栗原	地盤浅:マンション建設
194	平城京東京三條四坊六井	大富町3丁目131-1	82. 4. 16~ 5. 23	500m ²	西崎、久保	西田正:事務所ビル建設
195	平城京東京五条五坊五井	西本町町189 他	82. 5. 14~ 6. 22	990m ²	鶴方、池田	君明学園:専門学校建設
196	平城京東京三條三坊八・二井	曾爾町字外堤内149 他	82. 5. 28~ 10. 26	3090m ²	西崎、久保	近畿西大寺駅北土地区画整理事業
197	平城京東京四條一坊一井	四條大路4丁目1-7	82. 6. 4~ 7. 12	250m ²	宍井、栗原	大西義重:共同住宅建設
198	平城京東京五条四坊三井	平和町4丁目3-1	82. 7. 4~ 8. 6	450m ²	鶴方、栗原	系西中学校:校舎付宿泊施設
199	平城京東京西四坊十六井	三条町町1 他	82. 7. 2~ 8. 22	1450m ²	立石、武田	JR森永町駅北地区画整理事業
200	平城京東京三條二坊十五井	貴賀町字高木409 他	82. 6. 21~ 12. 26	2820m ²	鶴方、宍井、松浦、中島、 笠置	近畿西大寺駅北土地区画整理事業
201	平城京東京九条四坊十五井	東九条町字子母9259-1	82. 7. 3~ 7. 30	610m ²	中島、池田	山田徹史:古跡確認
202	平城京東京八条三坊三井	西九条町丁目4-5	82. 7. 9~ 7. 25	154m ²	鶴方	鳥村亮子:貴重資料
203	平城京東京八条三坊三井	西九条町丁目6-8	82. 7. 25~ 8. 9	146m ²	鶴方、池田	藤谷洋子:貴重資料
204	平城京東京八条三坊三井	西九条町丁目6-7	82. 8. 19~ 8. 23	94m ²	鶴方、池田	山口美公子:貴重資料
205	平城京東京三條二坊十井	二条大路町丁目2-7	82. 7. 23~ 9. 4	249m ²	間野	鶴方(ビルディング):事務所ビル建設
206	平城京東京三條二坊十井	二条大路町丁目30-2	82. 8. 6~ 8. 27	394m ²	森下(治)	深川本不動院:事務所ビル建設
207	平城京東京一坊二坊四井	西大寺町2349-1	82. 8. 18~ 10. 31	450m ²	鶴方、栗原	近畿西大寺駅北地区画整理事業
208	平城京東京西四坊十三井	三条町町31 他	82. 9. 3~ 12. 27	1090m ²	立石、武田	JR森永町駅北地区画整理事業
209	平城京東京八条二坊八井	吉町467-1	82. 8. 10~ 11. 2	245m ²	森下(治)、鶴方、栗原	南部第2号賃貸建設
210	平城京東京三條三坊十三井	法華寺町1351	82. 8. 10~ 9. 28	71m ²	間野	一島真代:宝塚新築
211	平城京東京三條三坊十三井	大富町6丁目245	82. 10. 1~ 11. 2	339m ²	三井、間野	柳松田雄:事務所ビル建設
212	平城京東京三條三坊十四井	大富町6丁目223-1	82. 10. 11~ 10. 19	72m ²	間野	大喜小学校給食室新築
213	平城京東京三條三坊二井	穀根町字高木414 他	82. 11. 1~ 11. 22	1660m ²	中井、川越	近畿西大寺駅北土地区画整理事業
214	平城京東京四條一坊十六井	四條大路4丁目4-4	82. 10. 31~ 11. 7	27m ²	鶴方、栗原	鶴方(ビルディング):賃貸廻遊路
215	平城京東京一坊二坊六井	二条町54-6	82. 11. 6~ 11. 9	32m ²	鶴方、栗原	宇内成志:西大寺北出張所新築
216	平城京東京八条二坊一井	吉町387-12	82. 11. 9~ 11. 19	48m ²	鶴方、栗原	吉町老人施設の東建設
217	平城京東京五条三坊九井	道の駅丁目61-4	82. 11. 19~ 12. 25	480m ²	鶴方、栗原	神農兵工社:集合住宅建設
218	平城京東京西四坊十六井	三条町町31 他	82. 12. 7~ 12. 28	870m ²	立石、武田	JR森永町駅北地区画整理事業
219	平城京東京三條一坊十井	二条大路町2丁目159-3	82. 12. 26~ 12. 31. 2	250m ²	三井、久保	日吉堀端:住宅新築
220	平城京東京三條二坊十井	二条大路町1丁目159-1	82. 1. 21~ 1. 28	320m ²	池田、宮崎	南ナレ開発:事務所ビル
221	平城京東京市造壁堀(第11次)	吾町578-1	82. 11. 3~ 12. 28	410m ²	三井、間野	重貴造壁堀定期測量
222	元興寺境内(第24次)	福智院町17-15.2-14-2	82. 5. 7~ 5. 25	44m ²	松浦、中島	都市計画道路杉ヶ町へ萬円通建設
223	元興寺境内(第25次)	高畠町1883	82. 12. 26~ 12. 27	250m ²	鶴方、森下(治)	都市計画道路杉ヶ町へ萬円通建設
224	元興寺境内(第25次)	西新堀町10	83. 1. 17~ 1. 25	22m ²	森下(治)	柳松田雄:住宅建設
225	元興寺境内(第27次)	元興寺町44 略地の内町29-2	83. 2. 4~ 2. 20	63m ²	三井、久保	木戸市立海の家新築
226	元興寺境内(第28次)	福智院町5-5 他	83. 2. 6~ 2. 22	62m ²	宍井、松浦	木戸市立海の家新築
227	元興寺境内(第28次)	高畠町1883	83. 2. 8~ 3. 12	260m ²	鶴方、森下(治)	木戸市立海の家新築
228	大安寺境内(第42次)	大安寺町1141-1	82. 4. 3~ 4. 27	52m ²	三井、宮崎、川越	増田泰男:住宅改築
229	大安寺境内(第43次)	大安寺町1225	82. 5. 4~ 5. 15	75m ²	松浦、中島	西田正記:住宅新築
230	大安寺境内(第44次)	大安寺町1063 他	82. 5. 3~ 5. 18	250m ²	鶴方、池田、宮崎	杉山吉雄監修に伴う開拓
231	大安寺境内(第45次)	大安寺町1063 他	82. 5. 25~ 5. 30	300m ²	森下(治)	杉山吉雄監修に伴う開拓
232	番屋跡寺跡境内(第3次)	高畠町60-1	82. 4. 18~ 5. 2	1100m ²	三井、宮崎、川越	写真美術館建設
233	高畠跡寺跡境内(第5次)	西の市町寺町217-1 他	82. 3. 12~ 3. 18	25m ²	中井	吉崎謙一:住宅建設
234	ベンシャ瑪古墳	山町堀路437-6-548	82. 4. 23~ 7. 6	120m ²	森下(治)、間野	平井義文:福神社建設
235	南紀寺遺跡	福神寺町3丁目208-1.208-7	82. 7. 9~ 8. 3	320m ²	森下(治)、間野	細田白水園:マジシャン建設
236	奈良町周辺遺跡	奈良町町281	82. 6. 21~ 6. 25	90m ²	松浦、中島	野球場建設



平成 2 年度 免税調査地位置図 (1 / 50000)

I. 平城京の調査

1. 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査

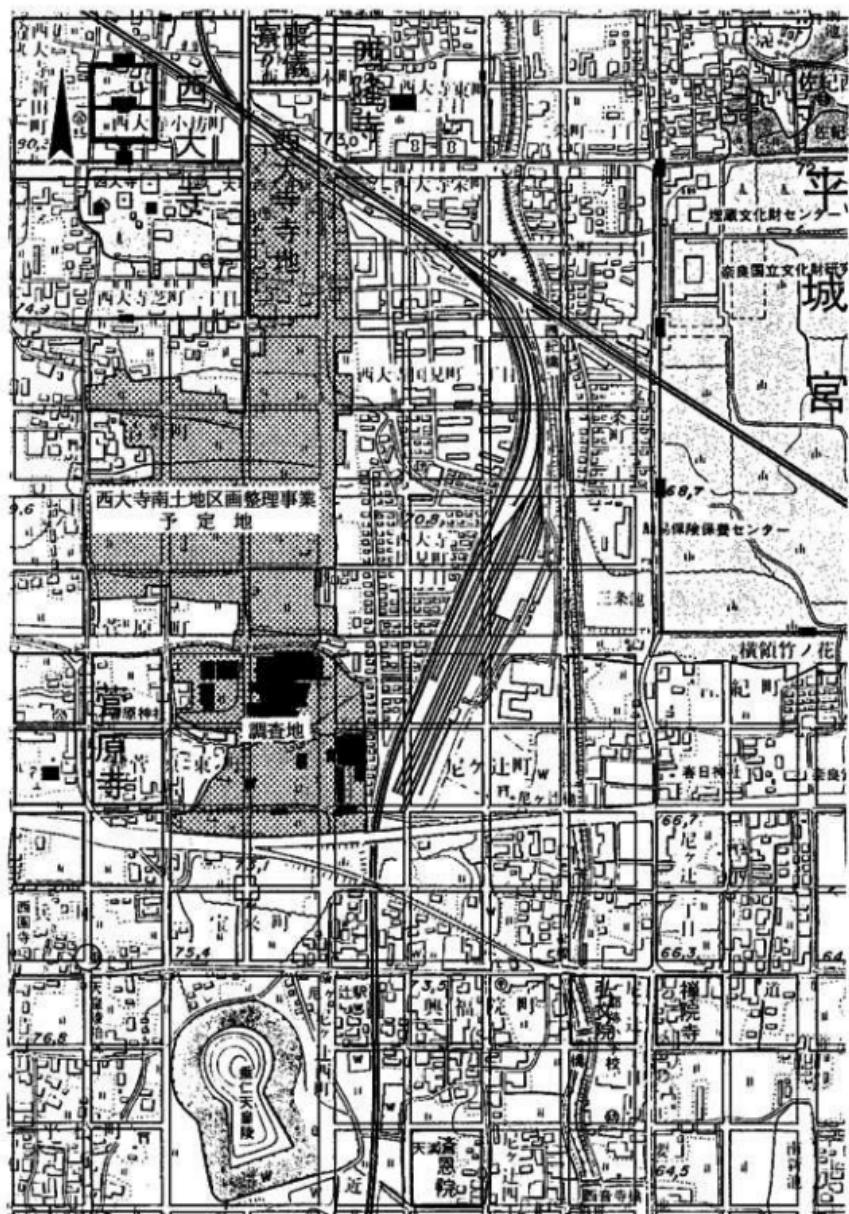
1.はじめに

奈良市では、近鉄西大寺駅周辺を古都奈良の副都心として位置づけ、都市再開発事業を実施することになった。近鉄西大寺駅北地区市街地再開発事業と近鉄西大寺駅南土地区画整理事業がそれである。本調査は、このうちの近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査である。この区画整理事業は、阪奈道路と近鉄西大寺駅の間にある水田と宅地を区画整理し、阪奈道路から駅に南北へ延びる都市計画道路をつくり、駅前広場を整理し、事業地を宅地・商業地化するものである。事業範囲は、平城京三条坊復元による右京一条三坊から三条三坊にかけての総面積32万m²にも及ぶ広大なものとなっている。事業地全体が遺跡の中に包括されており、発掘調査が進むにつれて開発と遺跡の保存・活用との調和が重大な課題となりつつある。

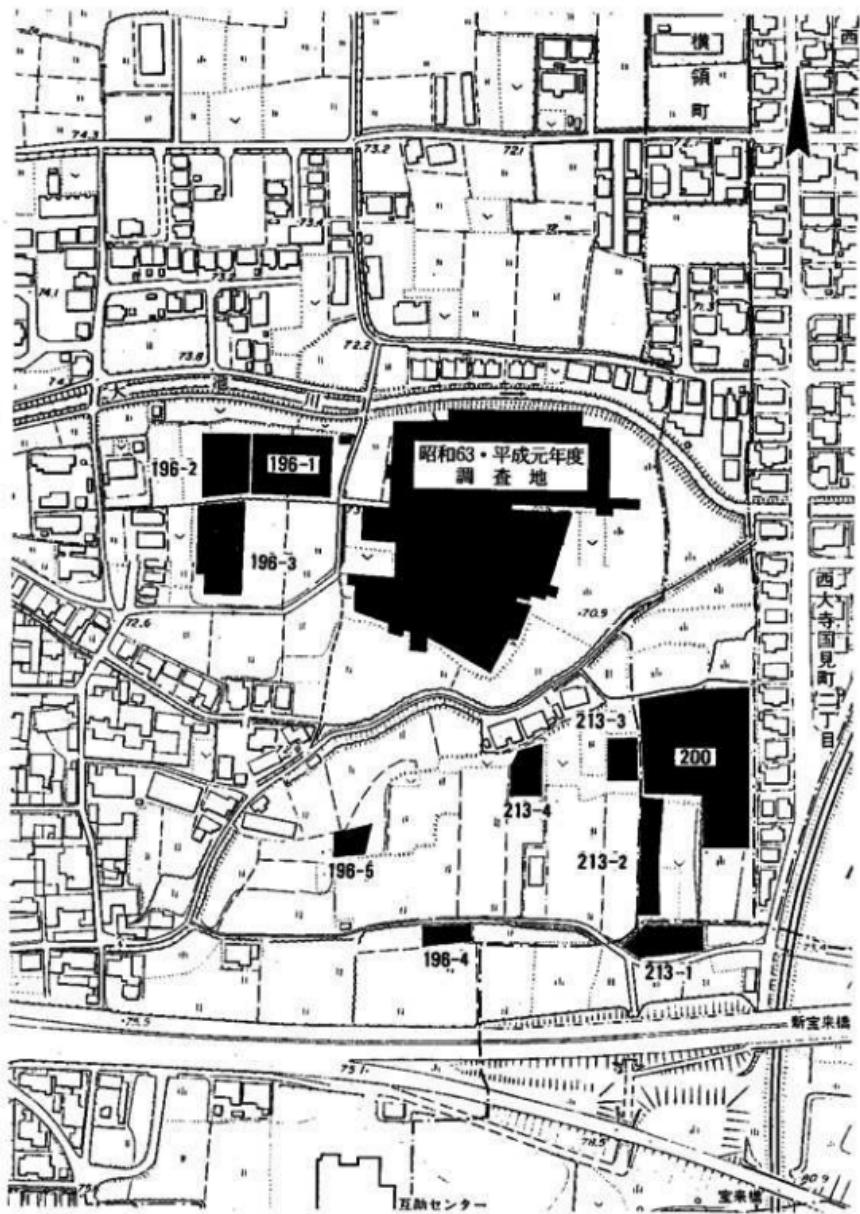
工事計画が進む阪奈道路沿いの事業地南側から発掘調査に着手し、昭和63年度～平成元年度にかけて平城京右京三条三坊一坪のほぼ一坪全域の調査を終えている。この調査では、奈良時代の一坪利用の邸宅跡とともに、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代前期の集落跡、室町時代の居館跡などが検出され、平城京跡以外の遺構が重複する複合遺跡であることが判明した。そこで、平城京跡を除く他の遺構群を菅原東遺跡と総称することとした。

なお、今回の調査地は計10箇所に及び、右京三条二坊十五坪、三条三坊二・八坪にまたがるため、各坪ごとにその概要をまとめて報告することにした。遺構番号については奈良時代より古いもの（2桁）とそれ以降のもの（3桁）とに分けて坪ごとに付した。

調査次数	調査地	調査期間	調査面積
第196-1次調査	菅原町字外垣内149他	平成2年5月28日～平成2年7月11日	1,090m ²
第196-2次調査	"	平成2年7月2日～平成2年10月4日	720m ²
第196-3次調査	"	平成2年7月25日～平成2年10月4日	880m ²
第196-4次調査	菅原東町字鎌田37	平成2年10月3日～平成2年10月26日	200m ²
第196-5次調査	菅原東町字高木54-1	平成2年10月5日～平成2年10月26日	200m ²
第200-1次調査	横領町字高木409他	平成2年6月21日～平成2年12月20日	2,820m ²
第213-1次調査	宝来町1丁目28-1	平成2年11月1日～平成2年12月25日	380m ²
第213-2次調査	横領町字高木414	平成2年11月5日～平成2年12月22日	660m ²
第213-3次調査	菅原東町字高木80他	平成2年12月19日～平成3年2月8日	274m ²
第213-4次調査	菅原東町字高木63	平成3年1月16日～平成3年2月22日	350m ²



調査地と周辺の条坊 (1/10,000)



発掘調査位置図 (1/3,000) (数字は調査次数)

平城京右京三条三坊八坪の調査 第196-1・2・3次

I. はじめに

本調査は平城京の条坊では右京三条三坊八坪のほぼ中央で行ない、調査区の北端に二条大路が、東端には一・八坪境小路が想定できた。また、前年度までの一坪の調査（第169・173・182・184次）で検出している弥生、古墳の各時代及び中世の遺跡が広がっている可能性もあった。今回の第196次調査では、1・2・3と3箇所の発掘区を設定し、調査を進めた。

II. 調査の概要

層序 残りのよい第196-1区西壁の土層図を示す。黒色粘土（水田耕土）の下に遺物を包含する灰褐色粘質土がある。その下層にはよくしまったこれも遺物を包含する明茶褐色粘質土が堆積し、遺構面である黄褐色粘質土に達する。第196-3区南東部では黄褐色粘質土の上層に茶灰褐色砂質土が堆積する。遺構検出面の標高は第196-1区東端で現地表面から0.25m下の72.75m、第196-2区北西端では同じく0.2m下で73.1m、第196-3区南東端では同じく0.3m下で72.8mと北西方向に高まる。遺構の残り具合も第196-2区が最も悪く、本来は南東方向にのびる低い丘陵が、平城京の二条大路を踏襲すると思われる現在の大池川と、水田造成時の削平で現状のように改変されたのであろう。

検出遺構 検出した遺構は古墳時代の土坑2基、奈良時代の道路1条、溝4条、掘立柱建物34棟、塀4条、井戸6基、土坑5基、時期不明の溝2条である。以下に概要を記す。

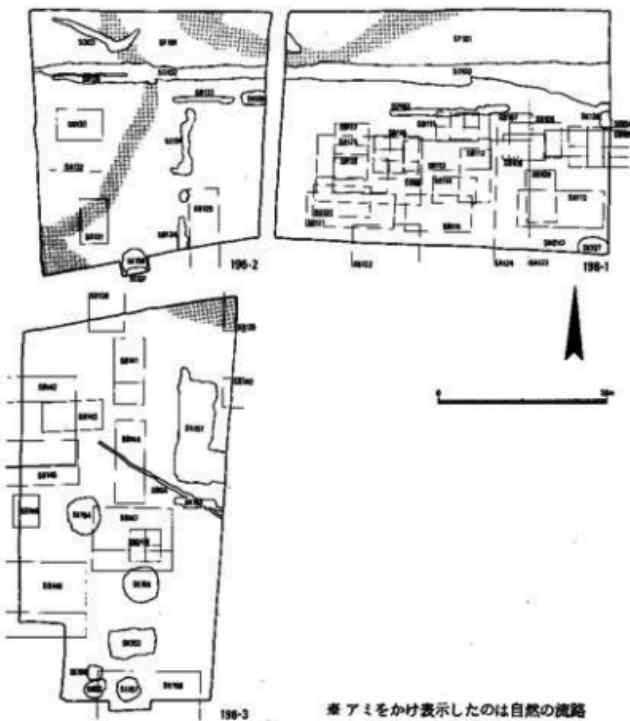
古墳時代の遺構 第196-1区のSK01と第196-3区のSK02がある。SK01は東西0.55m、南北0.6m、検出面からの深さ0.13mの小土坑で、布留式の古い様相を示す甕2個体が出土した。SK02は東西2.5m、南北2.0m以上、検出面からの深さ0.45mの土坑。埋土はよくしまっている。細片で磨滅した布留式土器が整理箱に1箱分ほど出土した。

奈良時代の遺構 建物の規模などは表にまとめ、発掘区ごとに遺構の概要を記す。

第196-1次調査 SF101は発掘区の北端で検出した東西道路。平城京の二条大路である。第196-2区とあわせて長さ68.5m分、路面の幅6.5mまでを検出した。削平のため道



第196-1次発掘区西壁堆積土層図 (1/100)



※アミをかけ表示したのは自然の流路

第196-1・2・3次調査遺構配置図(1/600)

路部分が一段低くなっている。当初の路面の状態はわからない。SD102は二条大路の南側溝。第196-2区西端では幅0.7m、深さ0.1mしか残っていないが、第196-1区東端では幅4.8m、深さ1.75mある。第196-1区の所見から、第196-1区の東側に奈良時代以降の南北流路があり、それとの接続部が広がっているものと思われる。土層図はSD102のほぼ中央の横断面であるが、溝底が二段になっており、掘りなおされていることと、砂が堆積し旧溝の底が水流で洗われて東へ向かう流れがあったことがわかる。

この坪が大路に面していることから、道路にそって築地があることを予測していたが、その痕跡はない。ただ、大路側溝SD102の南4.1mに溝の痕跡SD103があり、両者の間に遺構がないことからSD103を築地の雨落溝と考え、築地を想定することもできるが、SD103より新しい建物SB111を重複して検出していることに問題が残る。

この発掘区では18棟の掘立柱建物と3条の塀を検出した。直接重複関係があるものの前

後関係を示すと次のようになり、少なくとも5期の変遷が窺える。また、SA124あるいはSA123で東と西の2群に区画される時期があり、棟方向が北で西(東で北)へ振れている建物(SB109・113・122)とそうでないものとがあることがわかる。

SA124以西の建物群	SA124以東の建物群	不明
125→116→118→119→117 (120)	108→123→107	105 106 109 110 111 112 114 115 121 122 124

不明は2棟以上の建物と重複しないもの。()は重複関係から古いことはわかるが上段との並行関係が不明であるもの。

第196-2次調査 大路側溝SD102にそってSD128がある。重複関係がなくSD102に接続することから改修前の大路側溝であろう。南北溝SD134は幅0.8~1.2m、もっとも深いところで0.18m。途切れながらも15m分を検出した。ほぼ坪の東西の中央にあることから、坪内を区画する溝ではないかと考える。

掘立柱建物を3棟と塀を1条検出した。いずれも柱穴の深さが0.05~0.1mほどと残りが悪く、第196-1・3区と比べて造構の配置がまばらであることから、当初の造構面は削り取られ造構の一部が残ったのではなかろうか。

井戸が2基ある。重複関係からSE136が古くSE137が新しい。SE136は掘形の底に板材を井桁に組み、その外側に縦板を方形に立て並べるものであるが、一部の材を抜き取った後に放棄したらしく崩壊していた。掘形から平城宮土器Ⅲの土器が出土した。SE137、SE136の掘り直しかと思われるが発掘区外へ広がり詳細は不明。

第196-3次調査 掘立柱建物13棟を検出した。SB142は南・北にSB145・148は南に廂があり、建物規模が大きい。重複関係から143→142→145と144→148の順に建てられたことがわかる。SB143・145は棟方向が東で北へ振れている。

井戸が3基ある。SE154は幅55cm前後、長さ125cm前後、厚さ4cmの板材を雁柄をつかって内法一辺110cmの方型に組みあげたもの。仕口は井籠組にせず、材の両端を板の厚み分切り欠き他の材を突きつけている。4段(220cm)分が残り、上部は抜き取られている。掘形から平城宮土器Ⅲ、抜き取り跡から平城宮土器Vの土器が出土した。SE155は枠が抜き取られ、一気に埋められている。平城宮土器Ⅲの土器が出土した。SE157の井戸枠は上下二段にわかれ、上段は内法一辺100~110cmの井籠組、下段は厚さ4cmほどの材をつかった方形縦板組。隅柱はない。枠内から平城宮土器V~VIの土器が出土した。

発掘区北半東よりSK151がある。東西13.7m、南北6.0m以上、深さ0.5m。L字形に曲がり、東は発掘区外へつなぐ。平城宮土器Ⅲの土器が出土した。塵芥処理用の土坑であろう。重複関係が判然とはしなかったが、土坑北端の形態からSD134と重複しているらしいことと、坪の南北の中央で東に折れ曲がっていることから坪内の区画溝にそって掘られたものかと考えられる。SK152も同じ用途の土坑であろう。

時期不明の遺構 196-2区のSD03と196-3区のSD04がある。SD03は幅0.9m、深さ0.35mの溝。水流のために屈曲部が外側へ広がっている。長さ11.5m分を検出したが、両端とも発掘区外へつづく。SD04は幅0.3m、深さ0.1mほどの溝。長さ16.5m分を検出し東端は発掘区外へつづく。SK152よりも古い。いずれも遺物がほとんどなく正確な時期は決し難いが、斜行溝は京や水田の地割では考えにくく、しいて例を求めるならば隣接の第169・173・182・184次調査で検出している古墳時代前期の溝がある。

(西崎卓哉)

遺構番号	棟方向	振 れ	規 模	周	桁行m(尺)	梁間m(尺)	備 考
SB104	東西	＼	3以上×2		4.15(14)	4.75(16)	縦柱建物
SB105	東西		4以上×2		5.9(20)	3.2(11)	
SB106	東西		3×1		6.15(21)	4.15(14)	
SB107	東西		3×2		5.05(17)	3.3(11)	
SB108	東西		3×2		5.2(17.5)	3.2(11)	
SB109	南北	＼	3×2		6.15(21)	3.75(12.5)	
SB110	東西		4×2		10.2(34.5)	4.4(15)	
SB111	東西		3×2		5.05(17)	3.5(12)	縦柱建物
SB112	南北		3×2		6.45(22)	3.8(13)	
SB113	東西	＼	5×2		10.4(35)	3.6(12)	
SB114	南北		3×2		4.9(16.5)	3.2(11)	
SB115	東西		4×2		8.0(27)	4.15(14)	柱穴不揃い
SB116	東西		3×3		5.3(18)	4.4(15)	縦柱建物
SB117	南北		4×2		6.05(20.5)	3.9(13)	
SB118	東西		5×3	南	12.6(42.5)	5.3(18)	廻の出2.8(9.5)
SB119	東西	＼	3×2		6.5(22)	4.0(13.5)	
SB120	東西	＼	3×2		7.1(24)	3.55(12)	
SB121	東西		5×2		10.4(35)	4.2(14)	
SB122	東西	＼	3×2以上		8.0(27)	2.4(8)	
SA123	南北		8以上		15.6(56)		
SA124	南北		6以上		12.4(42)		
SA125	東西		3		5.0(17)		
SB129	南北	＼	4以上×2		5.75(19.5)	3.7(12.5)	
SB130	東西	＼	3×2		5.3(18)		
SB131	南北		3×2		5.3(18)	2.25(11)	
SA132	東西		3以上		6.2(21)		
SB138	南北		1以上×2			4.2(14)	
SB139		2以上×1以上			3.55(12)		
SB140	東西		1以上×2			3.55(12)	
SB141	南北		4×2	南	5.3(18)	3.6(12)	廻の出2.5(8.5)
SB142	東西		3以上×4	南・北	4.7(16)	4.45(16)	廻の出3.1(10.5)
SB143	東西	＼	4×2		7.3(24.5)	3.55(12)	
SB144	南北		5×2		9.8(33)	3.56(12)	
SB145	東西	＼	4以上×3	南	5.3(18)	3.3(11)	廻の出2.2(7.5)
SB146	南北		3×2以上		3.7(12.5)	1.5(5)	
SB147	東西		4×3	南	9.5(32)	5.3(18)	廻の出2.2(7.5)
SB148	東西		2×2		3.85(13)	3.55(12)	縦柱建物
SB149	東西		3以上×3	南	5.3(18)	5.95(20)	廻の出2.7(9)
SB150	東西		5×2以上		11.85(40)	2.85(8)	

検出建物一覧表(東西棟建物は棟に直交するラインの振れを示した)

III. 出土遺物

瓦類 瓦類のうち軒瓦について記す。軒丸瓦には平城宮6225C型式が2点、種別不明2点、鎌倉期以降の『菅原寺』銘のもの1点がある。軒平瓦には同6685A・6691A各1点、鎌倉期以降のもの1点がある。同6625C・6685Aの計3点は大路側溝S D 102から、他は建物としてはまとまらない柱穴の抜き取り跡と遺物包含層から出土した。(久保清子)

土器類 遺物整理箱にして108箱ほどの土器類が出土した。SE 154の枠内と枠抜き取り痕跡から奈良時代の平城宮土器Ⅲ～Vの土器がまとまって出土した他は、残存状態が悪く、細片が大半である。

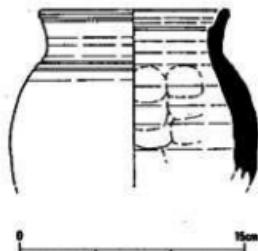
石製品 石製壺がある。SE 154の掘形から平城宮土器Ⅲの土器とともに出土した。破片のため底部の形態や器高はわからないが、口径は12.4cmに復元できる。肩部に2条、口縁端部内面に1条の沈線がある。口縁部内外面から胴部上半にかけてはロクロ調整をしている。胴部外表面は磨滅が著しく調整は不明。石材は白雲母を多量に含んだ緑泥岩質である。

洛陽閻林59号唐墓から出土した玉石罐と形態が類似する。(三好美穂)

木製品 SE 157の枠内から斎串4点と不明品1点が出土した。

IV. まとめ

八坪内での発掘区の位置を復元すると右図のようになる。これにより発掘区が坪の中央から北辺にかけてあることがわかり、その様相を明らかにすることができた。遺構の配置を考慮して、この坪には一坪利用、東西二分割利用、東西二分割さらに東半分を南北二分割利用の3期の変遷があることが想定できる。(西崎卓哉)



石製壺 (1/4)



発掘区配置概念図

平城京右京三条二坊十五坪の調査 第200・213-1・2・3次

I. はじめに

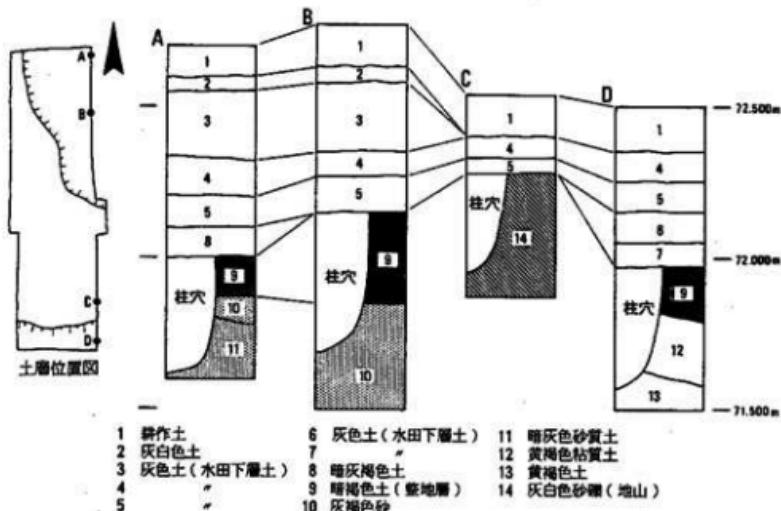
右京三条二坊十五坪では、第200次、第213-1・2・3次調査として合計4箇所の発掘区を設定して発掘調査を実施した。第200次調査は十五坪内北西部分の宅地割解明を目的として行なった。また、第213-1次調査は十四坪と十五坪の坪境小路の確認を目的として、第213-2次調査と第213-3次調査は西二坊大路の確認を目的として行なった。なお第213-1次を除く各調査区では奈良時代以前の遺構も多く検出した。このうち第200次調査で検出した埴輪蒸跡群については来年度にその概要を報告する予定である。

II. 調査の概要

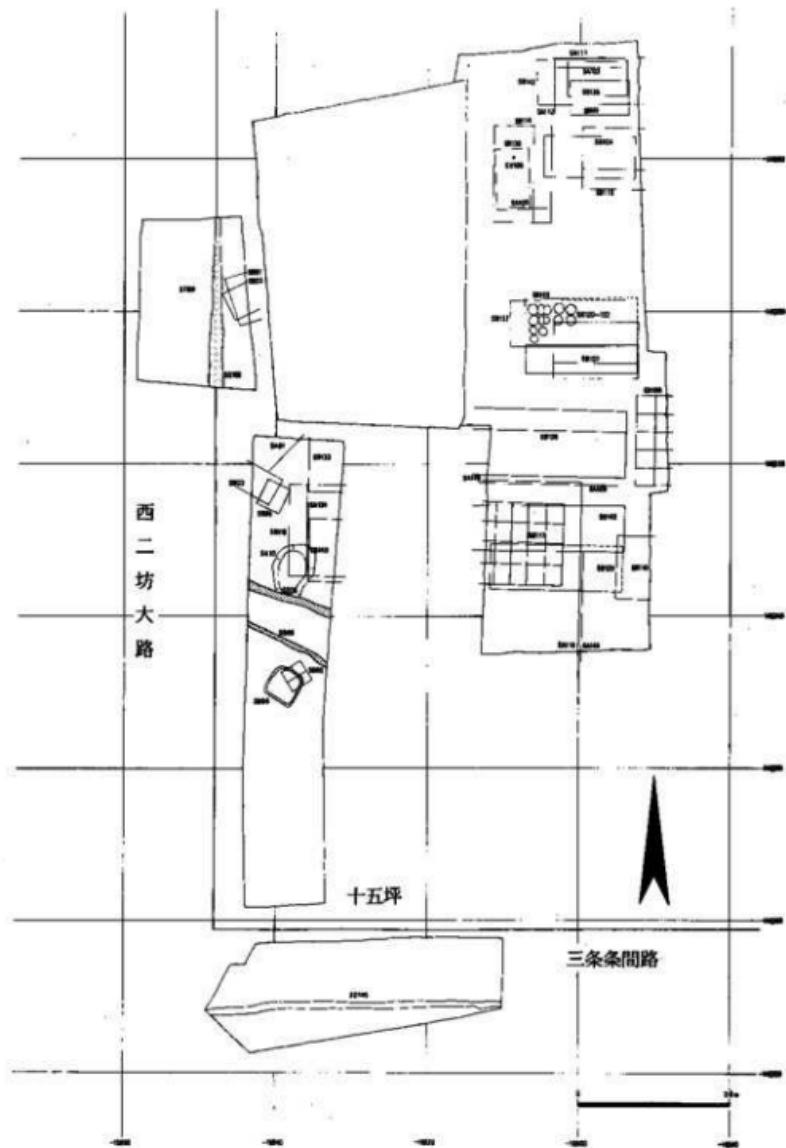
第200次調査

本調査地は坪内の北西部にあたる。現状では造成地であるが、以前は水田が広がっていたことが古い地形図からうかがえる。本来の地形は北西から南東に延びる低丘陵の先端部であり、発掘区の北東部及び南端は谷となっている。発掘区総面積は2820m²であるが、西侧の発掘区1100m²は削平を受けており、遺構は全く残存していないかった。

検出遺構 発掘区の層序は、厚さ約0.15mの耕土の下に2~4層の旧水田層が堆積し、その直下が奈良時代の遺構検出面となる。遺構検出面は丘陵部では砂礫の地山、谷部では



第200次発掘区東壁堆積土層模式図 (1/20)



第 200・213-1・2・3 次調査構造配置図 (1/800)

暗褐色土の整地層の上面で、標高は丘陵部で72.3m、谷部で72.0m前後である。なお丘陵部の北半では部分的に黄白色砂質土の整地層が認められる。

主な検出遺構には、掘立柱建物16、掘立柱塀8、埋甕土坑13、土器埋納土坑1がある。

A 掘立柱建物 検出した掘立柱建物の主軸方向及び規模は表に示す通りである。これらは配置と立地の点から北群と南群に区分できる。

北群に属するものとして、SB 104・113・114・135・136・141・142がある。棟方向は丘陵部では南北、谷部では東西である。このうち互いに重複し先後関係がわかるものは、

SB 114 → SB 136 SB 135 → SB 141

である。また柱筋・柱間が揃うものは、

SB 113 北側柱列 - SB 114 北妻柱列

である。

南群に属するものとして、SB 107・108・110・119・137～139・143がある。これらはすべて丘陵部に構築されている。棟方向はSB 108・110以外はすべて東西である。このうち互いに重複し先後関係がわかるものは、

SB 107 → SB 119 → SB 137 SB 139 → SB 143

堀立柱建物

遺構番号	棟方向	規模・廊(間)	桁 行(列)	梁 間(列)	廊の出	備 考
SB104	東 西	5×2		12.0	5.4	
SB107	東 西	5×2		10.5	5.4	
SB108	東 北	5×1以上		12.0	2.4以上	
SB110	南 北	3×1以上		8.1	3.0以上	
SB113	東 西	2以上×2	南 東	5.4以上	5.4	2.1
SB114	東 北	5×2		12.3	5.4	
SB117	東 西	4以上×4		9.6以上	10.8	
SB118	東 北	5×1以上	西 南	12.0	2.7以上	2.4
SB119	東 西	5×2		15.0	6.0	3.6
SB133	南 北	2以上×1以上		5.1以上	3.0以上	
SB135	東 西	4×2		7.8	4.5	
SB136	南 北	4×2		7.8	4.5	
SB137	東 西	5以上×2		12.6以上	6.0	
SB138	東 西	6以上×2	北	18.0以上	6.0	
SB139	東 西	5以上×2		15.0以上	6.0	2.7
SB140	南 北	3×1以上		8.1以上	2.7以上	
SB141	東 西	4×2		7.8	4.5	
SB142	東 西	5以上×2		12.3以上	5.4	
SB143	東 西	5以上×2		18.0以上	6.0	

※ SB 118・133・140は第213-2次発掘区、その他は第200次発掘区で検出

堀立柱塀

遺構番号	方 向	規 模 (間, m)	備 考	遺構番号	方 向	規 模 (間, m)	備 考
SA103	東 西	5以上 9.0以上	東へ延びる可能性あり	SA115	東 西	4以上 9.6以上	西へ延びる可能性あり
SA106	東 西	3 4.5		SA116	東 北	7以上 18.9以上	南へ延びる可能性あり
SA109	東 西	7以上 16.8以上	西へ延びる可能性あり	SA134	南 北	2 4.8以上	
SA111	東 西	4 9.0		SA144	南 北	4以上 9.6以上	南へ延びる可能性あり
SA112	南 北	2 5.4					

※ SA 134は第213-2次発掘区、その他は第200次発掘区で検出

建物・塀一覧表

である。このうち S B 119から S B 137に建て替える際には整地が行なわれている。また柱間・柱筋が撤うものは、

S B 107・119 東妻柱列 - S B 108 西側柱列

S B 138 妻・側柱列 - S B 139 側柱列 - S B 143 妻・側柱列

である。なお S B 107東妻柱列は北群の S B 104東妻柱列と、S B 107西妻柱列は同 S B 114東側柱列とそれぞれ柱筋が撤う。南群の掘立柱建物は北群に比べて大型のものが目立つ。S B 117は桁行4間以上の総柱建物で南北廂をもつ東西棟とみられる。S B 138・143は桁行6間以上の東西棟で、S B 139は規模や位置から S B 143の前身建物とみられる。

B 挖立柱構 検出した掘立柱構の方向及び規模は表に示す通りである。他の建物・構と重複し先後関係がわかるものは、

S A 106 → S B 114 S A 111 → S B 135 S A 109 → S A 115 → S B 138

S A 116 → S B 139 S B 143 → S A 144

である。また柱筋・柱間が撤うものは、

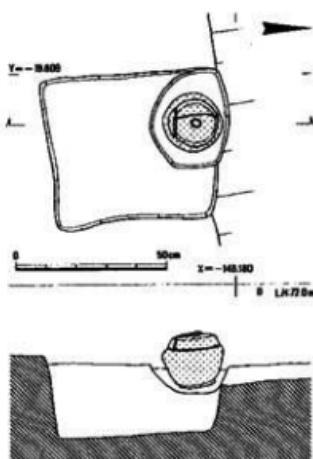
S A 111 西端柱 - S A 112 - S B 114 東側柱列 S A 109・115 - S B 108 南妻柱列

S A 115・109 - S B 117 側・妻柱列 S A 109 東端柱 - S B 110 西側柱列

である。S A 103は発掘区外東へ、S A 109・115は発掘区外西へ、S A 116・144は発掘区外南方へそれぞれ延びるものとみられる。S A 116はS A 115東端柱に取付くものとみられ、その位置は、X = -146,221.040、Y = -19,599.840である。

C 墓壙土坑 S K 120～132 調査区中央付近で直径1.2～1.3m、深さ0.4～0.5mの平面円形、断面半円形の土坑を13基検出した。他の遺構との位置・重複関係から S B 119 の身舎に伴うものとみられる。土坑は身舎の西半の西妻面と北側面に沿ってL字状に二重に配列されている。各土坑間はほぼ等間隔で1.2～1.3mを測る。その形態や配列から埋甕に伴う土坑とみられる。

D 土器埋納土坑 S X 105 S B 104 の西妻柱の西4.2mのところにある柱穴の北西隅に掘られた径0.25～0.3m、深さ0.1mの不整円形の土坑の中に蓋をした完形の須恵器壺Aが納められていた。壺内に内容物はなかった。胞衣壺か地鎮に関係する遺構の可能性がある。なお地鎮に関係すると思われる遺構はこの他に土師器皿が20枚余り出土した S B 139 南側柱列西端の柱穴がある。



土器埋納土坑 SX 105 (1/20)

第213-1次調査 本発掘区では戦前に行われた地下げのために、遺構の大半はすでに失われていた。すなわち、耕土下ただちに黄色粘土の地山があらわれるが、その標高は72.5m前後で、これは後述する北側の発掘区(第213-2次)南端での地山上面の標高73.2m前後よりも0.7mほど低い。したがって目的とした三条条間路および同側溝の確認はできず、12世紀中頃の東西溝1条(S D 145)を検出したのみである。幅0.8m内外、深さ0.4mの素掘り溝で、溝内からは完形の瓦器碗が数点出土した。

第213-2次調査 発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に茶色の堆積土層があり、現地表下約0.4mで黄褐色土の地山があらわれる。発掘区中央部分は第200次調査区南端に続く谷になっており、谷部分の最深部では地山上に厚さ0.5mの茶灰色の整地層がある。遺構検出面は、これらの地山もしくは整地層の上面で、標高は73.2m前後である。

主な検出遺構には弥生時代、古墳時代、奈良時代のものがあり、古墳時代のものには竪穴住居S B 06、掘立柱建物S B 03・04・05、掘立柱塀S A 07、溝S D 08・09がある。S B 06は一辺4.3mの平面方形で、幅0.3m前後の壁溝がめぐるが、削平が著しく0.1mほどの深さが残るのみである。S B 05は2間(3.0m)×2間(3.1m)の縦柱建物。重複関係からS B 06より新しいことがわかる。S B 03は2間(3.7m)×推定2間(3.7m)の縦柱建物。S B 04は2間(3.4m)×2間(3.4m)の建物で、重複関係からS B 03より新しいことがわかる。S A 07は3間(4.7m)以上の塀で、重複関係からS B 03より新しいことがわかる。これらの建物と塀は方眼方位に対して大きく振れているが、各々の振れにも若干の違いがある。S D 08は幅1.0m、深さ0.2m、S D 09は幅0.7m、深さ0.1mの斜行溝。S D 08溝内からは6世紀中頃～後半の土器、埴輪片が出土した。S K 10は南北7.5m、東西5.6m、深さ0.4mの平面不整形の土坑。弥生時代前期の土器、磨製石斧などが出土した。奈良時代の遺構には、掘立柱建物S B 118・133・140、掘立柱塀S A 134がある。重複関係からS B 118が最も古く、S B 140が最も新しいことがわかり、S B 118は第200次調査区の建物S B 117と、S B 140は同調査区の建物S B 139と柱筋が揃う。

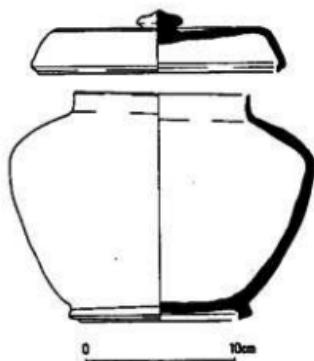
第213-3次調査 地表下ただちに黄色粘土の地山があらわれる。地山上面の標高は73.6m前後で、近隣発掘区内では最も高い。検出遺構は西二坊大路S F 101および同東側溝S D 102と、古墳時代の掘立柱建物S B 01・02の2棟である。いずれの遺構とも上面の削平が著しく、S D 102は、発掘区南端で幅2.0m、深さ0.3mを残すものの、北端近くではかろうじて痕跡をとどめる程度であった。奈良時代の土器片がごく少量出土した。溝心の座標値は、X=-146,200.000、Y=-19,647.880である。S B 01は3間(6.7m)、S B 02は2間(4.0m)の柱列で、東接する第200次調査区へ続く建物であったとみられるが、東側は地下げされていて残存しない。S B 01・02とも、第213-2次調査区の建物と同様に方眼方位に対して大きく振れる。

III. 出土遺物

出土遺物は遺物包含層、溝、柱穴等より出土しており、大半が奈良時代の土器、瓦類である。他に弥生時代・古墳時代前期・後期、鎌倉時代の遺物が若干出土している。遺物は現在整理中のため詳しくは言及できないが、以下に主な遺物について記す。

土器類 時期別にみると、弥生時代については、前期の壺の破片がSK10から始刃石斧と共に出土している。古墳時代前期については布留式中段階に属する土器が各調査区の包含層等より一定数出土しており、周辺に遺構の存在が考えられる。また一点ではあるが、黒斑を持ちタガの突出の高いⅡまたはⅢ期と考えられる円筒埴輪片が第213-2次調査で出土している。古墳時代後期については須恵器、土師器の他にV期の埴輪が包含層、奈良時代の柱穴等から多量に出土している。SD07からはTK43型式の須恵器と共にV期の円筒埴輪と陶棺の破片が出土した。奈良時代については須恵器、土師器が各遺構より出土しているが、今回はSX105出土の遺物について記す。SX105は須恵器壺Aが完形で検出され、出土状態から胞衣壺の可能性が考えられる。壺の中には1/3ほど土がつまっていたが、中からは何も検出されなかった。壺は口径11.6cm、器高14.9cm、高台径10.5cm、胴部最大径23.5cmを測り、肩の張りが強い。高台のつくりは丁寧で高台内側を強くつまみ出し

氣味にヨコナデしている。体部中位より肩にかけてはロクロナデの下にタクキの跡がみられるが、内面はすべてロクロナデで當て具の痕跡はみられない。蓋は口径15.9cm、器高4.1cmを測る。宝珠つまみをもち縁部は鈍角に折れ曲がる。端部は内側下方へ強くつまみ出し、かえり状を呈する。形態よりみて「佐井寺僧道葉」墓出土のものに似ており、奈良時代前期のものと考えられる。鎌倉時代の土器はSD175より瓦器椀と皿が完形に近い形で数個出土している。川越編年II-B型式で12世紀中頃のものと考えられる。



SX105出土須恵器壺 (1/4)

瓦類 現在整理途中であり、型式分類の済んでいるものについて以下に記す。奈良時代の軒瓦は13点出土している。内訳は軒丸瓦6285型式A種5点、6303型式B種1点、型式不明2点、軒平瓦6664型式H種1点、6685型式B種3点、型式不明1点である。そのうち遺構に伴うものは、第200次発掘区中央部整地層から軒丸瓦6285型式A種5点、6303型式B種1点、軒平瓦6685型式B種1点、6664型式H種1点が出土している。その他整地層から、繩目叩の平瓦に混じり、桶巻作りによる格子目叩、平行叩をもつ平瓦が出土している。

IV. まとめ

最後に右京三条二坊十五坪の遺構について若干の考察を述べておく。

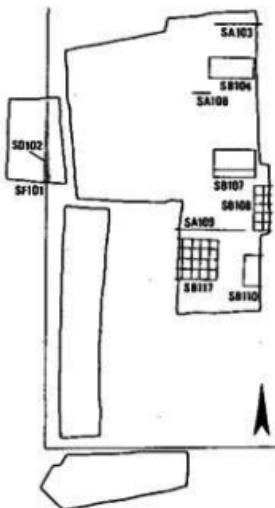
1. 建物配置の変遷

今回十五坪西半の約5割に及ぶ範囲を調査し、その結果第200次発掘区を中心に20あまりの奈良時代の建物・塀を検出した。これらは重複関係や配置から大きく3時期に区分することができる。

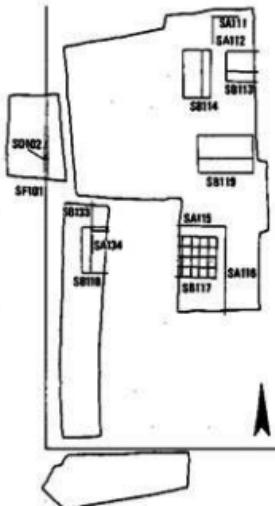
A期 建物4棟(SB104・107・108・110)、塀3条(SA103・106・109)がこの時期に属する。坪の南北中軸線付近にSB108が建てられる。SB104・107、SA109はSB108と柱筋を揃えて建てられる。SB104及びSB107の北側柱列はSA109からそれぞれ70尺、150尺の位置にある。またSA103・106はSB104北柱列から南北へそれぞれ30尺の位置にある。なお土器埋納土坑SX105はこの時期に属するとみられる。

B期 A期の建物のうち、SB107・108・110が残る。坪の北半北寄りと中央北・南寄りで増・改築が行なわれ、建物配置はA期より充実する。坪の北半北寄りではA期のSB104、SA103・106が廃絶し、新たにSB113・114が北側の柱筋を揃えてL字形に建てられる。SB114はSB107とも柱筋を揃える。また、SB113ではSA111・112が建てられる。中央北寄りではSB107が途中で廃絶し、その東妻の柱筋をほぼ踏襲して埋甕土坑を伴うSB119が建てられる。中央南寄りでは大型の総柱建物SB117とSB118が南側の柱筋を揃えて建てられる。SA115はA期のSA109の東3間目以西を改築したもので、SA116とともにSB117を囲む。SB118はその後廃絶し、SB133とSA134が建てられる。

C期 B期の建物・塀が全面的に撤去され、建



A期の建物配置



B期の建物配置

物配置が一新する。坪の北半北寄りでは、当初や小型の S B 135・136が建てられる。その後 S B 135は廃絶し後身建物の S B 141に、さらに S B 142に建て替えられる。中央北寄りでは B 期の S B 119の跡地に S B 137が出現する。坪を南北に二分する位置付近に大型建物の S B 138が、その南側に柱筋を揃えて S B 139が30尺の距離をおいて並列して配置される。さらにその西側に S B 139と南側の柱筋を揃えて S B 140が建てられる。S B 139はその後廃絶し、後身建物 S B 143が S B 138と軒を接して建てられる。さらに S B 143は廃絶し、その後 S A 144が建てられる。

各時期の年代は、出土遺物より A 期 - 奈良時代中葉、B 期 - 同後葉、C 期 - 同末葉と考えられる。

十五坪の宅地は、坪の南北二等分線の推定位置に各期を通じて建物を配置していることや、建物規模が大きく配置が整然としていることから、奈良時代中葉以降一坪利用であり高位高官の邸宅として割り当てられていたと考えられる。

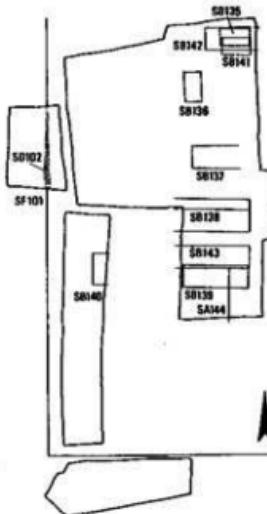
2. 西二坊大路

次に今回の調査で東側溝を検出した西二坊大路について若干の検討を加えたい。まず西二坊大路東側溝の調査例は他に薬師寺の西側で検出されたものがある。^{註1)} 今回検出した東側溝との側溝心の方位の振れは国土方眼方位北に対し西 $0^{\circ} 35' 52''$ となり、国土方眼方位北に対し西 $0^{\circ} 15' 41''$ である朱雀大路主軸に比べ大きく西に振れる。次に朱雀大路・二条大路などより推定できる西二坊大路中軸線は、今回検出した東側溝心より西へ約2.5～3 mの位置にある。この場合大路の幅員は道路側溝心々間で約5～6 mに復元できるが、他で検出した大路の幅員はこれよりもはるかに広く、西三坊大路の例では60大尺（約21.3 m）^{註2)}を測る。また幅員を道路側溝心々間で60大尺と仮定して西二坊大路を復元した場合、1988年度の右京三条三坊一坪第169次調査で検出した建物や井戸が路上にかかる。以上のことから、右京三条二坊十五坪における西二坊大路東側溝の位置は薬師寺付近よりも西側にずれ、その幅員は道路側溝心々間で60大尺を越えることはないと考えられる。

（中井 公・鐘方正樹・松浦五輪美・安井宣也・川越邦江・中島和彦・宮崎正裕）

註1) 奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』（1987）

註2) 奈良国立文化財研究所『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』（1977）



C期の建物配置

平城京右京三条三坊二坪の調査 第196-4・5次、第213-4次

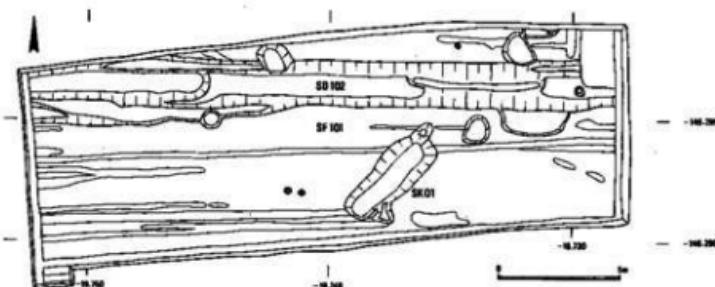
I. はじめに

本年度は新たに右京三条三坊二坪でも3箇所に発掘区を設け調査を行なった。第196-4次調査は三条条間路の確認を、第196-5次調査は二・七坪境小路の確認をそれぞれ目的とした。また第213-4次発掘区は、坪内北東部の一画にあたる。

II. 調査の概要

第196-4次調査 基本的な層序は、耕土下に灰色あるいは褐色系の堆積土4層があり、地表面下約0.5m（標高72.7m前後）で遺構検出面となる。遺構検出面は明黄色土の地山もしくは地山上に堆積する灰褐色土の上面である。三条条間路S F 101と同北側溝S D 102を検出し、さらに古墳時代の土坑S K 01を検出した。S F 101は南側溝が未検出のため幅員は不明だが、北側溝から南7mまでを確認した。路上に舗装などの痕跡はみられない。北側溝S D 102は幅1.9~2.5m、遺構検出面からの深さ0.4~0.7mの素掘り溝である。溝内には暗灰褐色土が堆積し、奈良時代の土師器、須恵器、瓦の小片が少量出土した。溝心の座標値はX = -146,283.430、Y = -19,740.000である。土坑S K 01は長辺4.5m、短辺1.8mの平面隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さ0.4mである。埋土は炭混じりの黒灰色土で、布留式中段階の土器片と、少量のV様式の弥生土器片が出土した。

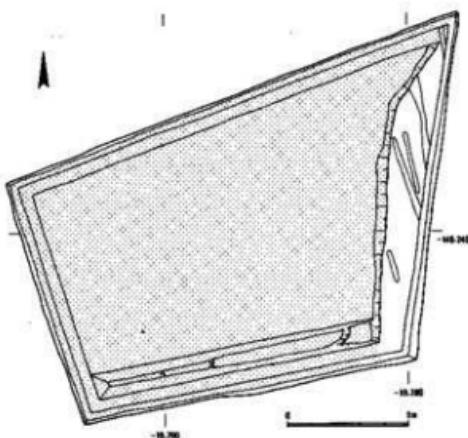
第196-5次調査 耕土下に灰色砂土の堆積土1層があり、発掘区東辺部分のみ表土下約0.3m（標高71.9m前後）で黄色粘土の地山があらわれるが、これ以西は旧河道にあたり、遺構は失われている。河道幅は不明だが、東岸から15mまで確認し、地山上面からの深さは1.5m以上である。埋土は灰色系の粘土と砂が互層になっており、中世から近世にかけての土器片少量が出土した。発掘区に北接して南西から北東にかけて斜行する水田畦畔の乱れがみられ、旧河道の存在が予期されたが、この東岸を確認したことになる。平成元年度調査（第169・173・182次調査）で一部検出した河道に続くとみられる。



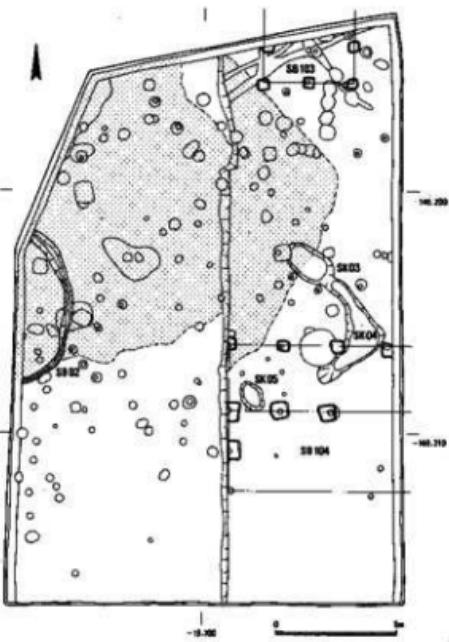
第196-4次発掘区平面図 (1/250)

第 213-4 次調査 もとは段差があった東西 2 面の水田で、発掘区東半では耕土直下（標高 72.9m 前後）で黄褐色粘土の地山があらわれるが、西半は耕土下に灰色系の堆積土 2 層があり、地山検出面は 0.3 m ほど低い。また、発掘区北半は本来、西に低く傾斜する谷であったが（網目部分）、古墳時代はじめ頃には埋没している。主な検出遺構は、古墳時代の竪穴住居 1 棟、土坑 3 、奈良時代の掘立柱建物 2 棟がある。竪穴住居 S B 02 は、谷埋没後に構築されており南北 6.4 m 、東西 2.0 m まで確認したが、発掘区外西に続くため全体規模・平面形状は不明。幅 0.3 m ~ 0.5 m 、深さ 0.2 ~ 0.4 m の断面 V 字形の壁溝がめぐる。土坑 S K 03 は長径 2.2 m 、短径 1.3 m の平面長円形で、深さ 0.5 m 。土坑 S K 04 は平面逆 L 字形で、深さ 0.1 m と浅い。土坑 S K 05 は東西 1.2 m 、南北 0.9 m の平面不整円形で、深さ 0.1 m 。住居壁溝とこれら 3 土坑からは布留式中段階の土器が出土した。掘立柱建物 S B 103 は梁間 2 間（3.6 m ）、桁行 1 間（1.5 m ）以上の南北棟建物で発掘区外北側に続く。S B 104 は削平が著しく身合南側柱列の柱穴を欠くが、桁行 3 間（6.3 m ）以上、梁間 3 間（6 m ）の北廂付東西棟建物とみられ、発掘区外東へのびる。柱間寸法は桁行 2.1 m 等間、身合梁間 1.65 m 等間で、廂の出は 2.7 m である。

（中井 公・川越邦江）



第 213-4 次発掘区平面図（1/250）
（網目部分は谷の範囲）



第 213-5 次発掘区平面図（1/250）
（網目部分は旧河道の範囲）

2. 近鉄西大寺駅北地区市街地再開発事業に伴う調査

奈良市では近鉄西大寺駅北側の近鉄奈良線、一条通り、秋篠川に挟まれた地域で市街地再開発事業の計画を立てた。事業総面積は19,000m²あり、高層の商業ビルと近鉄西大寺駅北側駅前広場を建設しようとするものである。今回の調査はそのうちの駅前広場予定地内に仮設店舗を建設するための事前発掘調査である。



調査地位置図 (1/20000)

平城京右京一条二坊十四坪の調査 第207次

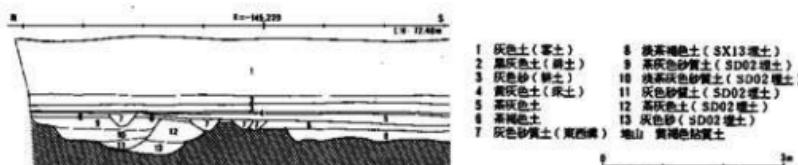
Iはじめに

今回の調査は奈良市西大寺栄町240-1番地で実施した。調査地は平城京の条坊復元で右京一条二坊十四坪の北辺にあたり、一条条間路と十一・十四坪境小路の交差点部分をふくむ坪内の北東隅に推定される。^{註11)} 調査地北側の西隆寺跡の発掘調査では、金堂、東回廊、塔、南面築地、一条条間路北側溝と西隆寺造営に先行する十・十五坪境南北小路、建物、井戸などを検出している。調査では東西8m、南北25mの発掘区を2箇所に設定して、合計面積450m²を発掘した。調査期間は平成2年8月16日から平成2年10月31日である。

II検出遺構

発掘区の土層堆積状態は地表面から0.8mまでは灰色土の客土、その下に耕土、床土、奈良時代遺物包含層の茶灰色土と茶褐色土が堆積し、地表下1.2mで黄褐色粘質土の地山となる。遺構はこの地山上面で検出した。遺構面の標高は概ね70.8mである。

検出した遺構には、古墳時代中期の河道と土坑、奈良時代の道路2条、溝2条、掘立柱



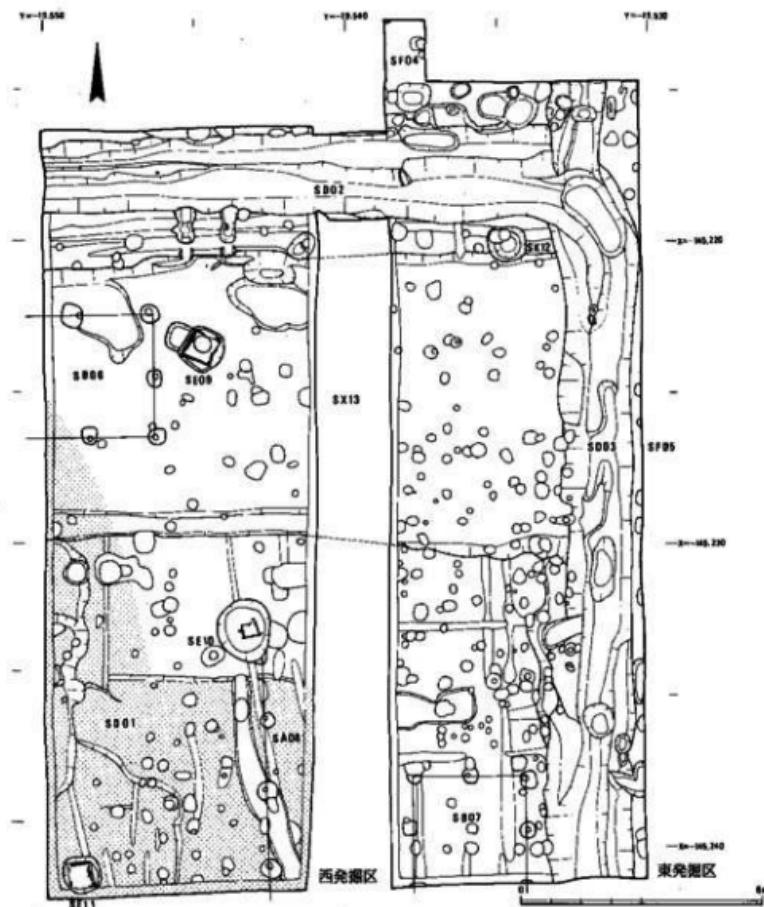
西発掘区東壁堆積土層図 (1/100)

建物 2 棟、掘立柱塙 1 条、井戸 3 基、土坑 1 基などがある。

S D 01 古墳時代中期の南北に流れる河道で東岸を検出した。埋土から 5 世紀後半に属する土師器高杯・壺が出土した。

条坊関連遺構 発掘区の北辺で東西溝 S D 02、東辺で南北溝 S D 03を検出した。その位置からみて、S D 02が一条条間路南側溝、S D 03が坪境小路西側溝、S F 04が一条条間路の路面、S F 05が十一・十四坪境小路の路面に相当する。

S D 02 一条条間路南側溝である。溝の幅 2.4m、深さ 0.7m、長さ 19m 分を検出した。



発掘区平面図 (1/200)

東端で S D 03と合流し、南へ流れを変える。溝内の埋土は大きく2層に分かれ、掘り直されたことがわかる。新溝には護岸ための杭列が残る。埋土から奈良時代前半の土器と瓦が大量に出土した。新溝心はX = -145.217.76、Y = -19.542.00である。

S D 03 坪境小路西側溝である。溝の幅2.2m、深さ0.5~0.7m、長さ26m分を検出した。北端でS D 02と合流する。合流部から南の溝埋土は大きく2層に分かれ、掘り直されたことがわかる。新溝の西岸には護岸ための杭列が残る。一条条間路上のS D 03は幅が狭く、掘り直しをされていないことから、旧溝は一条条間路上を南北に貫くが、新溝になると一条条間路の溝は埋められていた可能性もある。埋土からは奈良時代前半の土器と瓦が大量に出土した。新溝心はX = -145.231.00、Y = -19.531.89である。

また、S D 02・03出土遺物の年代と両道路面で奈良時代後半の土坑や柱穴を検出したことから、両側溝とも奈良時代後半には埋められていた可能性が考えられよう。

S B 06 坪内の北辺で検出した2間×1間以上の東西棟建物である。柱間は桁行2.4m、梁間2.1mである。遺構の重複関係からS X 13より古い。

S B 07 坪内の東辺で検出した2間×2間以上の南北棟建物である。柱間は桁行2.4m、梁間2.1mである。

S A 08 西発掘区の南東隅で検出した柱間3間以上の南北方向の掘立柱構である。柱間は2.4m等間である。遺構の重複関係からS E 10より古い。

S E 09 S B 06の東側で検出した井戸である。一辺1.4m、深さ1.2mの方形掘形の中に隅柱縦板組横桿留めの方形井戸枠をもつ。井戸底には径50cm、高さ15cmの曲物を据え水溜めとする。井戸枠内から奈良時代後半の土器と共に製塩土器が多く出土した。

S E 10 S A 08の北側で検出した井戸である。径1.8mの円形掘形の中に隅柱縦板組横桿留めの井戸枠をもつ。井戸枠は土圧で潰れているため、完掘できなかった。井戸枠内からは奈良時代中頃の土器が出土した。遺構の重複関係からS A 08より新しい。

S E 11 西発掘区の南西隅で検出した井戸である。径1.2m、深さ1.1mの円形掘形の中に隅柱縦板組横桿留めの方形井戸枠をもつ。井戸枠は縦板の残りが悪くその一部を残すのみである。井戸枠内からは奈良時代後半の土器が出土した。

S K 12 東発掘区で検出した円形の土坑である。掘形は径1.25m、深さ0.9mであり、底に木葉、木屑が堆積していた。埋土上層から奈良時代中頃の須恵器平瓶が1点出土した。

S X 13 S D 02と並行する東西方向の浅い溝状遺構である。幅9m、深さ0.3mであり、長さ20m分を検出した。遺構の重複関係からS D 03より新しい。埋土から奈良時代後半の土器と西隆寺関係の瓦が出土した。

このほかに多くの柱穴を検出したが、建物としてまとまらない。柱穴、土坑の時期は出土遺物が少なく決定できない。

III 出土遺物

古墳時代の遺物は S D 01から中期の土師器が、S D 02・03から円筒埴輪片、陶棺片などが出土した。奈良時代の遺物は土器、瓦、金属製品、銅錢、土製品、石製品などが多量に出土した。S D 02・03の側溝から出土したものがほとんどである。側溝出土遺物には鬼瓦、軒瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、奈良三彩、硯、土馬、小型模造土器、土製有孔円板、墨書き土器、銅錢、鉄製品、素文鏡、砥石などがある。遺物整理中であるため概要を記す。

1. 瓦類

出土した瓦類の総量は、整理箱 196 箱におよぶ。大多数は丸瓦・平瓦であるが、軒瓦 70 点、鬼瓦 3 点、文字瓦 1 点、綠釉磚 2 点がある。

軒瓦はすべて奈良時代のもので、細片のため型式の同定が困難な 17 点を除いて、14 型式 18 種 23 点の軒丸瓦と 15 型式 22 種 31 点の軒平瓦に分類できる。型種と点数の内訳は別表のとおりである。

鬼瓦は S D 02 から平城宮式鬼瓦 1 点、S X 13 から南都七大寺式鬼瓦 2 点が出土した。平城宮式鬼瓦は、蹲踞した姿の全身像をあらわし、毛利光俊彦氏分類^{注2)}の平城宮 I 式 A と同様である。平城宮軒瓦編年 I 期（和銅元年～養老 5 年）に位置づけられている。

南都七大寺式鬼瓦は、ともに口唇部分の小片だが、同一個体と思われる。毛利光氏分類

軒丸瓦	S D 02	S D 03	S X 13	S E 09	十四坪内部	全 体
6131 B	1					1
6133 N O 種別不明					1 1 1 1	4
6134 A				1		1
6225種別不明	2				1	3
6235種別不明					1	1
6273種別不明	1				1	1
6282 D					1	1
6284 C	1	1				2
6291 C		1				1
6307 A	1					1
6308 A B D		1 1	1		2 1	3
6311 B			1			1
6313 B		1				1
6348 A					2	2
型式不明	1	1	2		1 2	1 6
合 計	7	6	4	1	2 1	3 9

出土軒瓦計数表

軒平瓦	S D 02	S D 03	S X 13	S E 09	十四坪内部	全 体
6542 A						1
6641 E 種別不明	1	1				1 2
6643 B						1
6646種別不明						1
6653 B C C b 種別不明	1 1 1					1 1 1
6664 C D		1				1 1
6665 A		3				3
6668 A						1
6681 F 種別不明				1		1
6685 A	1					1
6691 A	1			1	1	3
6719 A						1
6721 D H				1		1
6761 A				2		2
6775 A						1
型式不明						1
合 計	6	8	4	1	1 5	3 2

の南都七大寺V式A、もしくは藤田さかえ氏分類の長岡宮式鬼瓦に酷似するが、外縁珠文の形状や下牙を有する点など、これまでに知られている両者の例とは異なる。

文字瓦は十四坪内の遺物包含層から出土した。平瓦の凹面に「理」の刻印がある。刻印「理」はa～lの12種類が知られているが、今回の出土例はgである。

綠釉磚はSD 02から1点、SX 13から小片が1点出土している。(原田憲二郎)

2. 土器類

調査区全域から多量の奈良時代の土師器・須恵器が出土した。出土土器の大半は、SD 02・03から出土したもので遺物整理箱で319箱に及ぶ。現在、整理中のため、SD 02・03、SE 09出土土器及び墨書き土器の概略を記すだけにとどめる。

SD 02・03出土土器 調査区の遺構から出土した土器の約55%がSD 02・03から出土している。土師器・須恵器とともに器種が豊富で、奈良時代前半の好資料となるであろう。この他、製塩土器、小型模造土器(11・12)がある。

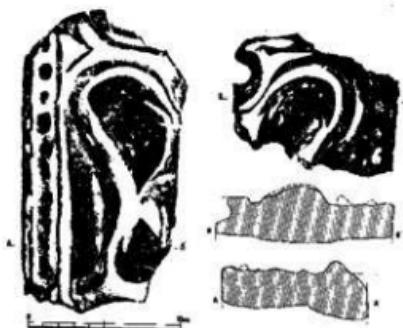
SE 09出土土器 奈良時代後半の特徴をもつ土師器・須恵器、製塩土器が遺物整理箱で3箱分ある。土師器(4)は、器面が磨滅し調整手法が判らないものが多い。須恵器も焼成の悪いもの(1・2)がめだつ。須恵器壺B(3)は、残存状態が比較的良好である。高台をもつ底部と卵形の体部に直立する口縁部からなり、肩部には一对の把手がつく。壺内には、壺を2等分する仕切板があったらしく、厚さ5mm程の粘土板の一部とその貼りつけ痕跡がみられる。体部外面を叩きで成形したのち、体部下半をヘラケズリ、上半をナデで調整する。製塩土器(5・6)は、SE 09から出土した遺物の30%を占めている。大半のものが破片であるため全体の形が判るもののが少ない。

墨書き土器 墨書き土器は総数19点に及ぶ。SD 02から2点、SD 03から11点、SD 09から2点、SE 11から1点、遺物包含層から3点出土した。須恵器鉢1点の他は、すべて須恵器または土師器の杯に記されている。記載内容・位置・器種は別表に示すとおりである。

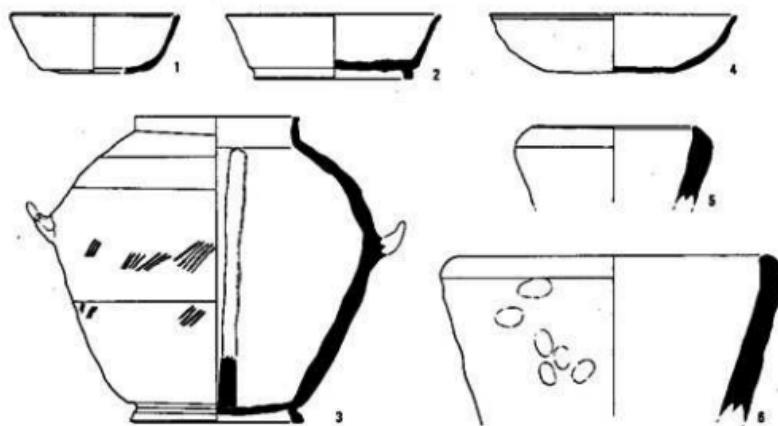
(三好美穂)

3. その他の遺物

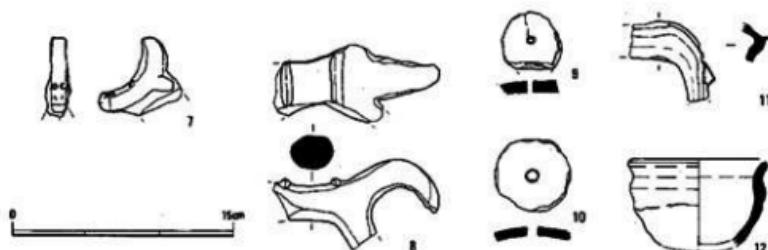
鉄製品 鉄斧(13・14)と刀子、鉄釘がある。13は無肩式の手斧でSD 02出土。14は有肩式の手斧でSD 03出土。13・14は共に鍛造で厚さ0.3cmの鉄板を折り曲げて中室の袋部



SX 13出土鬼瓦(1/4)



SE 09 出土土器 (1/4)



SD 02・03 出土遺物 (1/4, 12は1/2)

記載内容	器種	記載位置	出土遺物	記載内容	器種	記載位置	出土遺物
1 十	須恵器	杯or盃 底部外面	SD 0 2	11 小カ垂 十カ	鉢A	底部外面	SD 03
2 私		杯B	"	12	杯or盃	"	"
3 出當口		杯A or B 口縁部外面	SD 0 3	13 一十	鉢A	"	"
4 井		杯B蓋	"	14 南カ	杯or盃	"	SE 0
5 口		"	"	15 □	杯B蓋	頂部外面	"
6 床		杯A	"	16 東	杯B	底部外面	SE 1 1
7 十		杯A or B 口縁部外面	"	17 十	"	"	包含層
8 ツ		杯B	"	18 原カ	杯or盃	"	"
9 フ		杯A or B 口縁部外面	"	19 日カ□	"	"	"
10 口		杯or盃 底部外面	"				

墨書土器一覧表

をつくる。刀子と鉄釘は S D 03から出土。共に銹化が進み原形をとどめない。

銅製品 銅鏡(15)、帶金具の巡方(16)と蛇尾(17)がある。15は小型の素文鏡で S D 03出土。面径は4.5 cm (1寸5分)あり、周縁を凸面側に厚く造りだしている。16は巡方の表金具で、遺物包含層出土。平板形式のもので、内面の四隅に鋲足があり、周縁は斜めに面取りする。鋲足の先端は内側に折れ曲がる。17は蛇尾の裏金具で S E 09出土。

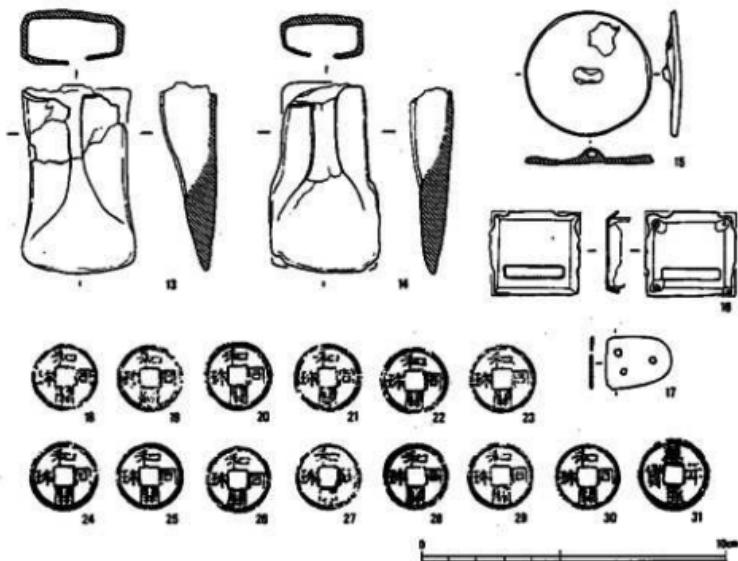
錢貨 和同開珎(18~30) 13点、萬年通寶(31) 1点がある。和同開珎は S D 03の1箇所からまとめて出土した。すべて「隸開和同」と呼ばれるもので古和同はない。25~30は内郭縁の幅が広いものである。31は S E 09の井戸枠内から出土。

石製品 砥石が計39点ある。S D 02から12点、S D 03から17点、S X 13から3点が出土。

祭祀用土器・土製品 土馬23点、小型模造土器2点、土製有孔円板3点がある。S D 02から土馬9点(7)、小型模造土器甕(12)が出土した。S K 03から土馬14点(8)、小型模造土器甕(11)、土製有孔円板3点(9・10)が出土した。

IVまとめ

今回の調査で、右京一条二坊の条間路南側溝が初めて確認できた。調査地北側の西隆寺跡の調査で検出した北側溝とで、道路側溝心心幅は15.8mに復元できる。坪境南北小路は西隆寺金堂跡の調査で確認されており、この西側溝の延長に S D 03がある。この調査では

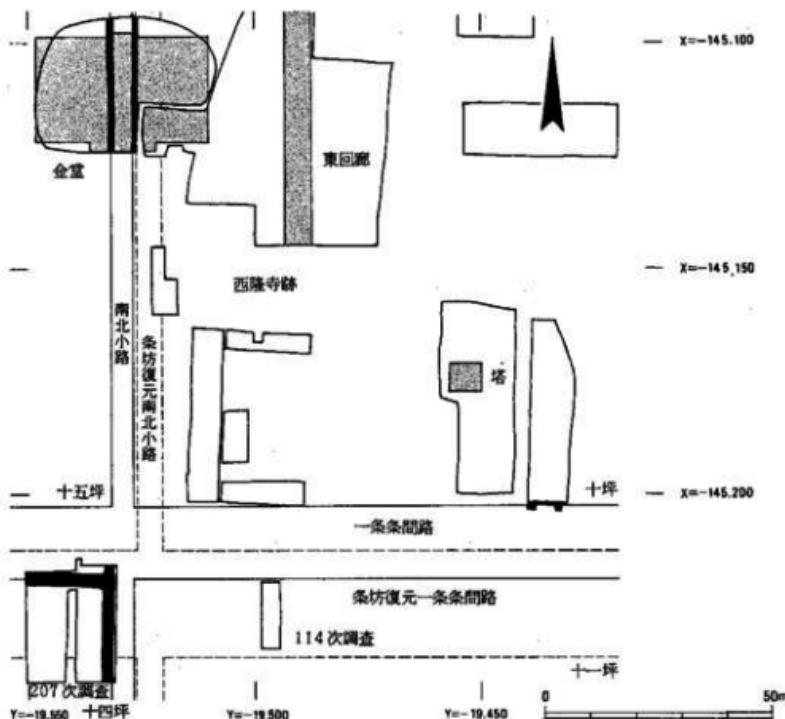


出土鉄製品・銅製品・錢貨 (1/2)

南北小路心が条坊計画道路心より西へ20尺程ずれることが判明している。また、西隆寺東門心も条坊計画道路心よりも西へ10尺、北へ35尺ずれていることがわかり、右京一条二坊西半の条坊計画が異なることが確認された。今回の調査地でも同様に南北小路西側溝心は西へずれることが確認でき、条間路南側溝も当初考えられていた位置よりも北側で検出された。この推定道路心は条坊計画道路心よりも北へ13.4m(45.2尺)ずれる。

以上のことから、右京一条二坊十四坪でも道路遺構が北、西へずれることがわかり、今後周辺の充分な調査によって、その様相が明らかになるものと考えられる。(篠原豊一)

- 註1) 『西隆寺調査調査報告』西隆寺発掘調査会(1976)
- 註2) 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文瓦兔 - 8世紀を中心として」『研究論集IV』奈文研(1980)
- 註3) 『奈良国立文化財研究所基準資料II 瓦編2 解説』奈文研(1975)
- 註4) 『長岡京古瓦聚成』(第3章 3鬼瓦)向日市教育委員会(1987)
- 註5) 『奈良国立文化財研究所基準資料V 瓦編5』奈文研(1977)



発掘区の位置と条坊のずれ

3. JR奈良駅周辺土地区画整理事業に伴う調査

奈良市が進めているJR奈良駅周辺土地区画整理事業に伴う事前発掘調査の概要報告である。この事業は対象地域が23.6haにも及び、その全域が平城京跡に含まれることから、当教育委員会が数箇年にわたる計画的な継続調査を行なうことになり、昭和63年度から調査を開始し、本年で3箇年目となる。その間、平城京東四坊大路や奈良時代の建物跡を検出するなど、遺構はほぼ良好な状態で残っていることが明らかとなった。

今年度は、多目的ホール建設予定地と、一般住宅建設予定地を中心として、3次にわたる調査(199, 208, 218次)を行なった。なお、昨年度までに実施しつつ未報告の第188次調査及び、個人住宅建設の事前調査として実施した第178次調査についても、併せて記載する。

調査次数	遺 跡	調査期間	面 積
第188次	平城京左京四条五坊一坪	平成元年11月29日～2年3月15日	1,326m ²
第199次	平城京左京四条四坊十六坪	平成2年7月2日～2年8月22日	1,450m ²
第208次	平城京左京四条四坊十三坪	平成2年9月3日～2年12月27日	1,600m ²
第218次	平城京左京四条四坊十六坪	平成2年12月17日～2年2月28日	870m ²
第178次	平城京左京四条四坊十六坪	平成元年7月4日～元年7月5日	25m ²



発掘区の位置と周辺の条坊（枠は区画整理事業の範囲、数字は調査次数）

平城京左京四条四坊十六坪・五坊一坪の調査

第 178・188・199・218 次

I はじめに

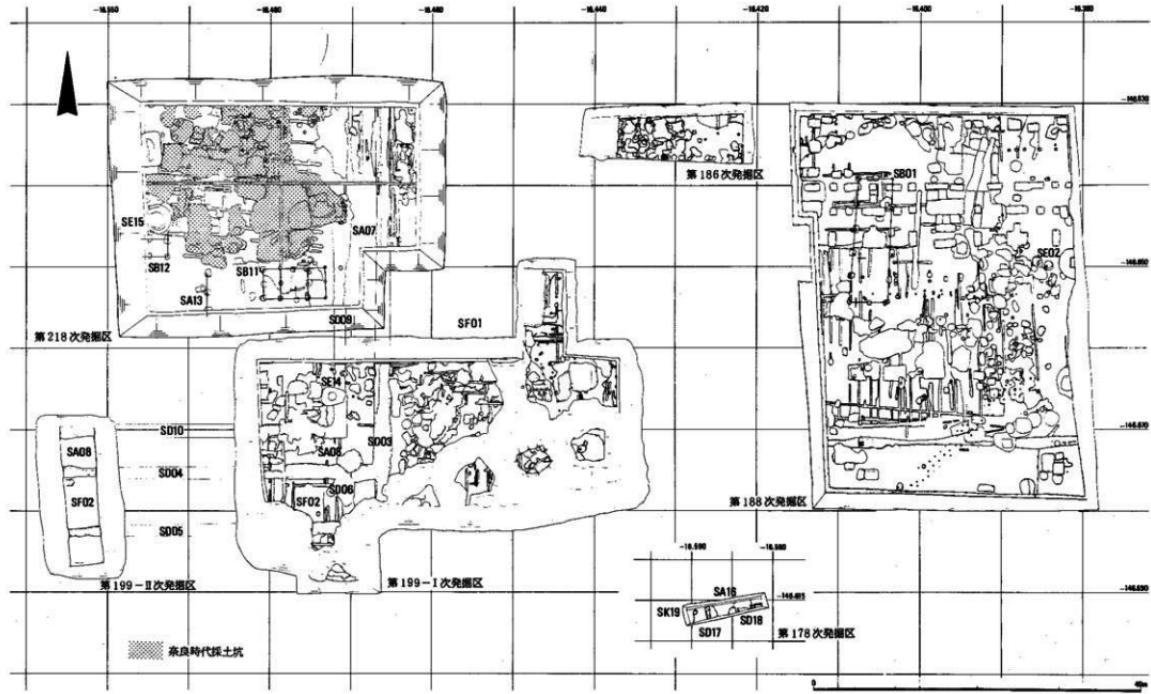
第199次及び第218次調査は、先の第164次・第168次調査で検出した東四坊大路の延長線上に発掘区を設定し、大路と左京四条四坊十五・十六坪坪境小路との交差点並びに左京四条四坊十六坪内の土地利用状況の把握をめざした。第188次調査は東四坊大路の東側に発掘区を設定し、左京四条五坊一坪内の状況把握並びに左京四条五坊一・二坪坪境小路の検出を目的とした。また第178次調査は、調査地が左京四条四坊九・十六坪坪境小路推定地にあたっており、この検出を目的として発掘区を設定した。

層序 旧国鉄操車場内は造成土が厚く、概ね2.5~3.0mに及び、その造成土を取り除くと旧水田耕作土である黒色粘土となり、地区によっては幾分異なるものの、この上面より0.4~0.7mで黄灰色（青灰色）粘土層となる。

II 掘出遺構

第188次調査 当初の目的を左京四条五坊一坪内の状況の把握と、左京四条五坊一・二坪坪境小路の検出においても、発掘区北側は旧国鉄建築物の基礎によって擾乱され、更に南側においても一面に広がる中世の粘土採掘土坑によって削平を受けており、最終的に奈良時代の遺構は、建物1棟と井戸1基を検出できたに過ぎない。S B 01は梁間2間、桁行5間の南北棟建物である。柱間は部分的に長短があるものの、梁間8尺、桁行が10尺となる。また、S E 02を発掘区東壁際で検出した。掘形は南北3.5m、東西3m以上で、東側は発掘区外に延びる。土層断面の観察により、掘形は2段に掘られていたことを確認した。上段部分の壁面が摺鉢状になっているのに対し、下段部分の方はほぼ垂直に掘り込まれている。枠材は、一本を割り貫いてから半截し、それを組み合わせて使用している。その寸法は、内径約1.0m、深さ3.1mである。掘形の上段では、更に外側に板材を井桁状に組んでいたらしく、一部枠材が残存していた。出土遺物は少なく、時期は平城宮土器のIVに比定できる。また、出土した須恵器碗の中に火を受けているものも含まれており、祭祀に使用していた可能性も指摘できる。奈良時代以後の遺構としては、先述の中世粘土採掘土坑や近世の井戸及び溝がある。中世粘土採掘土坑は、粘土層がなくなる深さに達すると掘削を停止する。埋土に瓦器片を含んでいる。近世の井戸は全部で2基検出した。遺物は少なく土器片がいくつか出土したに過ぎない。

第199次調査 発掘区西半分で東四坊大路西側溝、左京四条四坊十五・十六坪坪境小路及び両側溝、他に十六坪を限る築地とその雨落溝と思われる溝、井戸1基を検出した。一方、発掘区東半分では旧国鉄機関庫屋舎の基礎による擾乱が著しく、更には一面に広がる中世粘土採掘土坑によって削平を受け、当初目的とした東四坊大路東側溝を始めとした奈



第178·186·188·199·218次调查发掘区平面图 (1/500)

良時代の遺構は検出できなかった。検出した S D 03 は幅約 2.3m、深さ約 0.4m の南北素掘り溝、S D 04 は幅約 1.8m、深さ約 0.3m、S D 05 は幅約 1.5m、深さ約 0.3m の東西方向の素掘り溝である。S D 03 は東四坊大路西側溝、S D 04 は四条四坊十五・十六坪境小路北側溝、S D 05 は同南側溝に相当する。交差点では大路西側溝 S D 03 が南北へ貫流するのに対し、小路北側溝 S D 04 は大路西側溝 S D 03 に流入する形で終わっている。S D 04 から S D 05 に路面を浸食する形で流れる幅約 1.4~3.0m、深さ約 0.4m の南北方向の溝 S D 06 を併せて検出した。氾濫によるものかと思われる。また、S D 03 の西側に並行する幅約 1.5m、深さ約 0.2m の南北方向の S D 09 を検出した。この溝は、約 3m の幅を保ちつつ西へほぼ直角に折れて、S D 04 に並行する S D 10 へと続く。こうした状況から、両溝間には、坪を限る築地が想定でき、従って S D 09・10 は共に築地雨落溝と考えられる。S E 14 は S D 09 埋土上から掘り込まれる掘形が平面方形の井戸で、枠材はみられない。出土遺物は少ないが、出土土器からみて、この井戸の時期は平城宮土器のⅣ~V に相当すると思われる。また、「郡」の墨書のある須恵器杯が 1 点出土している。

第218次調査 第199次発掘区のすぐ北隣に発掘区を設定し、第199次調査で検出した東四坊大路西側溝、坪東限の築地とそれに伴う雨落溝を再確認し、かつ十六坪内の状況を把握することを目的とした。条坊に関する遺構については、当初の予想どおり並行する 2 条の南北溝を検出した。S D 03 は幅約 1.5m、深さ約 0.2m、S D 09 は幅約 1.5m、深さ約 0.1m である。S D 03 は東四坊大路西側溝、S D 09 は築地の雨落溝にあたる。S D 03 より東側では先の第188次、199次調査で多く確認した中世粘土採掘土坑により削平されていた。また S D 09 より西側では、かなりの部分に厚さ 0.3m 前後の黄灰色粘質土の整地が施されていた。それ故、この面では遺構を明確に検出することが困難であったため、整地層を取り除いて遺構検出を行なうこととした。整地層下では一辺約 2~4m 前後の不整形な土坑をほぼ一面に検出した。深いものは整地層下辺より約 0.7m、浅いもので 0.3m 程度である。上面の整地層では多量の奈良時代の土器片が出土したが、土坑の埋土からは少量の奈良時代の土器片が見つかったに過ぎない。こうした土坑の性格については不明である。ただ、隣接した発掘区で検出した瓦器片が出土する中世粘土採掘土坑とは、その規模、深さ及び掘り方などからみて、幾分趣を異にするものである。出土遺物や土層断面の観察などから、奈良時代に埋まったものとみて差し支えない。この他には、発掘区西壁際で S E 15 を、また整地の及ばない発掘区南東部分で建物 2 棟、柱列 1 条を検出した。S E 15 については、枠材はなかったが埋土から数点の墨書き土器などが出土した。時期は平城宮土器のⅢに相当する。S B 11 は梁間 2 間、桁行 4 間の東西棟で間仕切りを持つ。柱間寸法は梁間、桁行とも 1.8m 等間である。S B 12、S A 13 は先述の奈良時代の土坑に重複する位置で検出したもので、柱間、規模等については詳らかでない。なお、いずれの柱穴も奈良時代整地層下

から掘り込まれたものであることが、土層断面観察の結果明らかとなった。

第178次調査 発掘区内では、地表下約0.7mまで造成土、旧水田耕作土が堆積し、その下の黄灰色粘土上面が奈良時代の遺構面となる。検出した遺構には、左京四条四坊九・十六坪坪境小路東側溝の他、土坑や素掘り溝がある。SD17は発掘区西側で検出した南北溝である。検出位置からみて、坪境小路の東側溝にあたると思われる。幅2.9m、深さ0.4mの溝底で、更に幅0.4m、深さ0.2mの溝を検出した。埋土は上層位の溝では上層が茶灰色土、下層は茶灰色砂土。下層位の溝は茶灰色土である。下層位の溝には杭列が伴っており、この溝が埋まつたのちに上層溝が埋まっている。SD18は、発掘区東側で検出した幅2.4m、深さ0.6mの南北溝である。検出位置からみて、十六坪坪境小路の西を限る築地の雨落ち溝と考えられる。埋土は上下2層あり、上層は黄灰色粘土、下層は茶灰色粘土である。なお、SD17・18間の距離は、SD17の上層位の溝で求めた場合溝心心間距離で4.6m、下層位の溝で求めた場合4.25mとなる。SK19はSD17西肩部で検出した平面円形の土坑である。径0.5m、深さ0.3mで、埋土は炭を含む黒色土である。なお、SD17・18、SK19からは奈良時代後半の土器類が出土している。

III まとめ

今回の調査では、条坊道路の交差点が東四坊大路東側以東の攪乱等により検出できなかつたものの、東四坊大路西側溝と左京四条四坊十五・十六坪坪境小路西側溝を確認し、今後の平城京の条坊復元への資料を得ることができたと言える。なお、文末に今回検出した遺構と、調査地周辺の条坊遺構の国土座標値を整理しておく。このなかで、左京四条四坊十五・十六坪坪境小路は、今回の調査で初めて検出したものであるが、その道路幅員は側溝心心間距離で約7mあり、20大尺(1尺=0.354m)で計画されたと考えられる。また、^{註2)}先の左京五条四坊十四坪における第131次調査において、やはり東四坊大路西側溝を検出しておらず、これらの調査成果との比較検討から、東四坊大路西側溝の国土方眼方位に対する振れは左京四条四坊十六坪と五条四坊十四坪の間ではN 0° 18' 57"となる。

(立石堅志・森下浩行・武田和哉)

地 点 名	X	Y
東四坊大路西側溝心(四条十六坪付近)	-146,670.0	-16,446.3
同 (四条十四坪付近)	-146,852.0	-16,478.8
同 (五条十四坪付近)	-147,393.0	-16,462.25
四条四坊十五・十六坪境小路北側溝心	-146,675.2	-16,475.0
同 南側溝心	-146,682.2	-16,473.0
東四坊九・十六境小路東側溝心	-146,615.7	-16,558.0

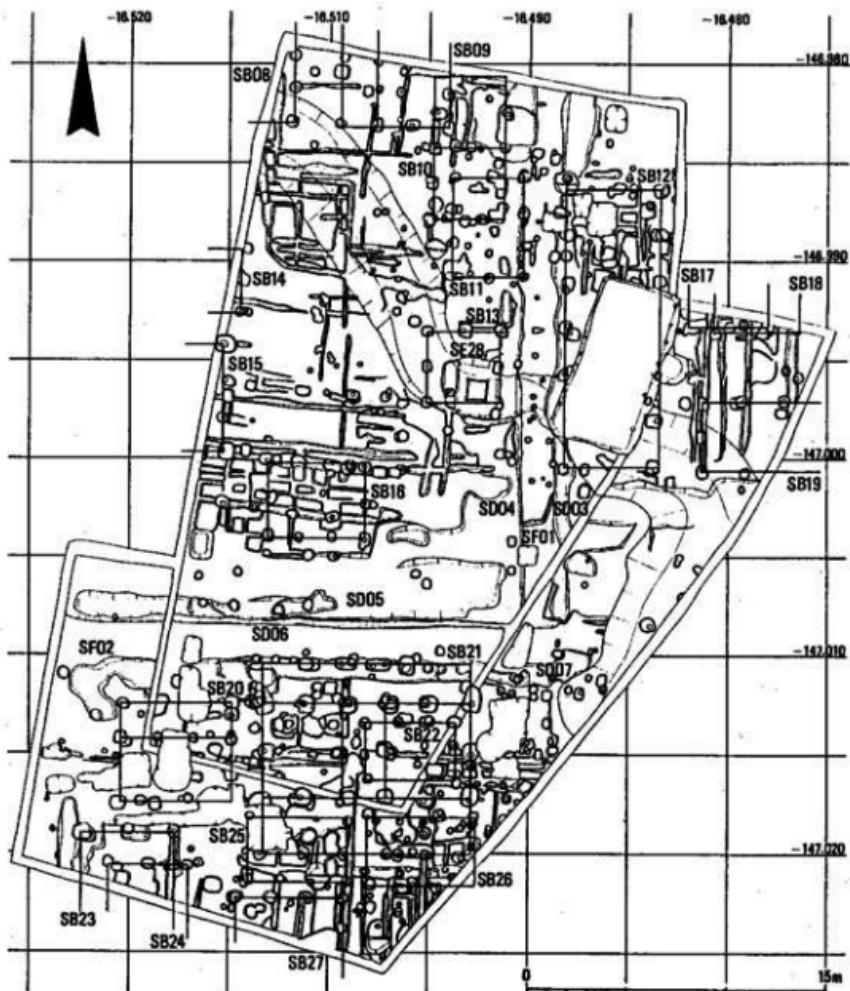
註1) 奈良市教育委員会「平城京東四坊大路、左京四条四坊十四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和63年度』(1990)

註2) 奈良市教育委員会「平城京左京五条四坊十四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和62年度』(1989)

平城京左京四条四坊十三坪の調査 第208次

I はじめに

第208次調査は旧国鉄操車場跡地の南端、関西本線大森町跨線橋の北隣部分で実施した。平城京の条坊復元では、左京四条四坊十三坪に位置し、東側は東四坊大路、南側は四条大路に各々面する四条四坊の南東角に当たる。



第208次調査発掘区平面図(1/300)

層序 この地区でも旧国鉄操車場の造成土は厚く、旧水田耕作土上から約1.8~2.5mにまで及ぶ。旧水田耕作土下約0.5m程度で、黄灰色粘土の地山となる。地山は発掘区南東端から、北西端に向かって緩やかに下っていく。

II 検出遺構

本調査では、奈良時代の遺構として建物20棟、井戸1基と坪内区画道路2条を検出し、更に下層から弥生時代の土坑4基と自然流路1条を検出した。

弥生時代遺構 発掘区南半分を中心に土坑4基を検出した。その形状は平面円形や不整形など様々なものがある。各土坑埋土からは、土器片が少量出土した。自然流路は、発掘区東部中央からやや蛇行しつつ、西流して北西隅に至る。幅は場所により差があり、発掘区中央付近で最も狭く約1.8m、発掘区東壁手前では比較的広く約5mを測る。遺物は流路埋土から、畿内第V様式の特徴を示す甕が1点出土している他は小片が多い。

奈良時代遺構 発掘区中央部から北側にかけて、ほぼ一面に厚さ0.2m程度の奈良時代の整地層があり、更にその下層の地山の黄灰色粘土上面に奈良時代遺構面がある。この面で南北道路S F 01と東西道路S F 02、またこれらに伴う側溝S D 03~07を検出した。S F 01の路面幅は側溝心心間で約3m、S F 02は約4mである。S F 01は発掘区南東部分で西に直角に折れ、S F 02へと続く。側溝の深さは路面より概ね0.2~0.3mと浅い。S D 07は発掘区西壁手前で一旦途切れるものの、西壁の土層断面で再び存在を確認している。S E 28はS D 04埋土を掘り込んで作られており、南北2.5m、東西2mの平面長方形を呈す。枠材は横板組隔柱どめで、基底部に四角に枘組みした角材を据え、この四隅に隔柱を立てている。隔柱は各内側の2方向に溝を掘り、そこに横板を落とし込む構造となっている。井戸枠内埋土からは、木製品や墨書き器などの遺物が多数出土した。時期は平城宮土器のIVに比定できる。建物は20棟を検出したが、詳細は下表の通りである。

遺構番号	方向	柱間(南北×東西)	寸法(幅×奥行)	時期・備考
S B 0 8	?	2.21±?	8×5	
S B 0 9	南北(西南)	2.21±?×3	8×5	面仕切りあり A
S B 0 1 0	南北	2.21±?	8×5	B
S B 0 1 1	南北	2.21±?	8×5	C
S B 0 1 2	南北	2.21±?	8×5	B
S B 0 1 3	南北	2.21±?	8×5	B
S B 0 1 4	南北	2.21±?	8×5	A
S B 0 1 5	南北?	2.21±?×?	8×5	
S B 0 1 6	南北?	2.21±?×?	5.5×7	C
S B 0 1 7	?	2.21±?	8×5	

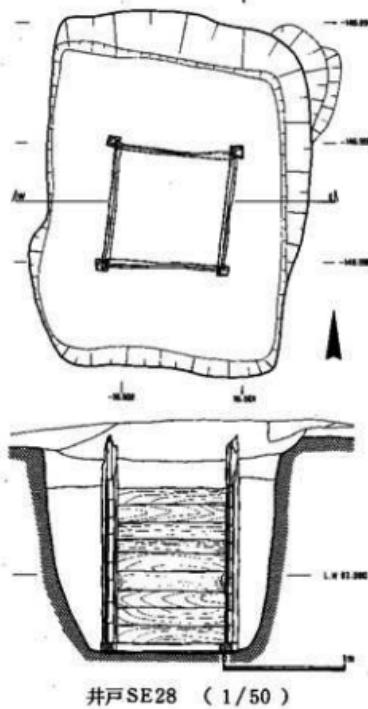
遺構番号	方向	柱間(南北×東西)	寸法(幅×奥行)	時期・備考
S B 0 8	?	?	2×2	
S B 0 9	南北(西南)	2.21±?	以上	T × T C
S B 0 1 0	(北面)	2.21±?	以上	T × T C
S B 0 1 1	(北面)	4×2	以上	T × T、北面 T、南面 C
S B 0 1 2	南北	2.21±?	以上	T × T
S B 0 1 3	南北	2.21±?	以上	T × T
S B 0 1 4	南北	2.21±?	以上	T × T
S B 0 1 5	南北	2.21±?	以上	T × T
S B 0 1 6	南北	2.21±?	以上	T × T
S B 0 1 7	?	?	5.5×5.5	

IIIまとめ

占地 当初めざした十三坪内の状況把握については、坪内区画道路の確認などの成果を得た。平城京の条坊計画の中で、今回検出した坪内区画道路S F 01・02の占める位置について考察する。本年度199次調査や、先に奈良県立橿原考古学研究所が行なった左京三条^{註3)}四坊十二坪の調査で得られた条坊関連遺構の座標値及び国土方眼方位に対する振れなどをもとに、十三坪の条坊計画線の交点の座標を求めた。(次表)これをもとにS F 01・02の座

標を検討すると、S F 01は坪を東から3分の1ずつに分割する東側の線上に、またS F 02についても坪を南北に2分する線上に、各々ほぼ重なることが判明した。このことから、宅地割決定後、それに従い道路が造られたと考えられ、S F 01・02は十三坪内部を区画する機能を持っていたと言える。また、S D 07は発掘区西壁手前で一旦途切れるが、この空白部分のほぼ中心が坪を東西に二分割する線上に当たることから、ここはS F 02から、南接する宅地内へと通じる出入口であった可能性が指摘できる。なお、このように十三坪内の区画割りを坪に面する側溝心間の距離ではなく、条坊の計画線間の距離を基準に行なっている点からすると、十三坪の区画割りが平城京の条坊施工と余り差のない時期に着手されたらしいことがうかがわれる。

遺構の時期的変遷 今回検出した建物跡は重複関係が乏しく、これのみで時期的変遷を追うのは困難である。ただ、S F 01・02及びそれに伴う側溝やS E 28との重複関係、また建物相互間の位置関係より、およそ4時期の変遷が考えられる。まず、S F 01・02とその両側溝に先行する建物や他の遺構は見当らず、これは先述の占地の項で行なった考察とも矛盾しない。したがってS F 01・02とその



井戸 SE28 (1/50)

(1小尺 = 0.295)	X	Y
十三坪北西角	-146.944.213	-16.588.255
同 北東角	-146.943.684	-16.455.506
同 南西角	-147.076.961	-16.587.524
同 南東角	-147.076.432	-16.484.775

十三坪計画線交点座標値

両側溝は、平城遷都後間もない時期には既に存在していたと考えてよい(A期)。次にS F 01・02に伴う側溝が埋められ、その上から建物が建てられる時期がある(B期)。続いて、S E 28が構築される時期となる。S E 28の年代は平城宮土器のIVに当たり、広廟を持つS B 21等との並存が考えられる(C期)。そして最後に発掘区中央から北側部分を中心として整地がなされる時期がある。この整地土層中から、底部に糸切り痕を残す須恵器壺Mが出土壤していることなどから、この整地は奈良時代末頃に行なわれたとみて差し支えない(D期)。

(立石堅志・武田和哉)

註3) 奈良県立橿原考古学研究所『平城京左京三条四坊十二坪発掘調査報告』(1988)

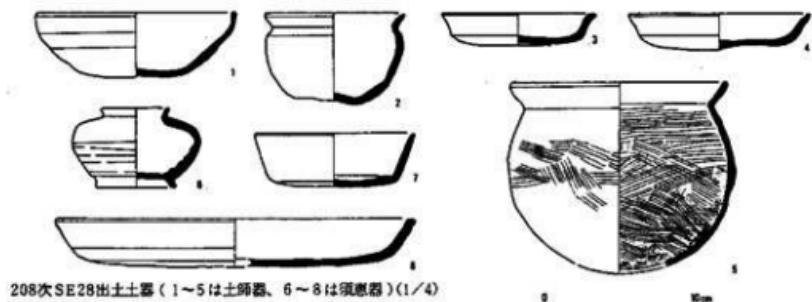
出土遺物

5次にわたる調査で出土した遺物について、以下に概要を述べる。

瓦類 瓦類の大半は丸・平瓦であるが、それ以外に軒丸瓦5点、軒平瓦4点、鬼瓦1点がある。軒丸瓦には6018-C1点、6135-A2点、型式不明2点がある。軒平瓦には6663-F1点、6668-A1点、6671-^{註4)}Aa1点、6685-A1点がある。鬼瓦は小片であるが、毛利光俊彦氏分類の平城宮II式B₁に比定することができる。
(原田憲二郎)

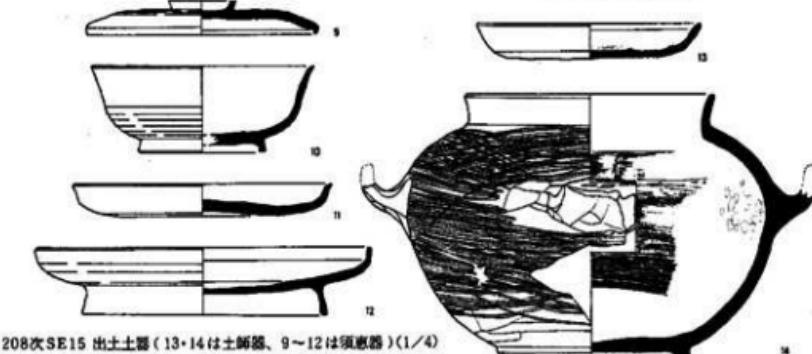
土器類 ここでは、第208次発掘区のSE28、第218次発掘区のSE15、および判読できた墨書き土器をとりあげる。SE28出土土器(1~8)は、形態や調整手法からみて、平城宮土器IVに属するものであろう。SE15出土土器(9~14)には、佐波理鏡を模した土器(9:10)がある。平城宮土器Ⅲに属するものがほとんどであるが、平城宮土器Ⅱの特徴をもつものが若干ある。墨書き土器については、以下に表にしてまとめた。
(池田裕英)

	次 数	記載内容	出土遺跡	基 標	記載位置		次 数	記載内容	出土遺跡	基 標		記載位置
1	199 次	都	SE28	須恵器	軒 B 軒or皿	底部外側	7	218 次	都	SD03	須恵器	底部外側
2	218 次	都	SE15	×	×	×	8	×	都	×	×	×
3	×	飛込	×	×	×	重	9	×	二	×	×	×
4	×	二	×	×	×	口縁裏内面	10	×	小 開	×	×	×
5	×	二	×	×	×	底部外側	11	×	都	—	×	×
6	×	二	SD03	土師器	三 A	×	12	×	七月四	—	×	底部外側 軒or皿



208次SE28出土土器(1~5は土師器、6~8は須恵器)(1/4)

0 10cm



208次SE15出土土器(13~14は土師器、9~12は須恵器)(1/4)

木製品 1は鉄斧柄。着装跡が僅かに観察できる。握りは基部から折れている。第199次調査SE14から出土し、他に曲物底板がある。2は木槌柄で、頭部は折損している。丁寧に調整され、断面は梢円形を呈す。3は鑿柄で、非常に丁寧に作られる。上端に責金具の打ち込み痕がある。共に第218次調査SE15から出土し、他に木簡1、斎串1、留針1、皿か蓋1、ヒョウタン断片数点、曲物底板1がある。木簡は墨書の遺存が悪い。4は鍵錠挽きの容器の蓋。横木取り。内面に石灰のようなものが付着している。5は柄杓の柄で、全長64cm余りの長大なものである。断面は長方形で角を面取する。曲物の身も伴出しているが、側板の遺存状態が悪くて図化していない。底板径は約6.5cm、側板高は5cm。共に第208次調査SE28から出土し、他に斎串14、曲物1、曲物底板2、箸1がある。以上の他に、第188次調査SE02から斎串5、曲物1、網代1、近世井戸から漆器、中世粘土探掘土坑から曲物底板1、遺物包含層から容器蓋1が出土している。

金属製品 6は扉金具と思われる。上端から2cmのところの両面に凸帯がある。凸帯下4.5cm離れて径2cm程の孔を有するが、孔の下半以下は欠失。鉄製の鋳造品で断面には湯冷え時の無数の筋が観察される。類例は平城京東三坊大路東側溝例と長屋王邸宅跡SD4699およびSD4361例がある。第218次奈良時代土坑から出土。7は、片1面と内側面を平らに仕上げる他は比較的丸く造る。刀の把緒金具か蝶口金具と思われる。第188次調査遺物包含層から出土。8は素文銅鏡。僅かに文様状の隆起があるが、表面の銹化が著しく判然としない。第208次調査遺物包含層から出土。

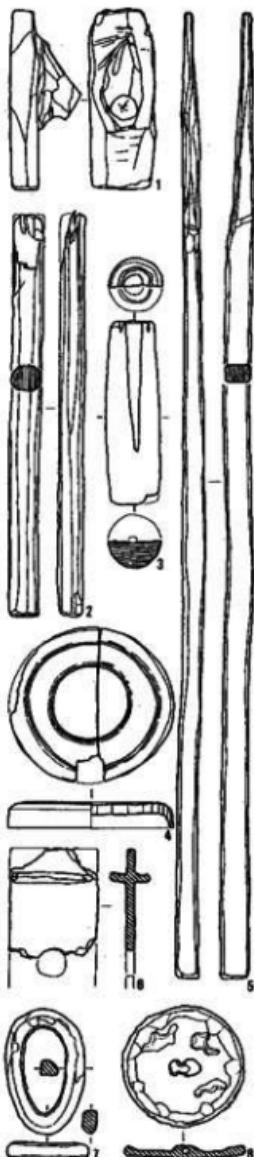
その他 奈良時代のものとしては第218次調査整地層から出土した漆製品の断片がある。また、弥生時代の石鏃が第208次調査整地層と遺物含層から1点ずつ、第218次調査蒸掘り溝から1点出土している。

(関野 勝)

註4) 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦-8世紀を中心として-」

出土木製品・金属製品

(1~6 1/4, 7~8 1/2)



4. 平城京左京三条三坊十一坪の調査 第191次

本調査は、奈良市大宮町4丁目 295-1、-6で実施した、朝日生命保険相互会社届出の事務所ビル建設に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京三条三坊十一坪の北西隅に相当する。南北14m、東西11m（調査面積 154m²）の発掘区を設定して行なった。調査期間は平成2年2月22日～同年3月16日である。

発掘区内の土層堆積状態は、地表面から深さ約1mまで造成土があり、その下に灰色土層（遺物包含層）が60cmづき、遺構面の灰茶色土にいたる。検出遺構には溝、掘立柱塀、土坑のほか、多条の素掘り溝、柱穴がある。主なものは次のとおりである。

S D 01 発掘区北端で検出した東西溝。発掘区に制約があり、溝南岸の検出のみにとどまったため正確な規模は不明であるが、幅1.5m以上、深さ0.3m以上である。

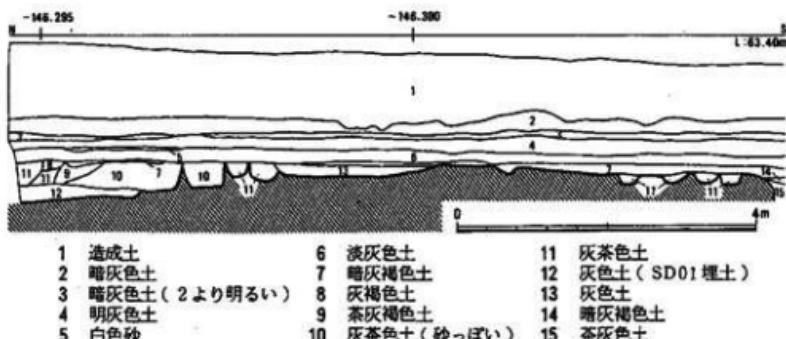
S A 02 S D 01に沿って検出した東西方向の掘立柱列。3間以上。柱間は2.7m等間。発掘区外東西にのびる。柱穴には柱の抜き取り痕跡がみられる。掘形の平面形は一辺1m前後の方形である。

S A 03 発掘区中央で検出した東西方向の掘立柱列。3間以上。柱間は2.7m等間。発掘区外東西にのびる。掘形の平面形は一辺50cm前後の方形である。

S A 04 S A 03に沿った東西方向の掘立柱列。3間以上。柱間は2.7m等間。発掘区外東西にのびる。掘形の平面形は一辺が50cm前後の方形である。

S A 05 発掘区南で検出した東西方向の掘立柱塀。2間以上。柱間は2.4m。発掘区外東へのびる。平面方形の掘形で、一辺が1m前後である。

なお、S D 01は位置からみて三条条間路南側溝、あるいはそれに沿った築地の雨落ち溝

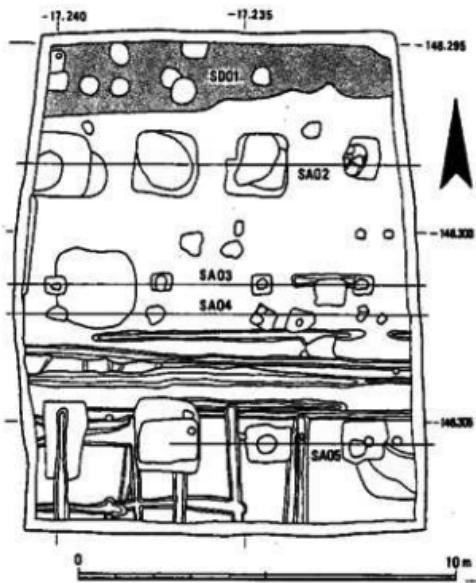
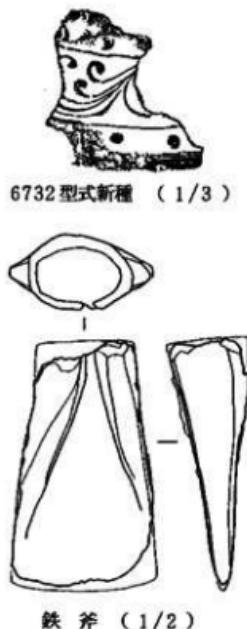


発掘区東壁堆積土層図 (1/80)

の可能性がある。仮に S D 01が条間路南側溝であれば、S A 02はそれに沿った塀の可能性が高い。また、S D 01が条坊に関する遺構でなければ、S A 02は東西棟建物の南側柱列の可能性があり、S A 03・04と柱筋が通ることから、このどちらかを南廂とすることも可能である。

出土遺物には奈良時代の須恵器、土師器、瓦、鉄器のほか、時期不明であるが石器がある。鉄器には小型の鉄斧頭が1点ある。長さ8.3cm、刃幅4.8cmである。銹化が著しい。鉄板を折り曲げて袋部をつくった鍛造品と思われる。袋部の形状は丸く、内寸は長径2.3cm、短径1.7cmである。遺物包含層から出土した。石器はサヌカイト製で、自然面と剥離痕のある両拳大の塊石である。あるいは付近に弥生時代の遺跡があり、石器製作時の母岩である可能性がある。S A 02の柱穴の柱抜き取り穴から出土した。 (森下浩行)

出土した瓦類のうち、軒瓦は軒丸瓦が3点、軒平瓦が5点の計8点である。点数の内訳は軒丸瓦6133-A 1点、型式不明2点、軒平瓦6667-C 1点、6691-A 1点、6721-E 1点、6732-K 1点、6732型式新種1点である。今回包含層から出土した6732型式新種の軒平瓦は、第2単位の第2支葉が一条になっている点では従来の6732-K型式などに似ているが、その先端が外に向かって更に長く伸びていく点、第1支葉先端の巻き込みが急である点では、すでに認識されている他の6732型式例とは異なるものである。 (武田和哉)



発掘区平面図 (1/160)

5. 平城京左京三条二坊九坪の調査 第192次

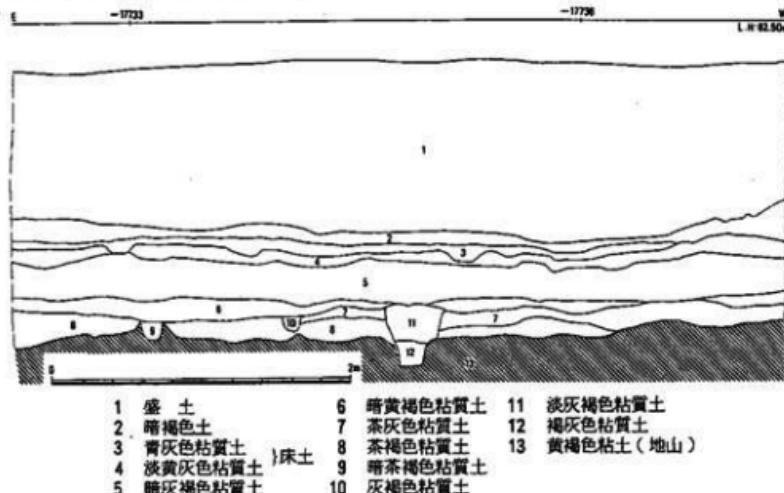
I はじめに

本調査は、奈良市二条大路南1丁目50-1、51における事務所ビル建設に伴う事前の発掘調査である。当該地は、平城京三条坊復元では左京三条二坊九坪にあたり、坪の中央よりやや西に位置する。このすぐ南東では、昭和54年度の奈良市保険センター建設工事に伴う調査で、規模の大きい建物遺構が検出され、九坪が一町以上に及ぶ大規模な敷地をもつ邸宅跡であったと考えられている。のことより、平城宮南東地域の宅地利用の一端を明らかにし、平城宮南方地域の様相を知ることを主眼に調査を行なった。調査期間は、平成2年4月2日～27日であり、東西5m、南北33m、面積165m²の発掘区を設けて調査を実施した。

II 地形と層位

調査地は、蘿川の東にあたり、現況は、盛土が為され青空駐車場として利用されていた。現地表面の標高は62.25mであり、遺構検出面は、標高60.60mである。

基本的な土層堆積状態は、造成土(1.1m)、旧水田耕土(0.2m)、暗灰褐色粘質土(0.25m)、その下に暗黄褐色粘質土(0.1m)があり、この上面で奈良時代の遺構検出面となる。以下、茶灰色粘質土、茶褐色粘質土、黄褐色粘土(地山)が堆積し、さらに下層において黄白色砂の堆積がみられた。この他、調査区北側の遺構面上に、黒褐色土(炭、焼土を含む)が堆積し、輪の羽口が出土している。



発掘区南壁堆積土層図 (1/40)

III 検出遺構

検出した主な遺構には、古墳時代の溝1条、奈良時代の掘立柱建物3棟、柱列3条、溝、土坑がある。

S A 01 S D 06に沿って北から南の調査区外へ延びる5間以上の柱列。柱間寸法は、3.0～3.6mと不揃いである。

S A 02 調査区南端で東から西へ延びる2間以上の柱列で、柱間寸法は、2.4mである。

S A 03 S A 02と同じく東から西へ延び、柱間寸法ともほぼ同じである。

S B 04 衍行2間以上、梁間2間の南面廂をもつ東西棟建物である。柱間寸法は、身舎で衍行2.4m、梁間5.1m、廂の出は、2.7m。検出した建物の東南隅柱穴（一辺1.2m、深さ1.0m）では、柱根（径20cm、長さ95cm）が残存していた。

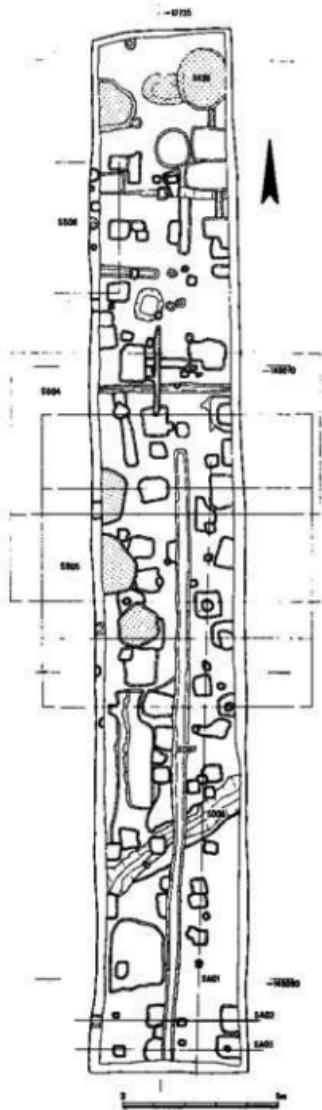
S B 05 衍行2間以上、梁間3間の南北に廂をもつ東西棟建物である。柱間寸法は、身舎が衍行2.4m、梁間4.5m、廂の出は、2.1m。北面廂西柱穴で礎盤として使用されたと考えられる塼が出土している。

S B 06 梁間2間、柱間寸法は、2.1m等間で、衍行については、調査区外のため不明である。

S D 07 北から南の調査区外へ延びる溝（長さ19.3m以上、幅0.5m、深さ0.25m）である。埋土は、上層灰褐色粘質土、下層暗灰色粘土である。

S D 08 北東から南西に斜行する溝（長さ5.4m、幅1.0m前後、深さ0.15m）である。埋土は、淡灰色砂質土で、若干量の古墳時代の土師器小片が出土している。

S K 09 不整形土坑（最大径2.0m、深さ0.8m）で、黒灰色粘土の埋土から13世紀と考えられる瓦器塊が出土している。
（秋山成人）



発掘区平面図 (1/200)

6. 平城京左京三条四坊四坪の調査 第193次

I はじめに

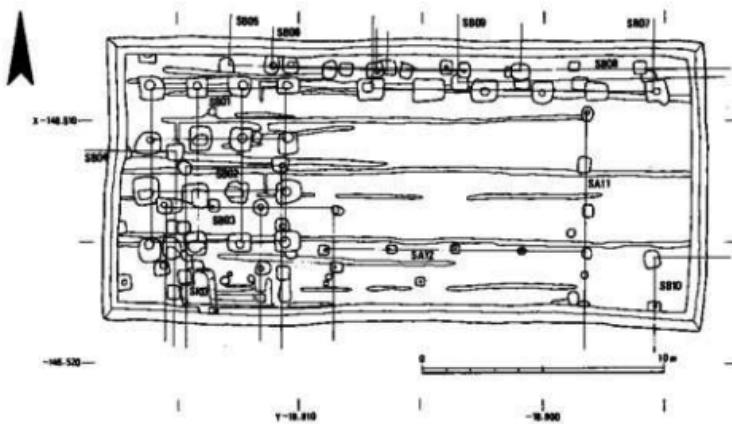
本調査は、奈良市大宮町3丁目194-1、-5における（株）岡俊届出のマンション建設に伴う事前調査として実施したものである。調査地は、平城京の条坊復元では左京三条四坊四坪の南辺中央部にあたる。調査面積は264m²で、調査期間は平成2年4月13日から同年5月27日までである。

II 検出遺構

発掘区の堆積土層は、現地表面より造成土（厚さ0.8m）、黒色粘質土（旧水田耕土、0.2m）、灰色土（旧底土、0.1m）、灰色粘質土（0.2m）、灰色粘質土（遺物包含層、0.2m）と続き、遺構検出面である地山となる。地山は、発掘区西辺と東辺付近が小礫や若干の砂を含む灰褐色または灰色の粘質土である以外は橙褐色粘質土である。遺構検出面の標高は62.7~62.8mである。

主な検出遺構は、古墳時代の土坑1基、奈良時代の掘立柱建物10棟、掘立柱塀2条で、他に奈良時代より時期の下る素掘り溝がある。

S B 01 発掘区西半で検出した桁行3間(6.3m)、梁間3間(5.4m)の総柱の南北棟建物である。柱間寸法は桁行2.1m等間、梁間1.8m等間である。北東隅の柱穴では、径30cm、厚さ10cmの丸い石を柱の根石に用いている。重複関係から後述するS B 02より新しくS B 03より古い。



発掘区平面図 (1/250)

S B 02 発掘区西半南寄りで検出した南北棟建物である。桁行2間(4.5m)以上、梁間推定2間(3.9m)で発掘区外南へ続く。北妻柱は不明である。柱間寸法は桁行が北から2.4、2.1m、梁間が等間であれば1.95mである。

S B 03 発掘区西半南寄りで検出した東廂が付く南北棟建物である。桁行1間(2.4m)以上、梁間推定3間(6.9m)で発掘区外南へ続く。柱間寸法は身舎梁間1.95m等間、廂の出3.0mである。北西隅の柱穴では平瓦を礎板として用いている。重複関係から後述するS B 04より新しい。

S B 04 発掘区西端で検出した南北3間(5.7m)東西1間(2.1m)のL字状に並ぶ柱列で、南北棟建物の北東部分とみられる。桁行の柱間寸法は北より2.1、1.8、1.8mである。

S B 05 発掘区北端で検出した東西5間(12.0m)の柱列で、東西棟建物の南側柱列とみられる。柱間寸法は2.4m等間である。重複関係から後述するS B 08・09より新しい。

S B 06 発掘区北端で検出した東西2間(4.8m)の柱列で、南北棟建物の南妻柱列とみられる。柱間寸法は2.4m等間である。重複関係から後述するS B 08より古い。

S B 07 発掘区北端で検出した東西5間(11.55m)の柱列で、東西棟建物の南側柱列とみられる。柱間寸法は東西両端の1間が2.4mである以外は2.25mである。重複関係から後述するS B 08より新しい。

S B 08 発掘区北端で検出した東西4間(10.75m)の柱列で、東西棟建物の南側柱列で発掘区外東へ続くとみられる。柱間寸法は不揃いで、西から2.85、2.6、2.6、2.7mである。重複関係から後述するS B 09より新しい。

S B 09 発掘区北端で検出した東西3間(7.65m)の柱列で、東西棟建物の南側柱列で発掘区外東へ続くとみられる。柱間寸法は2.55m等間である。

S B 10 発掘区南東隅で検出した南北1間(1.95m)の柱列で、周辺の遺構検出状態を考慮すれば、大部分が発掘区外東及び南にある建物の側柱列ないし妻柱列の一部とみられる。

S A 11 発掘区東半東寄りで検出した南北塀で、発掘区外南北に延びるとみられる。全部で4間検出した。柱間寸法は不揃いで、北から2.15、1.85、1.7、2.25mである。

S A 12 発掘区南半南寄りで検出した東西塀で、S A 11に直交して取り付く。取付部から4間分検出しているが、さらに西方に延びるかどうかは不明である。柱間寸法は取付部より西へ2.6、2.7、2.7、2.6mである。なお、S A 11との取付部の座標はX=-146,515.340、Y=-16,898.300である。

S K 13 発掘区西南隅で検出した東西1.4m、南北1.8m以上、深さ0.2mの浅い土坑である。埋土中から布留式でもやや古い様相を示す古墳時代の土師器（小型丸底壺1、甕2以上）が出土した。
(安井宣也)

7. 平城京左京三条四坊六坪 第194次

I はじめに

本調査は、奈良市大宮町 157 番地の 1 で行なった、西田昭氏届出の事務所ビル建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京三条四坊六坪にあたり、六坪の北半中央、三条条間路に面した地区である。この六坪では過去 2 回の調査を行なっているが、いずれも 100m² 前後の調査で、坪内の様相を明らかにするまでには至っていない。調査面積は 500m² で、調査期間は平成 2 年 4 月 16 日～5 月 23 日である。

II 検出遺構

発掘区の基本的な土層は、黒色粘土（耕土）、茶灰色粘土（床土）、灰褐色砂質土と統き、現地表下 25cm ほどで、茶灰色粘質土（一部灰黄色砂質土、茶灰色砂質土）の地山となる。奈良時代の遺構は、この地山上面で検出した。地山の標高は概ね 64.2m である。

検出遺構は奈良時代の掘立柱建物 18 棟、井戸 4 基、土坑、溝である。

S B 01 衍行 2 間以上 × 梁間 3 間の総柱建物。柱間は東西が 2.1m 等間、南北が 1.8m 等間である。重複関係から S B 03 より新しい。

S B 02 衍行 1 間以上 × 梁間 2 間の掘立柱建物で、東西棟建物になると思われる。柱間は梁間 3.0m 等間である。

S B 03 衍行 2 間以上 × 梁間 2 間の東西棟建物。柱間は衍行 1.8m 等間、梁間 2.1m 等間になるものと思われる。重複関係から S B 01 より古い。

S B 04 衍行 3 間 × 梁間 2 間の東西棟建物。柱間は衍行・梁間とも 1.5m 等間である。

S B 05 衍行 3 間 × 梁間 2 間の南北棟建物。柱間は衍行 1.8m、梁間 1.5m 等間である。

S B 06 衍行 3 間 × 梁間 2 間の東西棟建物。柱間は衍行・梁間とも 1.8m 等間である。柱掘形の埋土には炭が混ざっていた。重複関係から S B 07 より新しい。

S B 07 2 間 × 2 間の総柱建物。柱間は南北 1.8m 等間、東西 1.8m 等間である。重複関係から S B 06 より古い。

S B 08 衍行 3 間 × 梁間 2 間の南北棟建物。柱間は衍行 2.7m 等間、梁間 1.8m 等間である。重複関係から S B 09 より古い。

S B 09 2 間以上 × 梁間 3 間の総柱建物。柱間は南北方向が北から 1.4m、1.1m、1.8m と不揃い。東西方向は 1.8m 等間である。重複関係から S B 08 より新しい。

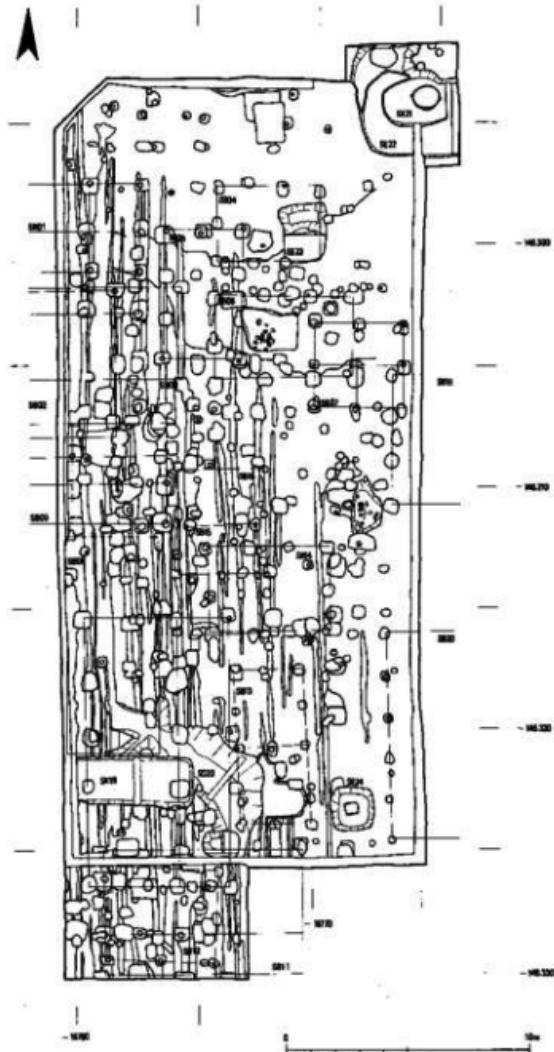
S B 10 衍行 4 間 × 梁間 3 間の南北棟建物。東面に廂をもつ。柱間は衍行が北から 2.4m、2.4m、2.4m と不揃い。梁間は 1.8m 等間、廂の出は 2.1m である。

S B 11 衍行 3 間以上 × 梁間 3 間の東西棟建物。南面に廂をもつ。柱間は衍行 1.8m 等

間、梁間は北から1.8m、1.5mと不揃い。庇の出は1.8mである。

S B 12 2間×2間の小型の建物。柱間は南北1.8m等間、東西2.1m等間である。

S B 13 桁行4間×梁間2間の南北棟建物。北から2間目に間仕切りがある。柱間は桁行1.5m等間、梁間1.4m等間である。



発掘区平面図 (1/250)

S B 14 桁行3間×梁間2間の東西棟建物。柱間は桁行・梁間とも1.8m等間である。

S B 15 桁行2間×梁間1間の小型の南北棟建物。柱間は桁行2.4m、梁間2.7mである。

S B 16 2間×2間の小型の建物。柱間は南北2.1m、東西1.8m等間である。

S B 17 3間×1間以上の掘立柱建物で、東へ延びると思われる。南北方向の柱間は1.8m等間である。

S B 18 桁行5間×梁間1間以上の南北棟建物。桁行は1.7m等間である。

S K 19 東西1.8m、南北4.8m、深さ0.2mの平面長方形掘形の土坑。埋土は黒灰褐色粘質土で炭を多く含む。土坑内には、奈良時代中頃～後半にかけての土器が大量に投棄されていた。重複関係からS D 20より古く、S D 10より新しい。

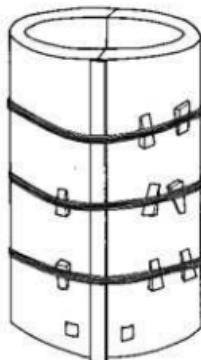
S D 20 幅1.0～2.7m、深さ0.4mの溝状遺構。埋土は灰褐色粘質土で、土器を少量含んでいた。重複関係からS B 10、13より古い。

S E 21 南北2.0m以上、東西2.6m以上の隅丸方形掘形内に、1木半割剥抜の井戸枠が据えられている。枠は、一本を縦に半割して内側を剥り抜き、再度組み合わせ、合わせ目の外側に板材をあてがい周囲3箇所を繩で縛り、枠と繩の間に楔を打ち込んでいる。枠の下端には、片方2箇所ずつ、計4箇所に竪穴が穿れ、外側から埋木が施されている。また、一方の枠の下端ほぼ中央に鋭利な刃物で「此船主富福来」と稚拙な文字が刻まれている。井戸枠内の埋土は灰色粘土一層で奈良時代後半の土器類が出土した。重複関係からS E 22より新しい。

S E 22 南北3.5m以上、東西4.0m以上の隅丸方形掘形の井戸で、埋土は灰色粘土。井戸枠は残存していない。重複関係からS E 21より古い。

S E 23 東西1.9m、南北2.4m、深さ1.3mの隅丸方形掘形の井戸で、埋土は暗灰色粘土、灰色粘土、黄灰色粘土の順に堆積している。井戸枠は残存していない。

S E 24 発掘区南東隅で検出。南北3.6m、東西3.6m、深さ2.5m以上の隅丸方形掘形内に一辺1.18mの方形縦板組み隅柱横桟留めの井戸枠が据えられている。井戸枠内には灰色粘土が堆積しており、奈良時代中頃～後半にかけての土器と曲物底板の一部が出土した。



SE21 井戸枠手模式図



SE21 井戸枠文字拓本 (1/4)

III 出土遺物

出土遺物は、奈良時代の瓦類、土器が大半で、他には土馬、曲物底板、鋳造関係遺物がある。以下、主なものの取りあげる。

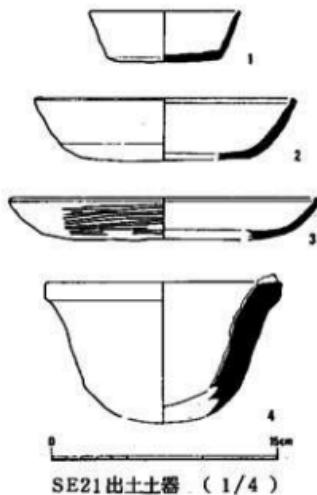
瓦類 大部分は丸、平瓦である。軒瓦は2点で、軒丸瓦6282G 1点、6275（種別不明）1点である。他には、三彩平瓦の破片が1点出土している。
(久保清子)

土器類 土器類の大半は奈良時代のもので遺物整理箱で16箱分を数える。ここでは、SE21から出土した奈良時代後半の特徴をもつ土器について記す。

SE21出土土器 土師器、須恵器がある。土師器には、杯A(2)、皿A(3)、高杯、壺がある。
2は、a。手法。底部内外面に線刻がみられる。3は、C。手法。須恵器には、杯A(1)、杯B、杯B蓋、皿E、壺、壺がある。1は、ロクロナデ調整。

鋳造関係遺物 坩堝、ふいご、炉壁、銅滓がある。ふいご、炉壁、銅滓は、柱穴や、土坑から出土している。坩堝(4)はSE21から出土している。4は口縁部から胴下半部にかけての破片で、口径15.1cmの鉢形に復元できる。内面の器壁には2層の粘土の重なりがある。粘土を貼り直し、器面を整えたものと考えられる。内面に黒色のカラミが付着する。

(三好美穂)



SE21出土土器 (1/4)

IVまとめ

今回の調査で得られた成果について以下のようにまとめる。

①奈良時代の掘立柱建物18棟以上を検出した。重複関係から5時期以上の変遷があることがわかる。建物の規模や配置からみて、今回の調査地が当時、大規模な宅地として利用されていたと考えられる。

②今回の調査地で、少量ではあるが、鋳造関係遺物が出土した。このことから、六坪内に鋳造に関する工房があった可能性が考えられる。しかし、鋳造に関連する遺構が見つかっておらず、遺物も少量であることから、どのような工房であったかは明らかでない。

③SE21の井戸枠は一本半割削抜材を組み合わせたものである。平城京内では、左京五条五坊七坪、左京三条二坊一坪、左京四条五坊一坪などに例がある。しかし、井戸枠に文字が刻まれていた例は、今回がはじめてである。井戸の祭祀に関連して、願文を刻んだのではないかと考えられる。
(久保清子)

8. 平城京左京五条五坊五坪の調査 第195次

I はじめに

本調査は奈良市西木辻町 189 他において実施した若羽学園届出の専門学校建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では外京城の左京五条五坊五坪の南端中央部にあたると推定され、五条大路とその北側溝の存在が予想された。調査は、建設予定地の南半にこの確認を目的とした南発掘区と、北半に坪内の様相を知ることを目的とした北発掘区の南北二箇所に発掘区を設定して行なった。発掘面積は約 890m²で、調査期間は平成 2 年 5 月 14 日から 6 月 22 日までである。なお、昭和 58、59 年度に当調査地の北で発掘調査を行なっており、いずれも 7 世紀末から 8 世紀初頭の遺構を検出している。今回の調査はそれらとの関連も注目された。

II 検出遺構

(1) 北発掘区

調査地の北半に設けた東西約 23m、南北約 35m の発掘区である。発掘区内の基本的堆積層序は耕土、床土の下、灰褐色土、灰黄色土、黄灰色土と続き、地表下約 0.6m で黄褐色粘土の地山にいたる。遺構はすべてこの地山上面で検出した。

S B 01 衍行 3 間(5.3m)、梁間 2 間(2.4m)の南北棟掘立柱建物。柱間は衍行が 1.5~2.2m と不揃いであるが、梁間は 1.1m 等間である。柱穴の重複関係により S B 02 よりも古いことがわかる。主軸は国土方眼方位北で西偏している。

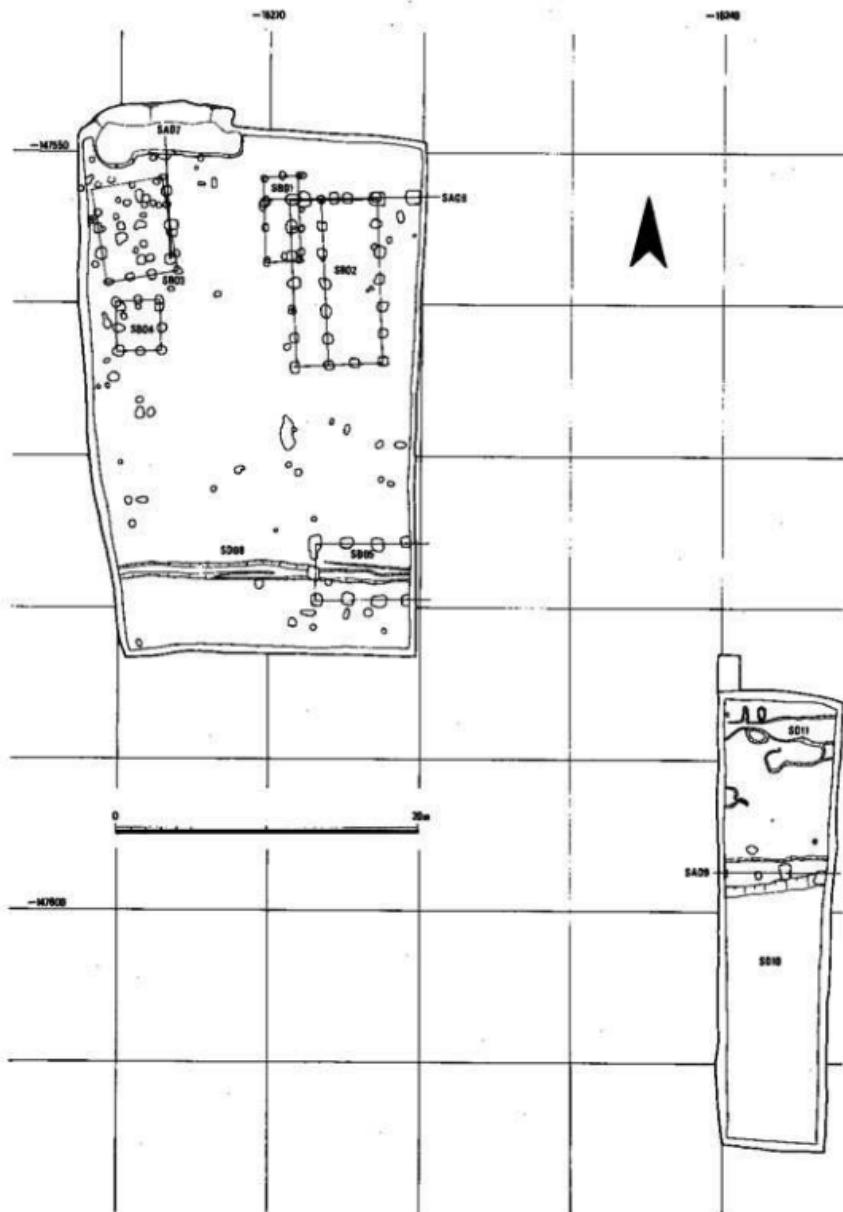
S B 02 衍行 6 間(11.0m)、梁間 2 間(3.8m)の南北棟掘立柱建物。西側に廻を有する。柱間は衍行、梁間とも 1.8m 等間である。廻の出は 2.0m である。主軸は国土方眼方位北で西偏している。

S B 03 衍行 3 間(6.4m)、梁間 3 間(4.8m)の南北棟掘立柱建物。柱間は衍行が 1.8~2.7m、梁間が 1.5~1.8m と不揃いである。柱穴の重複関係により S A 07 よりも古いことがわかる。主軸は国土方眼方位北で西偏している。

S B 04 衍行 2 間(3.2m)、梁間 2 間(3.0m)の南北棟掘立柱建物。柱間は衍行が 1.6m 等間、梁間が 1.5m 等間である。主軸は国土方眼方位北で西偏している。

S B 05 衍行 3 間(6.3m)以上、梁間 2 間(3.6m)の東西棟掘立柱建物。調査区外東へ延びる。柱間は衍行が 2.1m 等間、梁間が 1.8m 等間である。重複関係から、この建物が S D 08 よりも古いことがわかる。主軸は国土方眼方位にはほぼ一致している。

S A 06 東西方向の掘立柱列で、4 間分(9.6m)を検出した。調査区外東へ延びると考えられる。柱間は 2.0~2.7m と不揃いである。柱穴の重複関係より S B 01、02 よりも古いことがわかる。主軸は国土方眼方位にはほぼ一致している。



発掘区平面図 (1 / 400)

S A 07 南北方向の掘立柱列で、3間分(7.2m)を検出した。調査区外北へ延びると考えられる。柱間は2.4m等間である。柱穴の重複関係によりS B 03よりも新しいことがわかる。主軸は国土方眼方位北で西偏している。

S D 08 東西方向の素掘り溝で、溝幅は0.9~1.3m、検出面からの深さは約0.2mである。溝内には灰色砂土が堆積していた。遺物は奈良時代の土器が若干ではあるが出土している。検出状況からこの溝は本来二段掘りであったと考えられる。主軸は国土方眼方位にほぼ一致している。

(2) 南発掘区

調査地の南半に設けた東西約30m、南北約8mの発掘区である。発掘区内の基本的堆積層序は耕土、床土の下、灰褐色粘質土、青灰色粘質土と続き、地表下約0.6mで黄色粘土の地山にいたる。遺構はすべてこの地山上面で検出した。

S A 09 東西方向の掘立柱列で、3間分(6.5m)を検出した。東、西側とも調査区外へ延びると考えられる。柱穴の柱筋が通るところを中心に南北ともに約1.0mの幅で周囲の地面より高くなっている、土壠状の遺構に伴うものであった可能性がある。東端の柱穴はS D 10により、上部を削平されている。柱間は1.7~2.5mと不揃いである。主軸は国土方眼方位とほぼ一致している。

S D 10 東西方向に流れる溝と考えられるが、発掘区内で溝の南岸を検出することができなかった。溝幅は検出した部分で17.0mを測る。深さは約1.1mであるが、底のレベルは一定していない。溝内の埋土の堆積状況は各部分によって違いが見られるが、基本的に上から灰色粘質土、灰色砂土、暗灰色粘質土の3層に分けることができる。遺物は暗灰色粘質土の上に部分的に堆積していた淡灰色砂から奈良時代の土器が、最上層の灰色粘質土からは鎌倉時代の瓦器が出土しており、溝の存続期間をうかがうことができる。主軸はS A 09とほぼ同じく国土方眼方位にほぼ一致しており、このことからS A 09はこの溝に伴う遺構であると考えられる。

III 出土遺物

S D 10より出土した奈良時代の土器、平安時代の銭貨について記す。

土器 奈良時代の土器は淡灰色砂から出土した。土師器には杯A(1)、甕A(2)がある。1は平らな底部と斜め上にひらく口縁部からなる。口縁部下半は内彎、上半はわずかに外反する。口縁端部は内側に肥厚するA形態のものであり、底部外面をへら削りして、口縁部外面はへら磨きは施さずに横なでを加えたb。手法である。口縁部内面は横なでの後に、一段の斜放射暗文を施している。口径は復元で19.1cmである。2は球形に近い器体と、強く外反する口縁部とからなるもの。体部は外面をはけ目、内面をなでにより調整している。口縁部の調整は内外面とも横なでによるものである。体部外面に二次的に火を受けた痕跡

が残っている。口径は復元で21.6cmである。

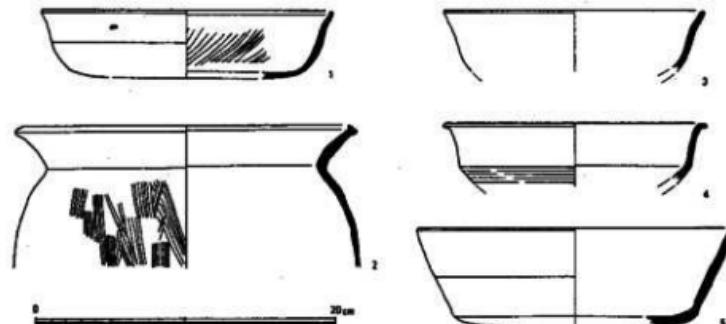
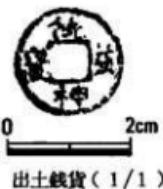
須恵器には杯(3)、杯L(4)、杯A(5)がある。3の杯は口縁部内外面ともロク ロナデにより調整している。底部を欠き、器形は不明である。4は口縁部が外反し、口縁端部下半に明確な稜を有するもので、金属器の佐波理鏡を模した器形である。調整は、内面と外面の稜より上部をロクロナデ、稜より下部をロクロケズリした後、ヘラミガキを加えている。口径は復元で16.2cmである。5は平らな底部と斜め上にひらく口縁部からなり、口縁端部は丸くおさめている。調整は口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面はロクロナデの後、不定方向のナデを加えて仕上げている。底部外面はロクロケズリの後にロクロナデで調整する。この他に須恵器では、甕が出土している。これらの土器は平城宮土器Ⅲ～Ⅳの特徴をもつものである。

銭貨 銀益神宝が中層の灰色砂土より出土した。径 18.52mm、厚さ1.77mm、重さ1.47gである。皇朝十二銭のうちの一枚で、初鋤は貞觀元年(859)である。

このほか、SD10から出土したその他の遺物として、灰色粘質土より瓦器が、奈良時代の土器が出土した同じ場所から曲物の底板が出土している。

IVまとめ

今回の調査では、調査前の想定として、南発掘区に五条大路の路面とその北側溝の検出が予想された。これに間連する遺構としてはSD10があるが、これを北側溝とするには溝幅が広すぎると思われる。一方、北発掘区で検出した奈良時代の土器が出土している東西溝SD08を北側溝と考えると、SD10を南側溝に、その間を五条大路の路面に想定でき、路面幅は20.2mとなる。南側溝の幅が広い理由としては、SD10が五条大路の南



SD10出土土器 (1/4)

側溝と平城京外京南限の外堀を兼ねていた可能性が考えられるからである。平城京の表門である羅城門にとりつく羅城の南には堺があったことが大和郡山市と奈良國立文化財研究所の調査によって知られている。^{註1)}また、東四坊大路の東には掘割りが施工され、平城京東限の溝渠としていたのではないか、ということが地質調査や遺存地割の研究により指摘されている。^{註2)}これらのことから、外京の南限である五条大路にも外堀のようなものが存在していたことは充分に考えられよう。その役割を南側溝が兼ねたため幅17m以上という幅広い溝となったと考えられるのである。ただし、この場合は五条大路が北にずれることになるのであるが、以下ではこの点について検討し、まとめにかえたい。

今回、想定した五条大路の路面の中心を条坊計画心と考えると、この中心は二条大路の条坊計画心から国土方眼方位を介して南に1568.790mの位置にある。しかし、平城京の造営方位は朱雀大路で国土方眼方位に対し平均でN 0° 15' 41" Wの振れをもつことが知られている。そこでこの修正を加えると計画心間の距離は1579.400mになる。二条大路心から五条大路心までの造営計画距離は大尺で4500尺(3条幅)であるので、この場合に得られる造営単位尺は0.3509mとなり、これまでに知られている平城京の造営単位尺0.3550~0.3560mよりかなり短い数字になる。これによると五条大路は約18.1m、大尺に換算するとほぼ50大尺北へずれていることになるのであるが、路面幅は約20.2mで西一坊大路とほぼ同規模^{註3)}であり、大路の路面幅として妥当であること、SD10の幅員が広く、北側溝よりも外堀としての機能も有する南側溝と考える方が適当ではないかということ、などからこれらが条坊遺構となる可能性を考えておく必要があろう。また、SD10は検出状況から、もとは自然流路であったようで、それを側溝(外堀)として利用した結果、五条大路そのものが北へずれたとも考えられる。しかし、北発掘区では北側溝に想定しているSD08の施工以前にSB05の存在がわかつており、溝の施工時期とも絡んで、条坊遺構であることに否定的な要素も残されている。外京城における条坊遺構の調査例は少なく、今回想定したことの実態については今後の周辺の調査例の増加を待って判断したい。なお、今回仮に想定した五条大路道路心の座標値は、X = -147588.180、Y = -16256.200である。

(池田裕英)

註1) 奈良國立文化財研究所編『平城京羅城門跡発掘調査報告』大和郡山市教育委員会(1972)

註2) 堀井基一郎・伊達宗泰「平城京城内河川の歴史的変遷に関する研究」『平城京の復原保存計画に関する調査研究』奈良市(1972)

註3) 本来、道路心は側溝心間距離で求めるものであるが、今回の場合はSD10の中心が求められないでの、あえて、道路面の中心を五条大路心と考えた。

註4) 二条大路条坊計画心は朱雀門心のX座標に宮南面大垣心と二条大路条坊計画心との距離である24.90mを勘案して求めた数値で。

X = -146020.130、Y = -19043.510である。

註5) 『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良國立文化財研究所(1979)

9. 平城京右京四条一坊一坪 第197次

I はじめに

本調査は、奈良市四条大路4丁目1-7における大西義哲氏届出の共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では右京四条一坊一坪の北辺中央付近で三条大路に面した位置にある。調査は当初京内宅地の様相解明を目的として行なったが、結果的として弥生時代の聚落の一部を明らかにすることとなった。調査期間は平成2年6月4日から同年7月12日まで、調査面積は280m²である。

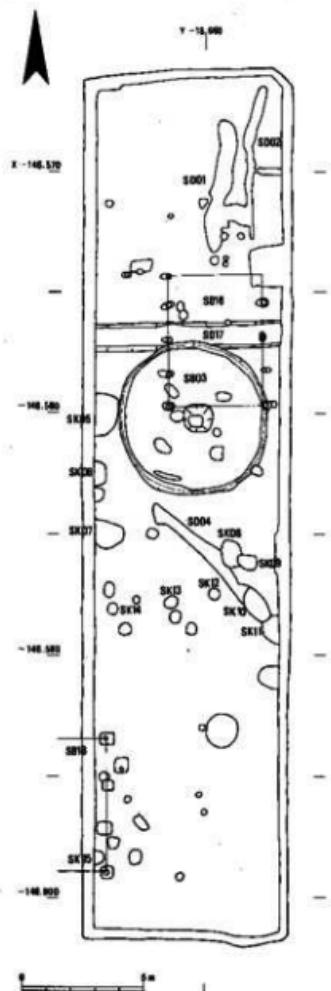
II 検出遺構

発掘区の堆積土層は、現地表面より造成土（厚さ0.7m）、旧水田耕土及び床土（0.25m）、灰褐色粘質土（0.15m）、灰色粘質土（遺物包含層、0.2m）と続き、地山である黄褐色ないし茶褐色粘土となる。地山はほぼ水平で、標高は概ね62.1mである。遺構の検出はすべて地山上面で行なった。

主な検出遺構には、弥生時代の竪穴住居1棟、溝3条、土坑、奈良時代の掘立柱建物2棟、溝1条がある。

A 弥生時代の遺構

S D 01・02 いずれも発掘区北半東壁寄りで検出した南北方向の溝である。S D 02は幅0.7~0.8m、深さ0.2mのもので、長さ5.4m分を検出した。中央付近で弥生時代後期の土器片がまとまって出土した。またサヌカイト製剝片が南半の底面で特に多く出土した。S D 02はS D 01のすぐ東側にある幅0.3~0.4m、深さ0.2mのもので、長さ6.2m分を検出した。北側は発掘区外へ、南側は擾乱部に延びるとみられる。底面及び埋土中から弥生時代後期の土器とサヌカイト製剝片・チップ等が出土した。



S B 03 発掘区北半南寄りで検出した径6.0~6.3mの円形の竪穴住居で、壁の内面に沿って幅0.1~0.2m、深さ0.1mの溝がめぐる。床面は1面のみで、貼床は認められない。主柱は4本柱で四隅の一辺の柱間寸法は全て2.4mである。中央には径1.1m、深さ0.4cmの不整円形の土坑があり、内部や周辺に炭化物が堆積していることから炉とみられる。床面や埋土中から弥生時代後期の土器、サヌカイト製石器・石錐・剝片・チップ等が出土した。重複関係から後述するS B 16、S D 17より古い。

S D 04 S B 01の南側を東南方向に斜行する幅0.2~0.3m、深さ0.1mの溝で、長さ5.2m分を検出した。埋土中より弥生時代後期の土器が出土した。重複関係から後述するS K 08・10より古い。

S K 05~15 S B 03の西側から南側にかけて20基余りの土坑を検出した。規模と平面形で、長径1.0~1.5mの隅丸方形または不整円形のものと径0.3~0.5mの円形のものとに大別できる。深さはいずれも0.2m程度である。これらの土坑のうちS K 05~15の埋土中から弥生時代後期の土器が出土した。

B 奈良時代の遺構

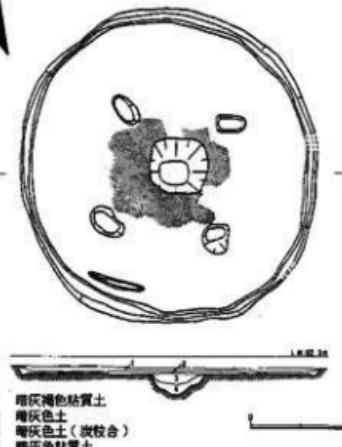
S B 16 発掘区北半南寄りで検出した桁行1間(3.9m)、梁間4間(5.4m)の南北棟掘立柱建物で、棟方向は国土方眼方位と一致する。北東隅の柱は攪乱のため欠いている。妻柱については不明である。柱掘形の平面形は東西に細長い梢円形である。桁行の柱間寸法は、北1間が1.2mである以外は1.4mである。重複関係からS B 03より新しく後述するS D 17より古い。

S D 17 S B 01と一部重複する東西方向の溝で、幅1.4m、深さ0.3mを測る。埋土中より弥生土器が少量出土している。

S B 18 発掘区南端西壁寄りで検出した南北3間(5.4m)の掘立柱列で、南北棟建物の東側柱列とみられる。柱間寸法は1.8m等間である。

III 出土遺物

出土遺物には、弥生時代の土器、石器、奈良時代の土器、瓦、埴がある。奈良時代の遺物は大半が遺物包含層である灰色粘質土から出土した。ここでは弥生時代の遺物について報告する。



S B 03 (1/120) トーンは炭化物

- 1 暗灰褐色粘質土
- 2 暗灰色土
- 3 暗灰色土(炭化物)
- 4 暗灰色粘質土

A 弥生土器

S D01・02・04、S B03、S K05～15から出土した。器種には、壺、甕、鉢、高杯、器台がある。全て弥生時代後期に属するものである。以下主要なものを報告する。

S B03出土土器（1～5） 1、2は広口壺の口縁部から頸部にかけての部分である。どちらも外反する頸部に上下に少し肥厚する口縁部が付く。1は口縁部に竹管円形浮文を付し、頸部に3条の擬凹線をめぐらす。3は小型の甕である。口縁端部は丸くおさめる。底部は厚い。体部の調整は外面がハケ目、内面がヘラケズリである。体部上半と底部の内面には指頭圧痕が残る。4は甕の体部から底部にかけての部分である。体部外面にはかすかにハケ目がみられ、底部内面には指頭圧痕が残る。5は高杯の杯部である。ゆるく立ち上がる受部にわずかに外反する短い口縁部が付く。

S K05出土土器（6～7） 6は小型の甕の口縁部から体部にかけての部分である。口縁端部は丸くおさめる。体部外面にはタタキ目が、内面にはヘラケズリがみられる。7は器台の体部から裾部にかけての部分である。体部には4条1組の櫛描沈線を3箇所めぐらせ、それらの間に円形透かし孔を4方向に施す。外面調整はヘラミガキである。内面調整は裾部のナデ、体部と受部の境界のヘラケズリ以外は未調整で横方向の指頭圧痕が残る。

その他出土土器（8～11） 8はSK11で出土した高杯で裾部を欠く。杯部は受部がゆるく立ち上がり外反する短い口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめる。9はSK09から出土した甕の体部から底部にかけての部分である。体部外面にはタタキ目がみられる。10はSK10から出土した器台の受部から体部にかけての部分である。下方に肥厚した口縁端部には3個1組の円形浮文を施している。体部中央には3方向の円形透かし孔を施す。11はSK15から出土した脚付小型鉢である。胎土は精良で器壁は薄い。脚部には4方向の円形透かし孔を施す。

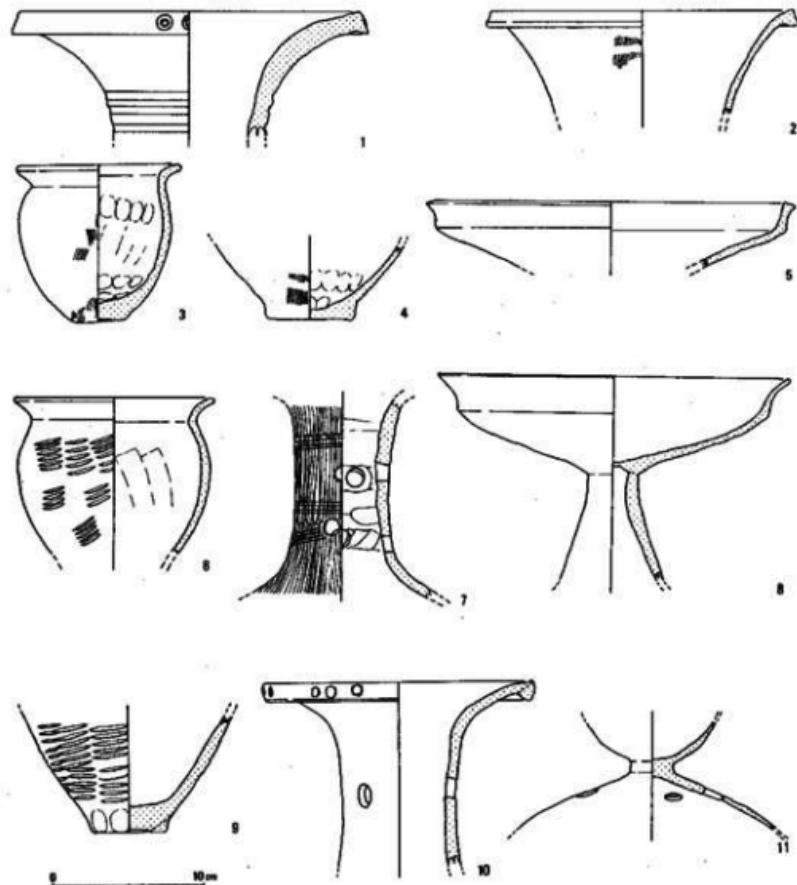
これら弥生土器の胎土は石英・長石を含む。色調は6・9が橙色である他は灰白色である。

（安井宣也）

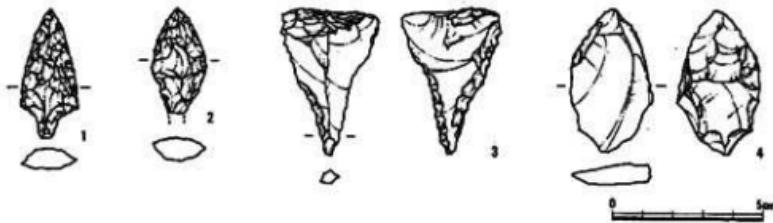
B 石器

S B03出土石器（1～4） 成品及び加工品4点の他、総重量166gに及ぶ剥片、チップ等が出土している。1は逆刺をもつ有茎式の打製石鎌である。長さ4.3cm、最大幅2.0cm、厚さ0.7cm、重さ4.9g。サヌカイト製。2は逆刺をもたない有茎式の打製石鎌である。茎は欠損している。残存長3.5cm、最大幅1.8cm、厚さ0.7cm、重さ4.5g。サヌカイト製。3は石錐である。縦長剥片を素材としている。錐部に磨耗は認められず未使用の可能性もある。長さ4.8cm、錐部の厚さ0.5cm、重さ10.1g。4は加工痕のある剥片である。横長剥片を素材としており、石鎌未成品の可能性もある。長さ4.7cm、最大幅2.7cm、厚さ0.7cm、重さ8.6g。サヌカイト製。

（松浦五輪美）



出土土器 (1/4)



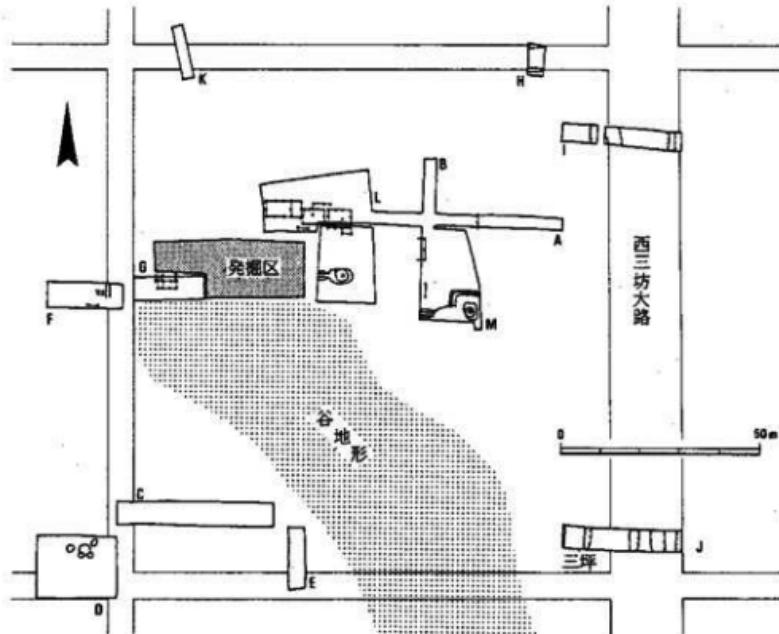
SB03 出土石器 (1/2)

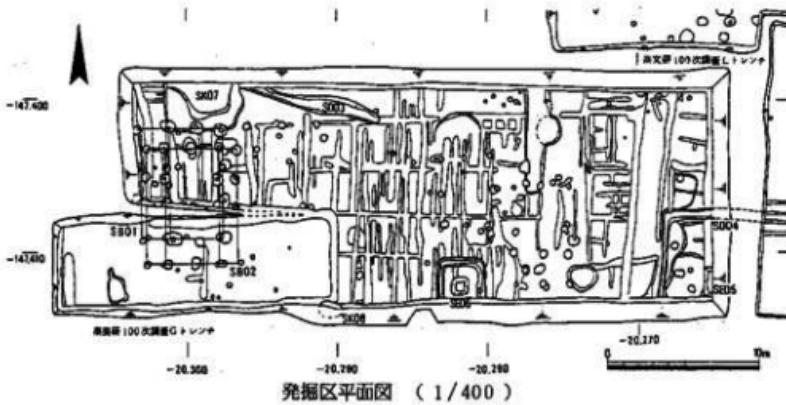
10. 平城京右京五条四坊三坪の調査 第198次

本調査は、奈良市平松4丁目3-1番地において実施した奈良市立京西中学校運動場流域貯留浸透事業に伴う事前の発掘調査である。この事業は運動場全面を掘り下げ、雨水を一時溜める防災工事である。昭和51年に奈良国立文化財研究所が中学校建設に先立って第100次調査を実施し、西三坊大路、五条条間路、三・六坪境小路、掘立柱建物6棟、塀5条、井戸2基などを検出している。運動場の北辺中央に東西40m、南北15mの発掘区を設定して調査をした。調査面積は450m²で、調査期間は平成2年7月4日から8月6日である。

発掘区の堆積土層は地表から1.1~1.6mまでは造成土、その下に黒灰色土の旧耕土、灰色砂質土、黄灰色砂質土、黄褐色土、茶褐色砂質土があり、地表下1.8~3.2mで黄褐色粘質土の地山に至る。地山は発掘区南辺中央に向かって緩やかに傾斜しており旧地形の南東方向に延びる谷地形の末端部分にあたる。遺構検出面の標高は概ね75.5~76.8mである。

検出した遺構には、奈良時代の掘立柱建物2棟、溝3条、井戸2基、土坑3基がある。





発掘区平面図 (1/400)

S B 01 発掘区西端で検出した桁行2間以上、梁間2間の南北棟建物で西廂がつく。GトレンチのS B 34と柱筋が揃い西廂付き3間×2間南北棟建物になる。柱間の寸法は桁行2.4m(8尺)等間、梁間1.8m(6尺)等間、廂の出は2.1m(7尺)である。

S B 02 発掘区西端で検出した桁行2間以上、梁間2間の南北棟建物で東西に廂が付く。GトレンチのS B 35と柱筋が揃い東西に廂がつく4間×2間南北棟建物になる。柱間の寸法は桁行1.95m(6.5尺)、梁間1.8m(6尺)等間、廂の出は1.2m(4尺)である。

S D 03 発掘区北辺で検出した東西方向の素掘り溝。幅1.2m、深さ0.2m。埋土は暗茶褐色土で、奈良時代中頃の土器が少量出土した。

S D 04 南東隅で検出した東西南北方向へほぼ直角に曲がる素掘り溝で、幅0.6m、深さ0.4m。この溝は奈文研第100次調査しトレンチで検出された井戸S E 20から西へ延びる溝状遺構S X 21の延長上にある。埋土から奈良時代中頃の土器が少量出土した。

S E 05 南東隅で円形掘形の一部を検出した井戸。埋土から遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、土層の堆積からみて奈良時代の遺構と考えられよう。

S E 06 南辺中央で検出した隅丸方形素掘りの井戸で、一边が1.1m、深さ2.2mである。井戸の周囲を溝が方形に巡るが、南辺は発掘調査区外のため不明である。溝は幅0.5m、深さ0.1mと浅い。遺物はなく、井戸底から木片が少量出土したのみである。

S K 07・08 S K 07は北辺で検出した方形の浅い土坑で、埋土から平城宮土器Ⅲの土器と共に炭化物が出土した。S K 08から奈良時代の土器片が少量出土した。

平城京の右京三・四坊は西の京丘陵に位置しており、丘陵の尾根と谷が複雑に入り組んでいる。これまでの調査から丘陵上では遺構が良く遺存し、谷部にはほとんどないことが判明している。このように地形が複雑に変化する場所では、丘陵上にいくつかの平坦面を造成して、宅地としたことがわかる。

(篠原豊一・原田憲二郎)

註) 奈良国立文化財研究所『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』(1977)

11. 平城京左京九条四坊十坪の調査 第201次

I はじめに

本調査は奈良市東九条町字子ボリ259-1番地において行なった山田勝文氏届出の倉庫建設に伴う事前の発掘調査である。当地は平城京の条坊復元によると左京九条四坊十坪の東南隅にあたると推定されている。調査は倉庫建設予定地の北寄りに東西約21m、南北約29mの発掘区を設定して行なった。発掘面積は約610m²である。調査期間は平成2年7月5日から7月30日までである。

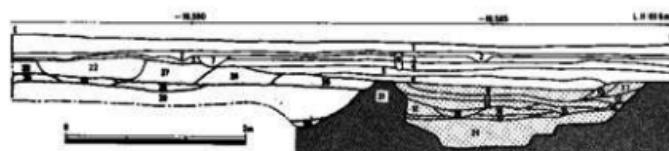
II 検出遺構

発掘区内の基本的な土層堆積状態は、耕土、床土、淡黄褐色土、赤褐色土と続き、現地表下約0.7mで明黄褐色土の地山にいたる。遺構はすべてこの地山上面で検出した。検出した遺構には掘立柱建物、素掘り溝、土坑、自然流路がある。

S B01 発掘区の東南部で検出した桁行3間(6.0m)、梁間2間(3.4m)の南北棟建物である。柱間は桁行が2.0m等間、梁間が1.4m等間である。柱掘形は一辺が約0.4mの隅丸方形である。建物の東と西に柱筋をほぼそろえた柱穴があるので、東西に廂をもつ建物と考えられる。廂の出は東、西とも2.0mで、柱掘形は身舎に比してやや小さく一辺が約0.3mの隅丸方形である。主軸は国土方眼方位北で東偏する。

S B02 S B01の西に位置する桁行2間(3.0m)、梁間2間(2.8m)の南北棟建物である。柱間は桁行が1.5m等間、梁間が1.4m等間である。柱掘形は一辺が約0.4mの隅丸方形であるが、南北両方の側柱列中央の柱掘形は直径約0.4mの円形である。南妻柱列をS B01と揃えている。主軸はS B01と同じく国土方眼方位北で東偏する。

S B03 発掘区西南隅で検出した東西1間(1.8m)以上、南北1間(1.8m)以上の建物で

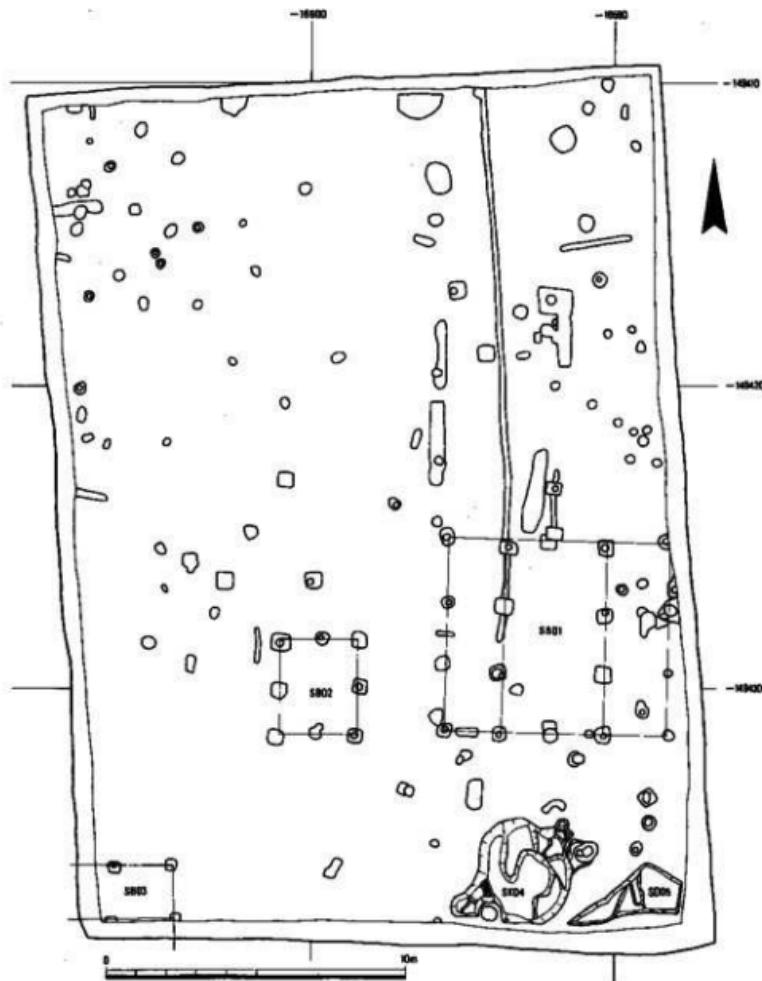


1 耕土	11 淡褐色土	19 灰色砂	27 淡灰褐色土
2 白白色砂質土	12 暗赤灰色粘質土	(明黄褐色粘質土含む)	28 淡灰褐色砂
3 淡黃褐色土	13 暗灰褐色粘質土	20 暗赤褐色粘土	29 淡灰色砂
4 赤褐色土	14 淡褐色砂	21 暗綠灰色粘土	30 暗灰色粘土
5 素掘れ土	15 底色砂	22 灰褐色土	31 明黄褐色粘質土
6 青灰色粘質土	16 暗灰褐色粘質土	23 淡青灰色砂	
7 深褐色土	17 底色砂	24 淡黃褐色土	
8 黑褐色土	18 底色砂	25 淡褐色粘質土	
9 青灰色土	(明黄褐色粘質土含む)	26 淡青灰色砂	
10 淡灰褐色粘質土		(23 より粗い)	

発掘区南壁堆積土層図 (1/100)

ある。西、南ともに調査区外へ延びると考えられる。柱間は東西、南北ともに1.8m等間である。柱掘形は一辺が約0.4mの隅丸方形である。建物の廂、もしくは縦柱建物になると考えられる。主軸は国土方眼方位に一致する。

S K04 S B01の南で検出した平面が不整形な土坑で、南側は調査区外へ延びていくことが発掘区南壁の土層観察によってわかる。検出した部分での大きさは長辺が3.4m、短辺が3.0m、深さは1.1mである。埋土から弥生時代後期の土器が出土している。



発掘区平面図 (1/200)

S D 05 SK 04の東、発掘区東南隅で検出した。北で東に振れる方向で流れる。自然流路と考えられる。発掘区の南、東壁の土層観察により両側とも調査区外へ延びていくことがわかる。検出した部分では幅0.8m、深さ0.9mである。埋土から弥生時代後期の土器が出土している。

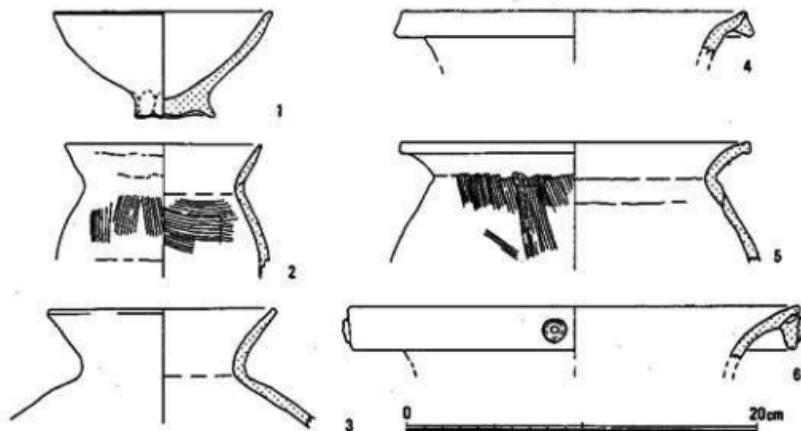
(池田裕英)

Ⅲ 出土遺物

本調査で出土した遺物には弥生土器、奈良時代の土師器・須恵器などがあるが、遺構に伴う遺物は少ない。ここではSK 04から出土した弥生土器について記す。

弥生土器は壺・甕・高杯・鉢・器台が出土している。大部分は小片となっており、形を知りうるものはない。壺は広口壺(3・4)が出土している。3は口縁を外反させ、端部は丸くおさめている。4は尖らせた口縁端部に粘土紐を垂下させる。端面はヨコナデで文様等はない。甕は外面をハケで調整しているもの(2・5)を図示したが、タタキをもつものが多く出土している。2は肩のはりがなく、頸部の境が明瞭でない。口縁はほぼ直線的で、端部を尖らせていている。5は頸部の屈曲が明瞭で、口縁部は外反して端部は面をとっている。頸部にタタキの痕跡が残り、タタキ成形の後ハケ調整を行なったことがわかる。口縁部外面の中ほどから下までススが付着する。鉢はあげ底状の底部で半球状の体部をもつもの(1)、弱く内彎した受口状の口縁のもの、ドーナツ状の底部をもつもの、底部に円孔を穿つもの等が出土している。器台(6)は垂下口縁をもち、端面に円形浮文をもつ。これらの年代は弥生時代後期後半のものと考えられる。

(中島和彦)



SK 04 出土土器 (1/4)

12. 平城京左京八条三坊三坪の調査 第202・203・204次

I はじめに

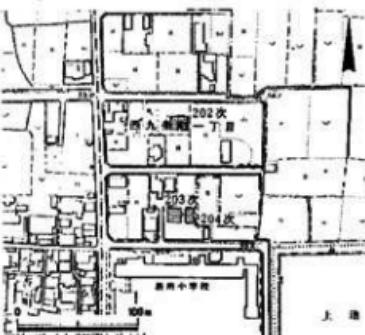
平城京左京八条三坊三坪内で、貨倉庫建設に伴い3件の発掘調査を実施した。左京八条三坊五・六・十一・十二坪には東市跡が推定されており、三坪はその西側に隣接した位置にある。東大寺薬師院文書によれば、東市西辺に一町規模の相模調邸が存在し、そこに堀河が南北に流れていることが知られる。これとの関連が、調査する上で注意された。

II 調査の概要

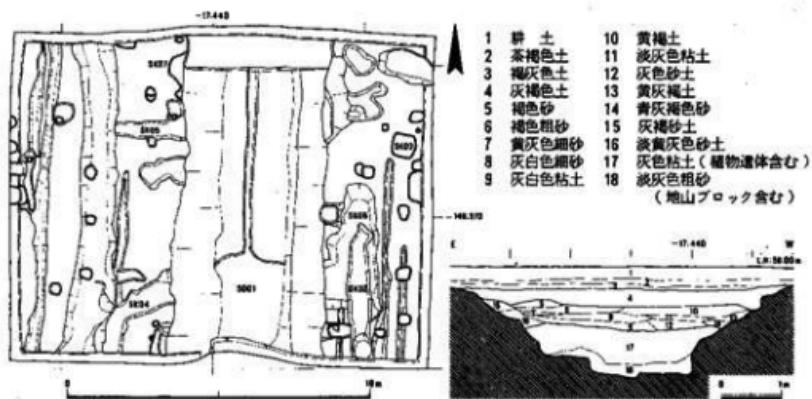
第202次調査

本調査は、平成2年7月9日から7月25日にかけて、奥村定子氏届出の奈良市西九条町1丁目4-5で実施した発掘調査である。発掘区内の基本的な堆積土層は、耕土、床土の下に茶褐色土、褐灰色土と続き、黄灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は概ね55.40mであり、遺構はすべてこの面で検出した。以下に主な検出遺構についてその概要を記す。

SD01 幅約3.0m、深さ約1.5mの南北溝。底中央に幅約0.3m、深さ約0.15mの断面矩形を呈する溝が掘削されているが、南側で浅くなっている。埋土は大きく3層に分かれる。下層には淡灰色粗砂の上に灰色粘土が厚く堆積し、中層には砂と粘土が細かく堆積



発掘区位置図(1/5000)



第202次発掘区平面図(1/200)・SD01堆積土層図(1/100)

している。上層には灰褐色土一層のみが認められ、水田化に伴い埋め立てられたものと考えられる。埋土からは、奈良時代の土器とともに16世紀の土器が出土した。

S K 02・S K 03・S K 04・S K 05 いずれも炭を多量に含む黒灰色土を埋土とし、奈良時代の土器が多く出土した土坑である。S K 02は、南北4.8m以上、東西約0.7m、深さ約0.2mで溝状を呈する。S K 03は、一辺約0.8mの隅丸方形で、深さ約0.2m。S K 05は、東西2.4m以上、南北約1.1m、深さ約0.15mで溝状を呈す。

S K 06 南北約4.6m、東西0.9m以上、深さ約0.3mの不整形土坑である。S K 02によって一部破壊されている。奈良時代の土器とともに弥生時代中期の土器が出土した。

S K 07 南北約1.7m、東西0.5m以上、深さ約0.1mの不整形土坑である。S D 01によって東半分が破壊されている。弥生時代中期の壺が一個体出土した。

第203次調査

本調査は藤谷鉢子氏届出の奈良市西九条町1丁目6-8において実施した発掘調査である。調査地は第202次調査を行なった場所から約70m南にあり、第202次調査で検出した南北溝S D 01の続きが検出されることが予想された。

調査は、申請地の北側に東西13m、南北12mの発掘区を設定して行なった。調査面積は約144m²で、調査期間は平成2年7月25日から8月9日である。

発掘区内における堆積土層は、耕土、茶褐色土、灰褐色土の下、地表下約0.6mで淡灰色粘土の地山にいたる。遺構はすべてこの地山上面で検出した。遺構検出面の標高は概ね55.0mである。検出した遺構には掘立柱建物7棟以上、掘立柱塀、溝、土坑、平安時代の井戸などがある。

S B 08 南北1間(1.0m)以上、東西2間(2.6m)の掘立柱建物。縦柱建物になるとを考えられる。柱間は南北が1.0m、東西が1.3m等間である。主軸は国土方眼方位北で西偏する。

S B 09 衍行1間(2.6m)以上、梁間2間(4.0m)の東西棟掘立柱建物。第204次発掘区でこの建物に統く柱穴が検出されていないので、衍行は3間の建物になるとを考えられる。柱間は衍行が2.6~2.8mと揃っていないが、梁間は2.0m等間である。主軸は国土方眼方位にはば一致する。

S B 10 衍行3間(4.8m)、梁間1間(1.4m)以上の南北棟掘立柱建物。第204次発掘区内でこの建物に統く柱穴が検出されていないので、梁間は2間の建物になるとを考えられる。柱間は衍行が1.6m等間である。主軸は国土方眼方位北で東偏する。

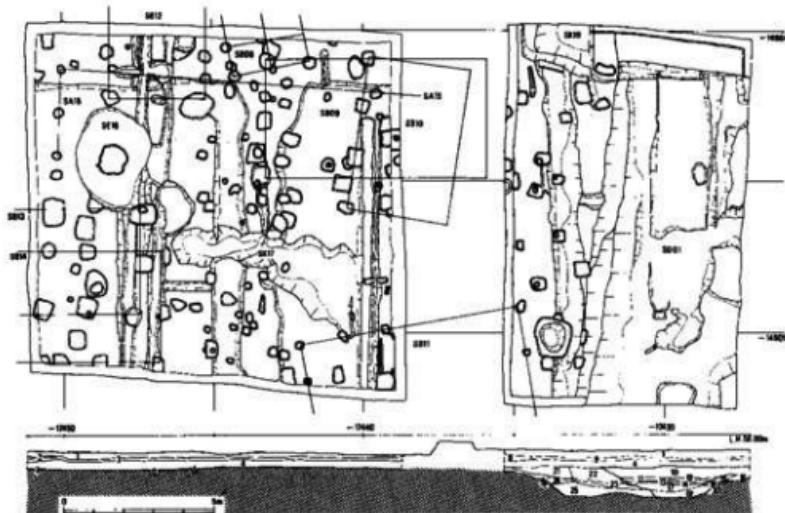
S B 11 東西2間(2.8m)以上、南北1間(1.4m)以上の掘立柱建物であるが、第204次発掘区で衍行、梁間ともこの建物につながる柱穴を検出したので、衍行が5間(7.2m)の東西棟建物になると考えられる。柱間は衍行、梁間ともほぼ1.4m等間である。主軸は国土方眼方位北で西偏する。

S B 12 東西 2 間(3.0m)、南北 1 間(1.5m)以上の掘立柱建物。発掘区外北へ延びる。柱間は東西、南北とも 1.5m 等間である。南北棟建物になると考えられる。主軸は国土方眼方位にほぼ一致する。

S B 13 桁行 2 間(3.4m)以上、梁間 2 間(3.4m)の東西棟掘立柱建物。発掘区外西へ延びる。柱間は桁行、梁間ともに 1.7m 等間である。主軸は国土方眼方位にほぼ一致する。

S B 14 桁行 2 間(4.0m)以上、梁間 2 間(3.6m)の東西棟掘立柱建物。発掘区外西へ延びる。柱間は桁行が 2.0m 等間、梁間が 1.8m 等間である。主軸は国土方眼方位にほぼ一致する。

S A 15 東西方向の掘立柱列で、7 間分(10.5m)を検出した。発掘区外東へ延びると考えられるが、第 204 次発掘区内でこれに続く柱穴を検出していないので、9 間以内でおさまるものと考えられる。柱間は 1.3~1.7m と揃っていない。主軸は国土方眼方位西で北偏する。



1 耕 土	8 茶褐色土	14 明灰色砂	21 黄灰色土
2 青灰色土	9 茶灰色土	15 黄灰褐色土	22 黄褐色土
3 青褐色土	10 灰褐色土	16 淡灰色砂	23 淡灰色粘土
4 灰褐色土	(4 より褐色濃い)	17 暗灰色粘土	24 灰色砂
5 黑灰色土	11 淡黄灰色粘砂	18 灰白色细砂	25 灰色粘土 (地山ブロック含む)
6 灰色土	12 黄灰色砂土	19 底色粘土	
7 灰黑色土	13 淡灰色粘砂	20 淡黄灰色细砂	

203次(左)・204次(右) 発掘区平面図・北壁堆積土層図 (1/200)

S A 16 S A 15の西端にとりつく南北2間(3.0m)の掘立柱列。柱間は1.5m等間である。主軸は国土方眼方位北で東偏する。

S K 17 調査区の中央南寄りで検出した不整形な土坑である。長辺が約6.0m、短辺が約1.2mである。深さは0.2~0.3mである。埋土は黒灰色土で、炭が多く混じっていた。土坑内からは平城宮土器Ⅲ~Ⅳの土器がまとまって出土した。

S E 18 堀形は東西2.4m、南北3.4mの平面精円形であるが、東端部分は上部を素掘り溝に削平されている。深さは1.8mである。井戸枠は堀形内に縦板組柄穴留めの枠を円形に組んだものである。検出状況から、井戸枠は堀形に据えられる際に50cm程度地面に打ち込まれたと考えられる。縦板は24枚用いられていた。底部付近に一辺が5~10cmの方形の穴があけられているが、枠を組むのには直接関係ないものと思われ、転用材であると考えられる。枠内埋土からは土師器の皿がまとめて出土した。また、井戸の底からは土師器の皿の上に斎串を5本入れ、土師器の皿で蓋をしたもの2組や、ウラジロの葉が出土しており、祭祀との関連が注意される。堀形の裏込めからは、奈良時代の土器や土馬、平安時代の綠釉陶器などが出土した。

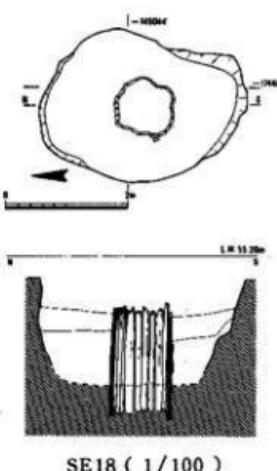
井戸枠内から出土した土師器の年代は10世紀中頃と考えられ、SE 18がこの時期まで使用されていたことがわかる。

第204次調査

本調査は、山口美公子氏届出の奈良市西九条町1丁目6-7で実施した発掘調査である。調査期間は、平成2年8月10日から8月23日である。

発掘区内の基本的な堆積土層は、耕土、茶褐色土、灰褐色土の下、地表下約0.6mで淡灰色粘土の地山となる。遺構はすべてこの地山上面で検出した。遺構検出面の標高は約55.0mである。検出した遺構には、第203次調査で検出した建物S B 11と一連の柱穴、発掘区の半分以上を占めるS D 01、土坑などがある。S B 11については第203次調査で述べているのでここでは、S D 01と土坑S K 19について記す。

S D 01 幅5.0m以上の南北溝である。深さは、北側で約1.0m、南側で約0.8m。発掘区中央付近で底が直線的に一段高くなり、南端でまた直線的に低くなる。すなわち、溝の底を南北幅約5.0mにわたって高さ約0.2mほど掘り残した形状となっている。その北端には、打ち込まれた木杭が1本残っており、ここに溝を横断する何らかの施設が存在した可



能性が考えられよう。また、西肩に比べて一段低い平坦面が東側に見られ、ここに3本の東西溝(深さ0.3~0.5m)が取りついている。埋土からは16世紀の土器が出土しており、時期的にみて第202次調査で検出したSD01の続きと思われる。中世辰市城に関連した遺構であろうか。

S K 19 南北1.9m以上、東西5.0m以上の土坑。深さ約1.0mで、2回に分けて埋められる。重複関係からSD01よりも古い。埋土から15世紀の土器が出土している。

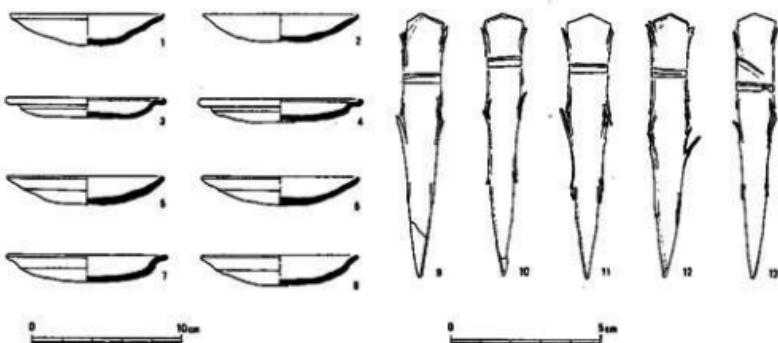
III 出土遺物

SE18の井戸枠内から出土した土師器(1~8)、斎串(9~13)について記す。

土師器はすべて小型の皿である。1は斎串を入れたものの蓋として、2は皿として用いられていたもの。两者とも底部外面は未調整で、口縁部外面を横なで、底部内面はなでを加えて仕上げている。3~8は下層の暗灰色粘土より出土したもので10個体以上あるが、口縁の形によってa、b、cの3タイプに分けることができる。aタイプは「て」字状口縁のもの(3・4)である。bタイプは「て」字状口縁であるが、口縁部をあまり屈曲させずに端部をつまみあげるもの(5・6)である。1・2もこの範疇に含まれる。cタイプは口縁部を屈曲させて端部を丸くおさめるもの(7・8)で、1~6の「て」字状口縁のものとは区別される。調整はいずれも1・2と同じである。

斎串は土師器の皿のなかに入れられていたものである。上端は板材の両端を圭頭状につくり、下端は剣先状につくっている。侧面からの切り込みは、左右4箇所に入れられており、1箇所の切り込みの回数は1~3回におよんでいる。いずれも全長は8.8cm、厚さは0.3~0.4cmを測る。図示していないが、この大きさのもの以外に、全長25.0cmのものも出土している。同じ形のものであるが、側面からの切り込みは5箇所に入れられており1箇所の切り込み回数は1~3回である。

(鎌方正樹・池田裕英)



SE18出土遺物(土器は1/4、斎串は1/2)

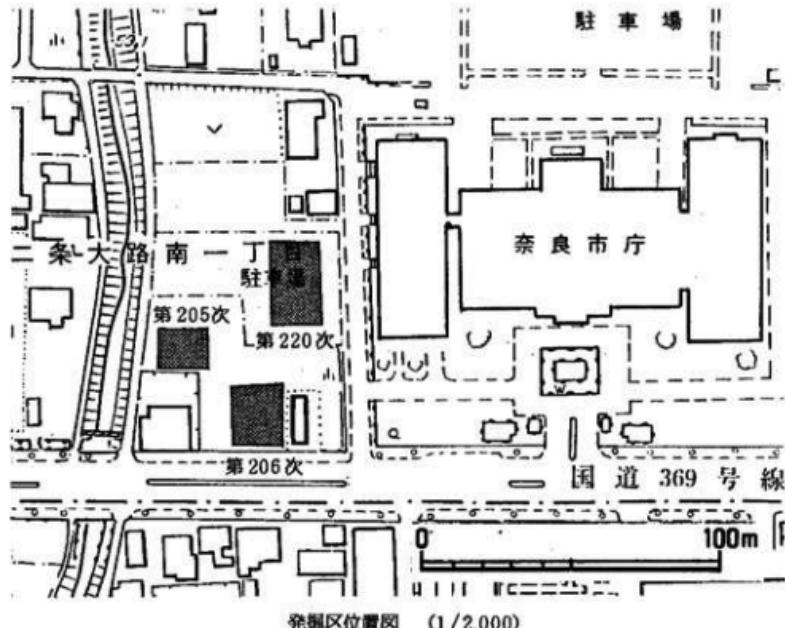
13. 平城京左京三条二坊十坪の調査 第205・206・220次

I はじめに

平城京左京三条二坊は平城宮の東南隅と接し、まさに平城京内の一等地をなす地域の一つである。坊内の調査例を見ると、一・二・七・八坪は長屋邸として四坪分が一体利用されていた。六坪は奈良時代前半に官衙的な建物群が造営され、中頃から後半は国指定特別史跡である庭園遺構が営まれており、一坪利用が続いている。この他、九坪では、坪のほぼ中央部での調査で大規模な掘立柱建物が検出され、十五坪でも一坪利用の邸宅が確認されているなど、本坊内は一坪が最小の土地利用単位であったかの状況である。

今年度、十坪内の3箇所で発掘調査を実施した。十坪は西側に薙川が流れる坪で、一坪利用されている上記各坪に挟まれるような位置にある。十坪のこれまでの調査例では、市庁舎建設に伴う調査で奈良時代の掘立柱建物2棟、槽1条、井戸1基、マンション建設による北辺西寄りの調査で奈良時代の掘立柱建物1棟が確認されている。今年度の調査地は、第205次、第206次調査が坪の西辺、南辺のそれぞれ中央部、第220次調査が坪のほぼ中央付近に相当する。

(関野 豊)



発掘区位置図 (1/2,000)

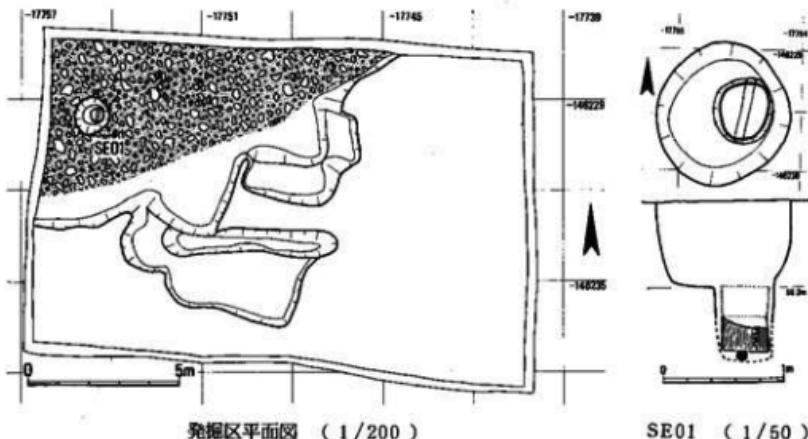
II 調査の概要

第205次調査

本調査は、奈良市二条大路南1丁目2-7において実施した、(株)松岡ビルディング届出の事務所ビル建設に伴う発掘調査である。調査面積は約240m²である。

基本的な層序は、アスファルトの下に造成土（厚さ約1.5m）、耕土・床土が続き、次いで淡青灰色微砂層となるが、これは土質からみて布状洪水の堆積で、発掘区を広く覆っている。奈良時代の土器を包含するが、割れてはいるものの比較的まとまった状態で出土した個体もあり、これらは近くから流されてきたものと思われる。また、古墳時代の土器も認められた。瓦の出土量は土器に比べて少量である。他に炭化しているため遺存状態は良くなかつたが、網代の断片を検出した。その下の暗灰色砂礫層は河道そのものの堆積で、出土した遺物のほとんどは摩滅が著しく、時期の明らかなものは少ない。しかし、淡青灰色微砂層と同様に奈良時代と古墳時代の土器を包含しており、上流部には古墳時代の遺跡の存在が予想される。暗灰色砂礫層の下層は水性粘土層である。完掘はできなかつたが、断ち割り調査の所見では遺物を包含していなかつた。この下の淡黄茶色粘土層には微量の土器片が含まれていたが、時期等を推定しうるものはない。その下が暗茶褐色粘土層の地山となる。地山上面で自然流路と思われるものを確認したが、規模や時期は不明である。

遺構としては淡青灰色微砂層の上面（標高59.7m）から井戸SE01を検出した。上部はかなり削平されているようで、深さ約1.3mまでが残存した。掘形の周囲が暗灰色砂礫層であるためか最下部に太さ約6cmの丸太を1本置き、そのうえに径約40cmの曲物を据えている。断面観察から曲物は2段積みと推定できるが、1段しか遺存していなかつた。曲物

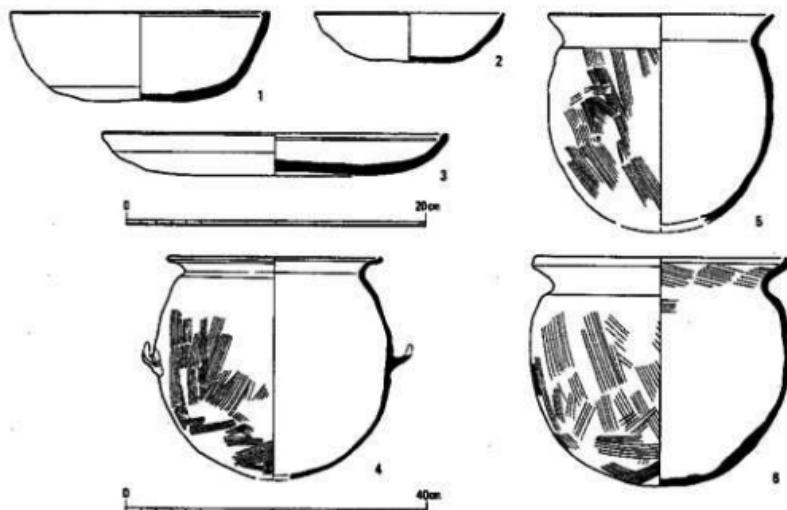


内の埋土は灰色シルトに掘形の壁面中の砂礫が混入したものであるが、掘形内の埋土は淡青灰色微砂と礫が混ざったものであり、布状洪水によって一度に埋まったものではない。この他に、淡黄茶色粘土層上面でピットを数個検出した。

出土遺物の中で、土器には古墳・奈良時代の土師器、須恵器があるが、その量は極めて少ない。奈良時代の土器について若干良好なものを選び出し図示しておく。須恵器には、杯E(1)がある。底部をへら切りしたのちナデ調整を加えている。土師器には皿A(3)、椀D(2)、甕A(5・6)、甕B(4)がある。いずれも奈良時代後半の特徴をもつものである。1~4は淡青灰色微砂層から、5・6は井戸S E 01から出土。その他河道の暗灰色砂礫層からも奈良時代後半の土器が出土した。瓦当は6311型式D種と6664型式D種が各1点ずつ出土している。

以上、遺物から見た遺構と土層の関係は、奈良時代後半頃まで流れていた河川が氾濫して淡青灰色微砂層を広く堆積させ、その後すぐに井戸が掘られたことになる。井戸以外の遺構が認められないことに関しては、床土の直下に奈良時代後半の洪水堆積土である淡青灰色微砂層が続くことからも一帯が削平されていることは明らかであるが、奈良時代後半頃まですぐ横に河川が流れていたため、あまり宅地としては適していなかったものと考えられる。また、今回確認した河川は菰川の旧河道と判断できるが、北東へどのくらい続いているかは周辺の調査でも未確認である。

(関野 豊・三好美穂)



出土土器 (1~3・5・6 1/4、4 1/8)

第206次調査

本調査は、奈良市二条大路南1丁目98-2で実施した、村本不動産株式会社届出の事務所ビル建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京左京三条二坊十坪の南辺中央に相当する。南北19m、東西16m（調査面積 304m²）の発掘区を設定して行なった。調査期間は平成2年8月6日～同年8月27日である。

発掘区内の基本的な堆積土層状態は、地表面下2mまで造成土があり、その下耕土、床土、灰色土と続き、遺構検出面（地山）の灰色粘土あるいは灰色粗砂にいたる。遺構検出面の標高は59.6mである。

検出した遺構には、溝（自然流路）、柱穴、土坑がある。主なものを以下に述べる。

S D 01 発掘区東端で検出した南北方向の自然流路。発掘区南端でやや東に向きをかえる。幅1.5m以上。深さ0.5m以上。埋土は灰色砂。

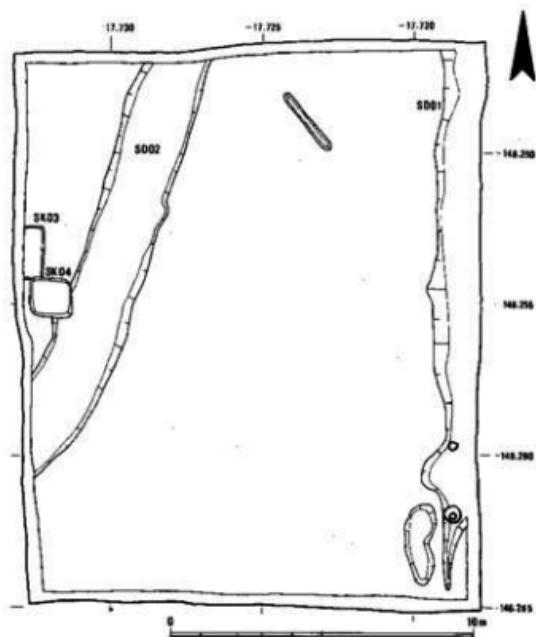
S D 02 発掘区西寄りで検出した、北でやや東に振れる南北方向の自然流路。幅2.2m。深さ0.5m。埋土は上層が灰褐色土、下層が灰色砂。

S K 03・04 発掘区西端で検出した平面不整円形の土坑。粘土採掘坑と思われる。S K

04は径1.5m。深さ0.5m。埋土は上層が灰色土、下層が灰色粘土。

出土遺物には弥生時代の土器、古墳時代の土師器・須恵器、近世の土器・瓦がある。弥生・古墳時代の遺物はS D 01・02と柱穴から、近世の遺物はS K 03・04から出土。

今回の調査では、当初予想された奈良時代の遺構、遺物はまったく確認できなかった。それは周辺の発掘調査の遺構面の高さや遺構の検出状況からみて、かなりの削平を受けていたためであると思われる。（森下浩行）



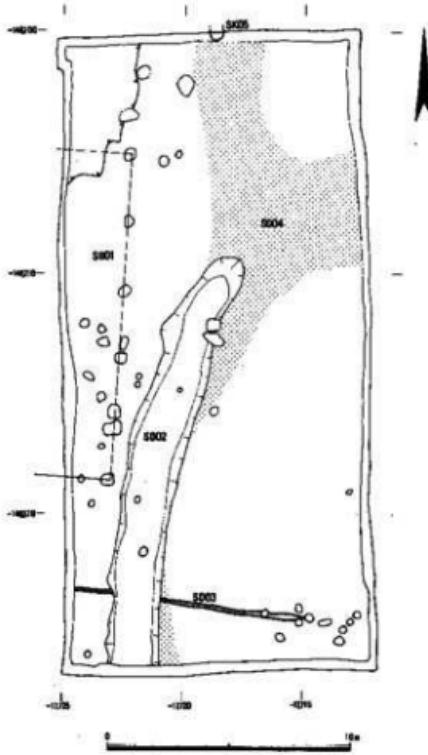
発掘区平面図 (1/200)

第220次調查

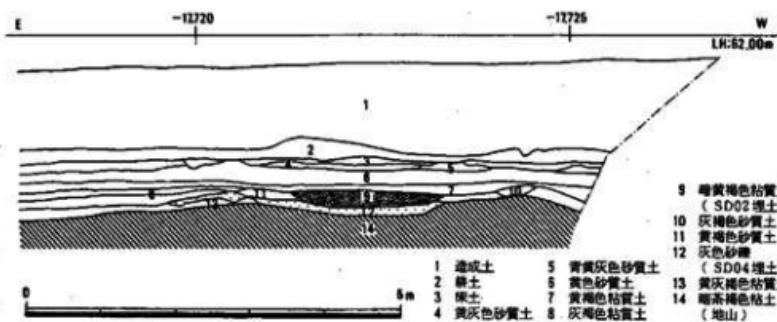
本調査は、奈良市二条大路南1丁目96-1において実施した、レナ興産(有)届出の事務所ビル建設に伴う事前の発掘調査である。当該地は、平城京左京三条二坊十坪のほぼ中央部で、第205次調査地の北東、第206次調査地の北である。

発掘区は建設予定地の中央やや西寄りに南北30m、東西17mの規模で設定した。しかし、造成土が厚く、遺構検出面は現地表面下約1.6mである。遺構検出面では、南北約26m、東西約12.5m、面積は約320m²となった。調査期間は平成3年1月21日から同年2月28日までである。

検出構造 発掘区内の基本的な層序は、造成土(約1.0m)、耕土(約0.2m)、床土(約0.1m)、黄色砂質土、黄褐色粘質土(遺構検出面)、黄褐色砂質土と続き、暗茶褐色粘土(地山)にいたる。遺構検出面の標高は、約59.9mを測る。



発掘区平面図 (1/250)



発掘区南壁堆積土層図 (1/80)

検出した主な遺構は、掘立柱建物、溝、自然流路、土坑などである。掘立柱建物は発掘区西辺で検出した。柱穴はいずれも黄褐色粘質土上面から掘りこんでいる。柱掘形は直径0.4~0.5mを測る。

S B 01 南北棟掘立柱建物で、発掘区外西へのびる。桁行5間(13.5m)で、柱間は北から4間は2.8m等間、南の1間は2.3mである。しかし、東側柱列のみの検出であるため、坪内を東西に区画する南北掘立柱塀の可能性もある。

S D 02 北でやや東にふれる自然流路である。黄褐色砂質土上面で検出した。埋土は暗黄褐色粘質土で、発掘区南半で幅約2.5m、南壁断面で深さ約0.2mを測る。遺物は少量の出土で、時期は不明である。

S D 03 S D 02同様、黄褐色砂質土上面から掘りこんでいる東西溝である。遺物はなく時期は不明であるが、重複関係からS D 02より古い。

S D 04 S D 02の直下で検出した自然流路である。埋土は灰色砂礫で、発掘区南半で東西幅約3.8m、深さ約0.1mを測る。北壁、東壁断面では地山上面で堆積し、幅約5.0m、深さ約0.4mを測る。また、西壁断面では灰色砂礫層の堆積は確認できず、発掘区東半に広がる堆積である。弥生土器の細片が数点出土するが、摩滅が著しく時期は特定できない。

S K 05 北壁排水溝内より検出した土坑で、S D 04の埋土である灰色砂礫上面から掘りこんでいる。埋土は灰色粘質土で、掘形は直径約0.5m、深さ約0.3mを測る。古墳時代の土師器高杯が1点出土した。

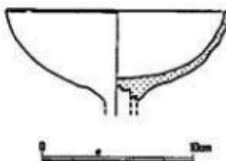
出土遺物 遺物はわずかで、遺物整理箱4箱分出土した。しかも遺構に伴うものが少なく、ほとんどが包含層、S D 04からの出土である。内訳は、奈良時代の土師器、須恵器、瓦、古墳時代の土師器、弥生土器などである。細片であるため、遺構の時期について詳細を判断するには至っていない。

図示したものは、SK 05より出土した古墳時代の土師器高杯である。土坑の中層から、ほぼ正位の状態で出土した。口径は14.5cmを測り、杯部は浅い椀形の形態である。なお、脚部は欠けている。調整は内外面ともヨコナデによるものである。器壁の剥落が激しくその他の調整は不明である。布留式土器の新しい段階である。

III まとめ

奈良時代の遺構は、第220次調査検出の掘立柱建物1棟と第205次調査検出の井戸のみである。周囲の坪に比べて十坪内に遺構が少ないので河道が近接していた関係か、あるいは削平されたためであるかは不明である。なお、第206、220次調査で検出した自然流路(S D 02)は同一のものと確認できた。

(宮崎正裕・池田裕英)



SK05出土器 (1/4)

14. 平城京左京八条二坊八坪の調査 第209次

I はじめに

本調査は、奈良市杏町467番地の1で実施した、(仮称)奈良市南部第二体育馆建設事業に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京左京八条二坊八坪の北西部分に相当する。調査地は以前、ため池であったため遺構の存在が危ぶまれた。そのため、可能な限り、池の堤に相当する部分を含めて南北30m、東西8mの発掘区を設定し、その後遺構の残存状態を知るために一部東へ5m拡張した。調査面積は245m²である。調査期間は平成2年9月10日～11月2日である。

II 検出遺構

発掘区内の土層堆積状態をみると、ため池の埋土が地表面から約5mあり、その下に池底の堆積土が続き、淡青灰色細砂土あるいは暗灰色粘土の遺構検出面にいたる。遺構検出面の標高は54.0mである。なお、暗灰色粘土は発掘区北半部でのみ認められる。淡青灰色細砂土の上に堆積するものであり、奈良時代以前の流路、あるいは落ち込みの埋土と思われる。遺構検出面には機械の掘削等による擾乱があり、全体に削平されていると思われる。

検出遺構には、掘立柱建物、掘立柱塀、素掘り溝、土坑がある。以下、主なものをとりあげて述べる。

S A01 発掘区北端で検出した南北方向の掘立柱塀。5間以上。発掘区外北へのびる。柱間は1.5m等間。

S A02 S A01と重複する南北方向の掘立柱塀。2間以上。発掘区外北へのびる。柱間は2.1m等間。北でやや西に振れる。重複関係からS A01より古いことがわかる。

S A03 S A01・02に平行して検出した掘立柱塀。北でやや東に振れる。南北2間以上。発掘区外北へのびる。柱間は南から2.7m、2.1m。

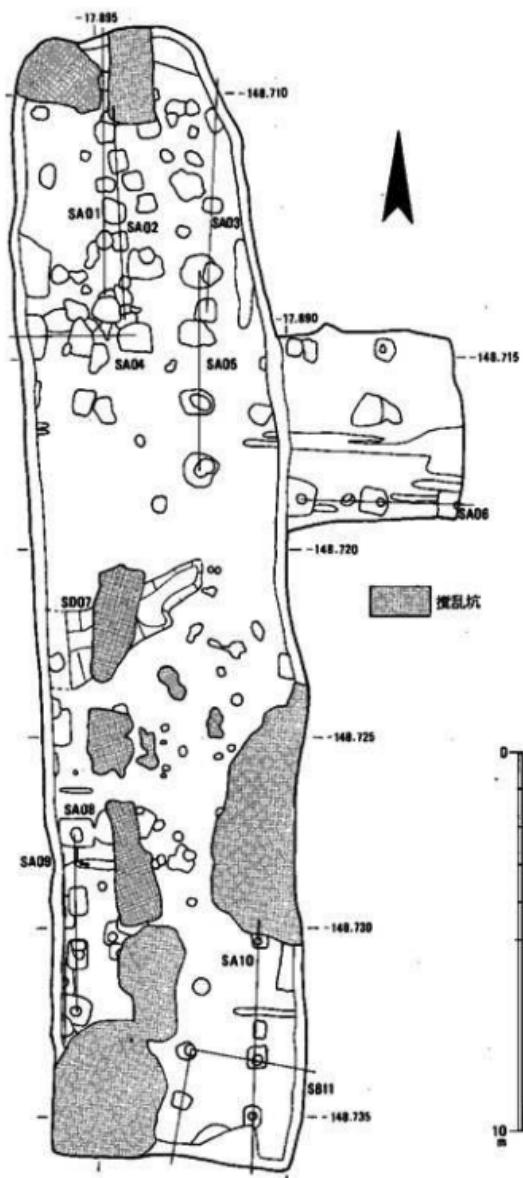
S A04 S A01・02の南に位置する東西方向の掘立柱塀。東西2間以上。発掘区外西へのびる。

S A05 S A04の東に位置する南北方向の掘立柱塀。3間。柱間は1.8m等間。

S A06 S A05の東で検出した東西方向の掘立柱塀。2間以上。発掘区外東へのびる。柱間は2.1m等間。

S D07 発掘区中央で検出したやや斜行する東西方向の素掘り溝。幅はもっとも広いところで2.1m。深さ0.5m。埋土は上層が暗灰色土、下層が青灰色土である。

S A08 発掘区南端で検出した南北方向の掘立柱塀。3間。柱間は1.5m等間。桁行3間の南北棟掘立柱建物になる可能性がある。



発掘区平面図 (1/160)

S A 09 S A 08と重複する南北方向の掘立柱塀。3間。柱間は1.8m等間。桁行3間の南北棟掘立柱建物になる可能性がある。

S A 10 発掘区東南隅で検出した南北方向の掘立柱塀。南北2間以上。柱間は2.3m等間。

S B 11 発掘区東南隅で検出した掘立柱建物。南北2間以上、東西2間以上。北でやや東に振れる。柱間は東西1.8m、南北1.5m。

なお、出土遺物には古墳時代の埴輪、奈良時代の須恵器、土師器、瓦、中世の瓦器、不明鉄製品がある。

今回の調査では、調査地が以前ため池であったことから遺構の存在が危ぶまれたが、遺構が残存していることが明らかになった。遺構検出面の標高54.0mは付近の調査地の遺構検出面の標高とほぼ同じであり、また東への拡張区でも遺構の存在が確認できたため、以前ため池であったにもかかわらず、池底が遺構検出面にまで達しておらず、敷地全体に遺構が残存している可能性が高いと思われる。

(森下浩行)

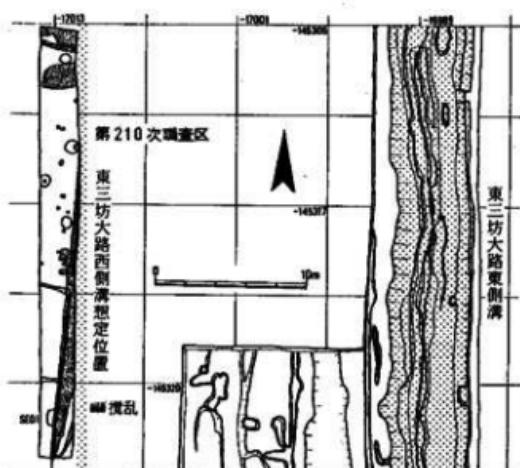
15. 平城京左京一条三坊十四坪の調査

第210次

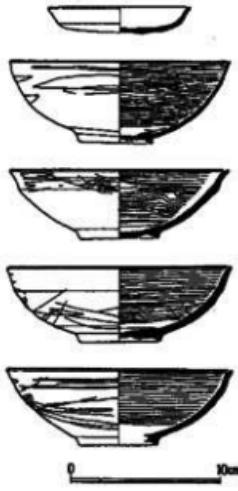
本調査は、奈良市法華寺町1351において実施した一条高校部室新築に伴う発掘調査である。一条高校敷地内の過去4回の調査で、十四坪は、十一・十二・十三坪と合わせて四坪占地の宅地であった可能性が高いことが明らかにされている。今回の調査地は坪の東端南寄りに位置する。

調査の結果、高校建設時に一帯は大規模に削平されていることが判明した。遺構は鎌倉時代の井戸1基を除き深さ数cmしか残っておらず、遺物もほとんど出土していないためその時期や性格は不明である。井戸の掘形は1辺1.2mの隅丸方形で、深さは2.3mである。枠材は抜き取られていたが、底に径約40cm、深さ約30cmの曲物を据えたような痕跡、壁には板材を立てていた痕跡を数箇所、杭の痕跡を数箇所確認した。埋土は上層が黒灰色粘質土、下層は灰色砂混粘土である。川越編年II-Bの瓦器碗が数個体出土しており、12世紀中頃以降に廃絶したと考えられる。

調査地の東隣で東三坊大路東側溝が確認されているが、これは9世紀頃に大規模な改修を受け、平城京計画当初の向きを失ったと考えられている。したがって朱雀大路と平城宮南面大垣の国土座標に対する振れ、朱雀門心から東三坊大路西側溝までの計画尺を使用して考えれば、調査地は西側溝の一部が確認されるべき位置になる。西側溝は削平されて消滅したと考えられるが、側溝心間距離は80尺ではなかった可能性も残る。（関野 豊）



発掘区平面図 (1/400)



SE01出土土器 (1/4)

16. 平城京左京三条三坊十三坪の調査 第211次

I はじめに

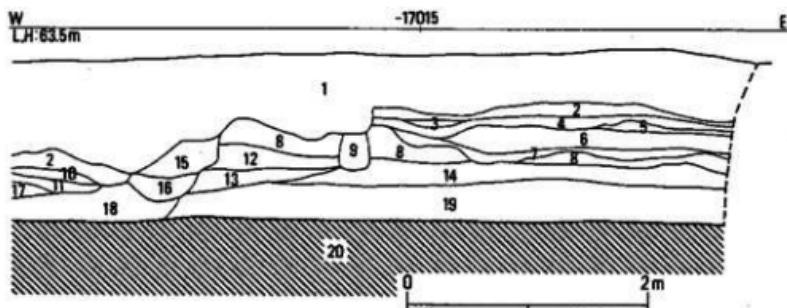
本調査は、奈良市大宮町4丁目245番地における(株)松田組届出の事務所ビル建設工事に伴う事前の発掘調査である。当該地は、平城京三条坊復元によると左京三条三坊十三坪に相当しており、敷地東辺部には東三坊大路の西側溝が想定されるところである。昭和63年度には、本調査地西隣で奈良県立橿原考古学研究所により調査が行なわれており、奈良時代の掘立柱建物を数多く検出するなど成果をあげている。

今回の調査では、東三坊大路西側溝の検出及び十三坪内の宅地の利用状況を把握することに主眼をおき、東西13m、南北25m(約330m²)の発掘区を設定して行なった。

調査期間は平成2年10月1日から11月2日までである。

II 検出遺構

発掘区内の基本的な堆積土層は、厚さ0.5~1.0mの造成土の下、旧耕土・床土、暗灰色粘質土(0.1m)、淡黄灰色粘土(0.1m)と続き、地表面から約1.2mで黄褐色粘土の地山に達する。発掘区東端では、旧耕土が約0.5mほど高くなってしまい、当時の水田面には段差があったことがわかる。遺構検出面は地山上面で、これらの標高は概ね62.0mを測る。主な検出遺構には、奈良時代の掘立柱建物1棟、柱列2条、土坑2がある。この他に、中・近世の土坑2、素掘り溝なども検出した。



1 黄褐色土(盛土)	6 淡茶色土	11 暗灰色粘質土	16 淡緑灰色細砂
2 暗褐色土(旧耕土)	7 灰色粗砂	12 淡黄褐色土	17 灰色土(Fe含む)
3 暗茶色土	8 黄褐色土	13 淡黄褐色土	18 灰色粘土
4 赤褐色土	9 淡茶色土	14 淡灰白色粘土	19 灰色粘土(マンガン含む)
5 暗色土	10 暗灰色砂質土	15 淡灰色細砂	20 黄褐色土(地山)

発掘区北壁堆積土層図 (1/50)

S A 01 発掘区中央部で検出した南北3間(8.1m)以上の掘立柱列。柱間は2.7m等間。柱掘形の深さは5~10cmと浅く、かなり削平をうけたものと考えられる。

S A 02 S A 01と重複して検出した南北3間(7.8m)以上の掘立柱列。柱間は2.6m等間である。重複関係からS A 01よりも新しいことがわかる。

S B 03 発掘区北西隅で検出した東西3間(7.2m)、南北1間(2.6m)以上の東西棟建物で、南面に廻をもつ。柱間は、身舎及び廻の桁行がともに2.4m等間。廻の出は2.6m。柱掘形はいずれも小さく、浅い。

S K 04 S A 01と重複して検出した東西1.2m、南北1.6mの平面隅丸方形の土坑。内埋土から弥生土器片、奈良時代の土師器・黒色土器片が少量出土した。重複関係からS A 01よりも新しいことがわかる。

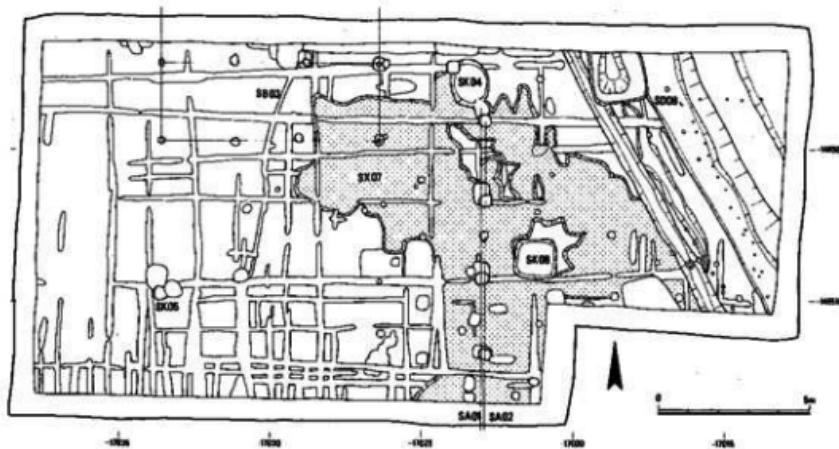
S K 05 発掘区内西南隅で検出した東西0.2m、南北0.2mの平面円形の土坑。掘形の断面は擂鉢状で、深さ0.2mを測る。埋土から奈良時代の土師器皿が1点出土した。

S K 06 S A 01・02の東側で検出した東西1.4m、南北1.2mの平面方形の土坑。深さは0.3m。埋土から木片と土師器の細片が出土した。時期は不明である。

S X 07 発掘区中央部付近で検出した土坑。粘土採掘坑と考えられる。深さは0.1mと浅く、坑内には淡黄灰色土が堆積し、瓦器片が数点出土した。

S D 08 発掘区東辺部で検出した全長10.0m以上の斜行する南北溝。東岸に沿って護岸の杭が打ち込まれている。護岸の杭には、径2~5cm程度の丸杭のほか、幅10cm、厚さ1cmの板材が利用されている。出土遺物がないため時期は不明。

(三好美穂)



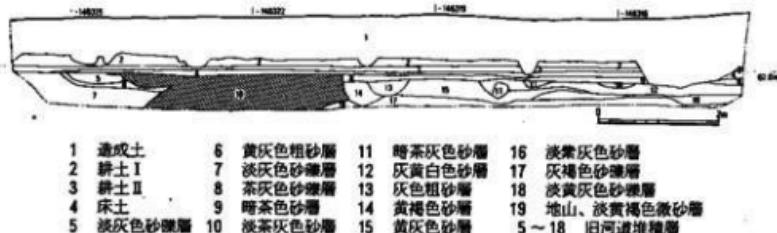
発掘区平面図 (1/200)

17. 平城京左京三条三坊十四坪の調査 第212次

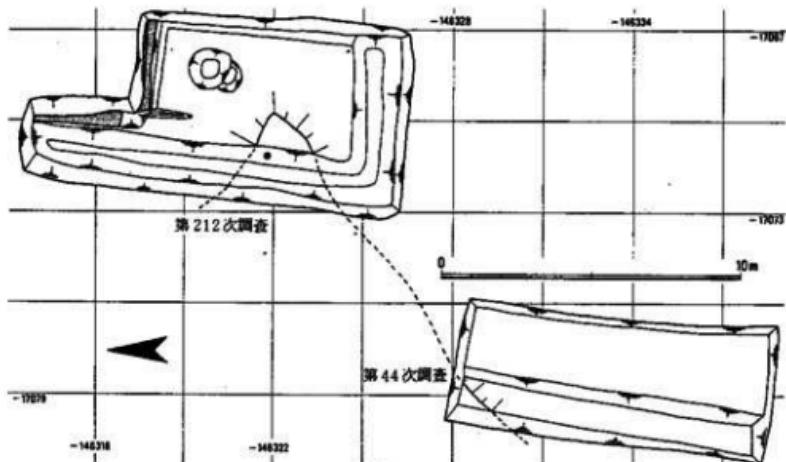
本調査は、奈良市大宮町4丁目 223-1において実施した奈良市立大宮小学校給食室新築に伴う発掘調査である。南西約4mのところには昭和58年度に実施した平城京第44次発掘調査地点が、南約30mのところには昭和56年度の第12次発掘調査地点が位置する。

発掘区内の堆積土層は、小学校建設以前の耕土の下に砂層、砂混礫層、砂礫層が互層となって続いており、第44次調査で確認している佐保川旧河道の延長部にあたる。遺物が出土しなかったため河道の時期は不明であるが、浸食されずに残った左岸部を一部検出することができた。その上面で柱穴を1個確認し、調査地の西方には遺構面が遺存しているものと思われる。また、第12次調査地点では河道を確認していないため、川幅についてはある程度限定できよう。

(関野 壊)



発掘区西壁堆積土層図 (1/100)



発掘区平面図 (1/200)

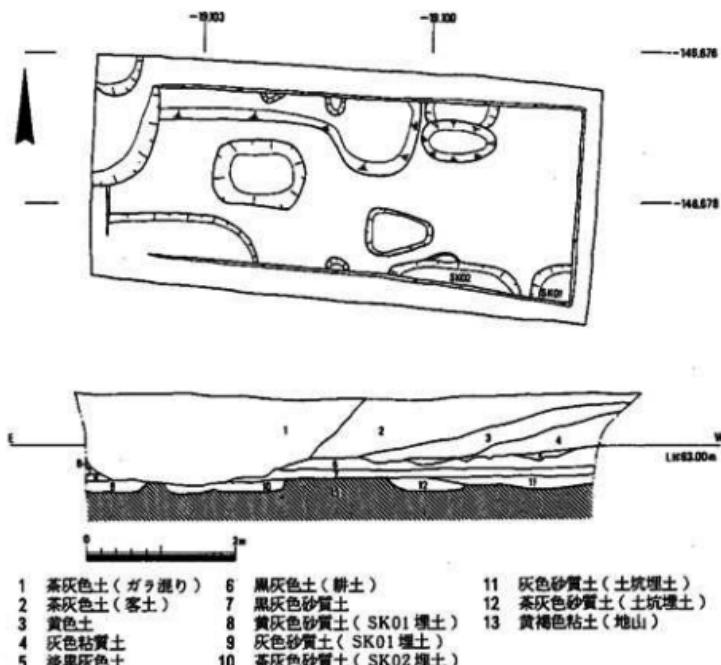
18. 平城京右京四条一坊十六坪の調査 第214次

本調査は、都跡消防団ポンプ格納庫建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、奈良市四条大路4丁目1-4で、平城京の条坊復元では、右京四条一坊十六坪の南西隅および西一坊大路と十五・十六坪の坪境小路交差点に推定される。調査期間は、平成2年10月31日から同年11月7日まで、発掘面積は約27m²である。

発掘区内の土層は、造成客土、耕土、黒灰色砂質土と続き、地表下約0.9~1.0mで黄褐色粘土の地山となる。遺構はすべてこの黄褐色粘土上面で検出した。

検出した遺構には、土坑7基がある。SK01より13世紀末から14世紀初めにかけての瓦器片が出土しており、いずれの土坑も13世紀以降のものと考えられる。なお、本調査地の南に隣接する第8次調査地では、中世の粘土採取を目的としたらしい土坑を多数検出しており、今回検出した土坑も採土坑と考えられる。
 (原田憲二郎)

註) 奈良市教育委員会『昭和55年度 奈良市埋蔵文化財調査報告書』(1981)

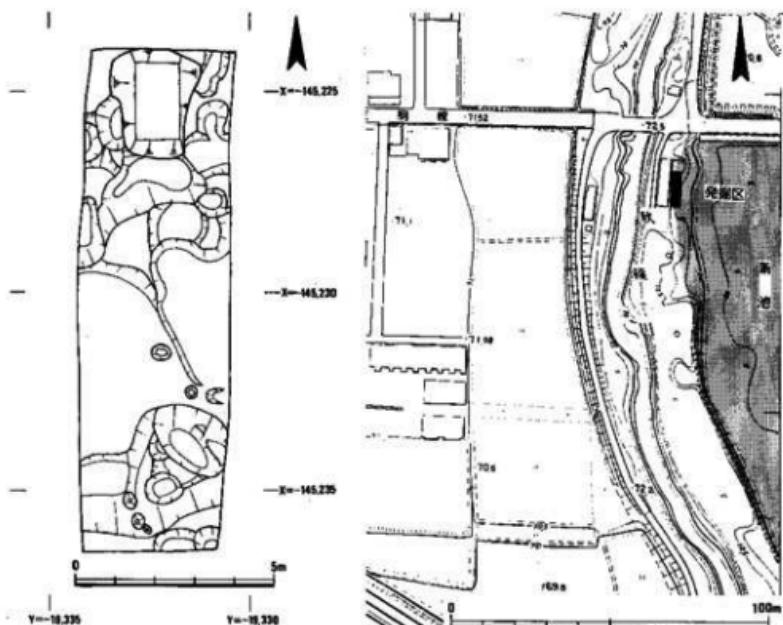


発掘区平面図・南壁堆積土層図 (1/80)

19. 平城京右京一条二坊六坪の調査 第215次

本調査は、奈良市二条町54-6番地において実施した奈良市中消防署西大寺北出張所の改築に伴う事前の発掘調査である。調査地は条坊復元で右京一条二坊六坪の北辺にあたり、一条条間路南側溝が推定される。東西4m、南北13m、調査面積52m²の発掘区を設定した。調査期間は平成2年11月6日から11月9日までである。なお、調査地の西隣には秋篠川が南流していることや、昭和40年代後半まで新池というため池があったことなどからみて遺構の存在は極めて少ない場所である。調査の結果、検出した奈良時代の遺構ではなく、発掘区の北辺でため池の堤部分と考えられる黄褐色土の高まりと、南東の隅で暗灰色粘質土の池の底を確認した。池内には池を埋めた際の黒色土、暗黃灰色土が堆積する。池底の下層の堆積状態を調べるために、発掘区北辺を更に一段掘り下げたが、砂と粘土が互層となって堆積していた。第207次調査で一条条間路南側溝が検出されており、その結果から南側溝の位置を求めるに調査地北の一条通りに想定される。

(篠原豊一)



発掘区平面図 (1/150)

新池と発掘区の位置 (昭和46年奈文研1/1,000地図
「西大寺」使用)

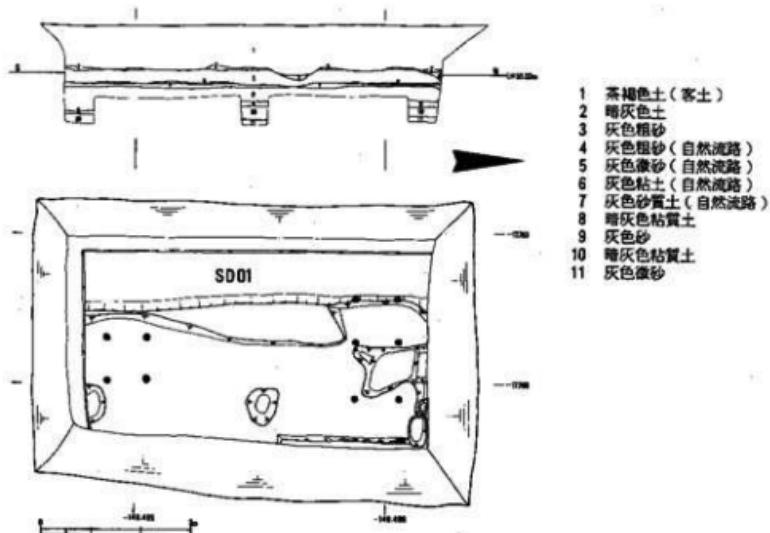
20. 平城京左京八条二坊一坪の調査 第216次

本調査は、杏町老人憩の家建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、奈良市杏町387-12番地で、平城京の条坊復元では、左京八坊二条一坪の西辺に推定される。本調査地の南に隣接する第175次調査地^{註1)}と、またその南に隣接する第13次調査地^{註2)}では、いずれも水田化以前には滞水した低湿地であったとの結果を得ている。調査は東西8m、南北6m、面積48m²の発掘区を設定して行なった。調査期間は平成2年11月9日から11月19日までの11日間である。

発掘区内の堆積土層は、厚さ0.8mほどの造成土の下に、暗灰色土、暗灰色粘質土、灰色砂、暗灰色粘質土、灰色砂と続き、砂と粘質土が互層となっている。この堆積状態からみて、2時期以上の南北河道が考えられる。遺構検出は暗灰色土の下の暗灰色粘質土上面で行なったが、遺構は無く、共同浴場の旧基礎の松杭が打ち込まれているのみであった。遺物は、土師器の小片等、ごく少量で、整理箱1箱に満たない。今回の調査地も、前述の調査地と同様に水田化以前は、滞水した低湿地であったという結果を得た。(原田憲二郎)

註1) 奈良市教育委員会『平成元年度 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』(1990)

註2) 奈良市教育委員会『昭和56年度 奈良市埋蔵文化財調査報告書』(1982)



発掘区平面図・西壁堆積土層図 (1/120)

21. 平城京左京五条三坊九坪の調査

第217次

本調査は、奈良市恋の窪1丁目661-4番地において実施した株式会社長谷工開発の集合住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の三条復元では左京五条三坊九坪の北辺中央にあたり、調査地の北辺に四条大路南側溝が想定される。なお、平城京の左京三坊には東堀河が南北に流れていることが知られており、これまで六条から九条までの^{註)}東堀河は発掘調査によって確認されている。三条復元での東堀河の推定位置は現存する水田畦畔によると五条条間路まではほぼ南北に流れ、この以北は水田畦畔が乱れていることからやや東に振れ現在の菩提川に合流すると考えられている。この東堀河が五条条間路以北も南北に流れていたと仮定するとその位置は調査地の西辺に想定される。調査面積は約400m²で、調査期間は平成2年11月19日から12月25日までである。

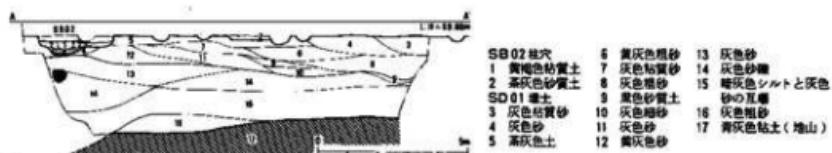
発掘区の堆積土層は地表から0.6mまでは造成土でその下に、黒灰色土の耕土、灰色砂質土、黄灰色土があり、耕土下0.8mで黄褐色粘質土の地山もしくは灰色砂か灰色砂質土の層になる。奈良時代の遺構はこの面で検出した。この遺構検出面の標高は概ね58.8mである。地山が残る面は発掘区南西の一部分のみで、他は奈良時代以前の河道の堆積である。

検出した遺構には、奈良時代以前の河道1条、奈良時代の掘立柱建物1棟、鎌倉時代の溝2条、近世の土坑1基がある。

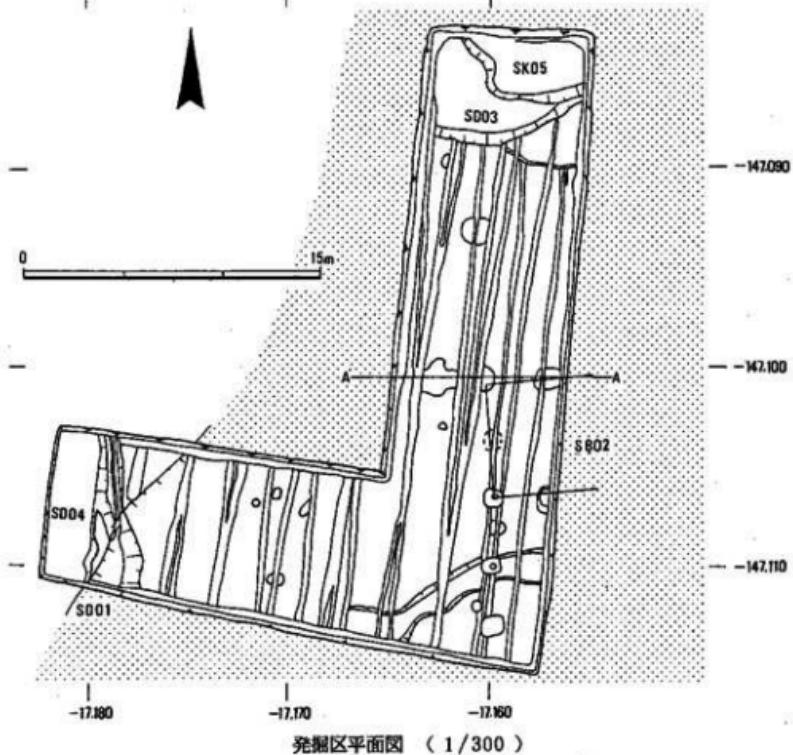
S D 01 発掘区のほぼ全域で検出した奈良時代以前の南北に流れていたと考えられる河道で、発掘区全体に広がる。河道の深さは、発掘区内で奈良時代遺構面から1.4mである。堆積層は大きく上下2層にわかれ、上層は灰色の粗砂と細砂が互層、下層は暗灰色シルトと灰色砂の互層となる。暗灰色シルト層は自然木を含む植物腐蝕土である。河道底の地山は青灰色粘土で堅くしまっている。上層の灰色砂からは縄文時代晚期の土器細片が2点出土した。下層からは腐蝕した自然木、落葉以外出土しなかった。

S B 02 発掘区中央で検出した奈良時代の東西掘立柱建物である。西妻柱を欠くが桁行2間以上、梁間2間の建物に復元できる。柱穴の深さは0.2m前後と浅い。

S D 03 発掘区北辺で検出した東西方向の素掘り溝で、南岸を検出した。幅3m以上、



SD 01 堆積土層図 (1/200)



発掘区平面図（1/300）

深さ0.6mを測る。埋土は黄褐色砂土で、奈良時代の土器片、瓦片が少量出土した。

S D 04 発掘区西辺で検出した南北方向の素掘り溝である。溝の東岸を検出したのみでその全容は不明である。幅3m以上、深さ0.5~0.8mを測る。埋土は茶褐色土、灰色砂質土で平安時代末頃の土師器皿片、瓦器碗、青磁碗片が少量出土した。

S K 05 発掘区北辺で検出した土坑である。埋土は灰色粘土で遺物は出土しなかった。
S D 03及び水耕耕作に伴う細長い南北素掘り溝よりも新しい土坑である。

先述したように調査地には、四条大路南側溝、東堀河が推定されるが、検出した溝の方向がやや振れることや、S D 04はこれまで検出した東堀河の時期と大きくずれることなどから、両溝が南側溝、東堀河である可能性は低い。調査地周辺の水田畦畔は氾濫のためか大きく乱れており、いくつかの河道が復元できる。S D 03・04は中世の河道の可能性が高い。また、平城京内での縄文土器の出土は3例目で、いずれも平城京左京三坊を南北に流れる河道の堆積土の中から出土している。

（篠原豊一・原田憲二郎）

註) 奈良国立文化財研究所『平城京東堀河 左京九条三坊の発掘調査』(1983)

22. 平城京左京三条一坊十坪の調査 第219次

I はじめに

本調査は、奈良市二条大路南2丁目159-3番地で行なった、日吉晴雄氏届出の個人住宅新築に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元によると、左京三条一坊十坪の中央部、西寄りにあたり、北には平城宮、東には長屋王邸宅跡などの大邸宅地域と隣接しているところである。また、調査地周辺では平城京以前の調査成果も得ており、今回の調査でも、平城京以前の遺構が残存している可能性が充分考えられた。調査面積は250m²で、調査期間は、平成2年12月26日から平成3年2月1日である。

II 検出遺構

発掘区の基本的な層序は、耕土、床土（約20cm）の下に遺物包含層（淡黄灰褐色粘砂土）が10cmほど堆積しており、その下に奈良時代の遺構検出面である淡黄色粘土がある。さらにその下に弥生時代の遺構検出面である黒灰色粘土が堆積していた。標高は、淡黄色粘土上面が概ね62.1m、黒灰色粘土上面が62.0mである。

検出した遺構には、弥生時代の土坑1、奈良時代の掘立柱建物6棟、柱列1条、土坑がある。掘立柱建物は、重複関係から4時期以上の変遷があることがわかる。

弥生時代の遺構 土坑1基（SK01）を検出した。SK01の掘形は、長径2.4m、短径1.65mの平面橢円形を呈する。壁面は垂直に掘り込まれ、底部は平坦に仕上げられている。東隅には径5cmの木杭が一本打ち込まれていた。深さは、検出面から0.92mを測る。埋土は、上から灰黄褐色粘土、黒灰色粘土、黒灰褐色粘土（植物遺体層）と続き、涌水層である灰色粗砂層上面で底に達する。出土遺物には、弥生時代前期の特徴をもつ弥生土器（壺・甕）合わせて5個体分、磨石1点、木製品（堅杵、堅櫛、高杯各1点）がある。大半の遺物は植物遺体層から出土し、この層には木皮や炭化米が含まれていた。

奈良時代の遺構 掘立柱建物SB02~07、掘立柱列SA08、土坑SK09がある。

SB02 南北2間×東西1間以上の掘立柱建物で、西へ延びると思われる。南北の柱間は北から1.6m、1.9mと不揃い。東西の柱間は1.5mである。

SB03 南北1間以上×東西1間以上の掘立柱建物で、建物の東南隅部分のみ検出した。南北の柱間は2.7m、東西の柱間は2.4mである。



発掘区南壁堆積土層図 (1/100)

S B 04 柱行3間以上×梁間2間の東西棟建物。柱間は柱行1.8m等間、梁間は妻柱を欠く。北側柱列と南側柱列の西から3番目の柱掘形にそれぞれ須恵器杯Aが埋められていた。

S B 05 柱行3間以上×梁間3間の東西棟建物。南面に廂を持つ。柱間は柱行1.8m等間、梁間は1.8m等間、廂の出は2.2mである。重複関係からS B 04より古い。

S B 06 東西1間以上×南北2間の掘立柱建物。東側は発掘区外へのびる。柱間は、梁間が2.1m等間である。

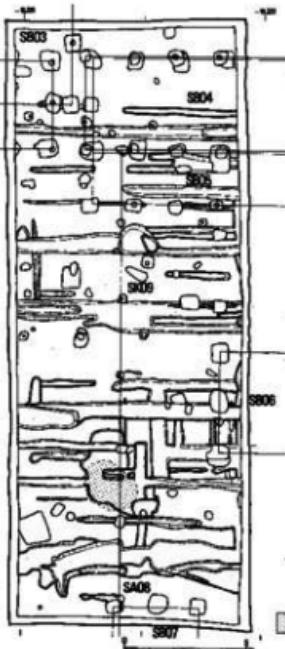
S B 07 南北1間以上×東西2間の掘立柱建物。南側は発掘区外へのびる。柱間は、梁間が1.8m等間である。

S A 08 6間以上の南北方向の掘立柱列。さらに南へ延びると思われる。柱間は北から3.0m、3.2m、3.2m、3.0m、3.0m、3.2mである。

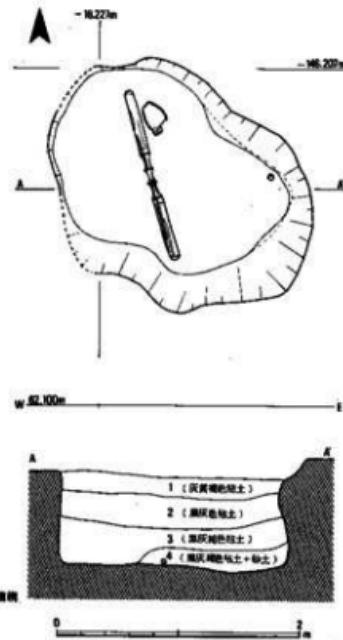
S A 09 長径0.9m、短径0.3mの平面橢円形の土坑。深さは検出面から0.1mと浅い。埋土から奈良時代の丸・平瓦が遺物整理箱で1箱分出土した。

III 出土遺物

ここでは、SK 01から出土した弥生時代の土器、石製品、木製品についてのみ記す。



発掘区平面図 (1/250)



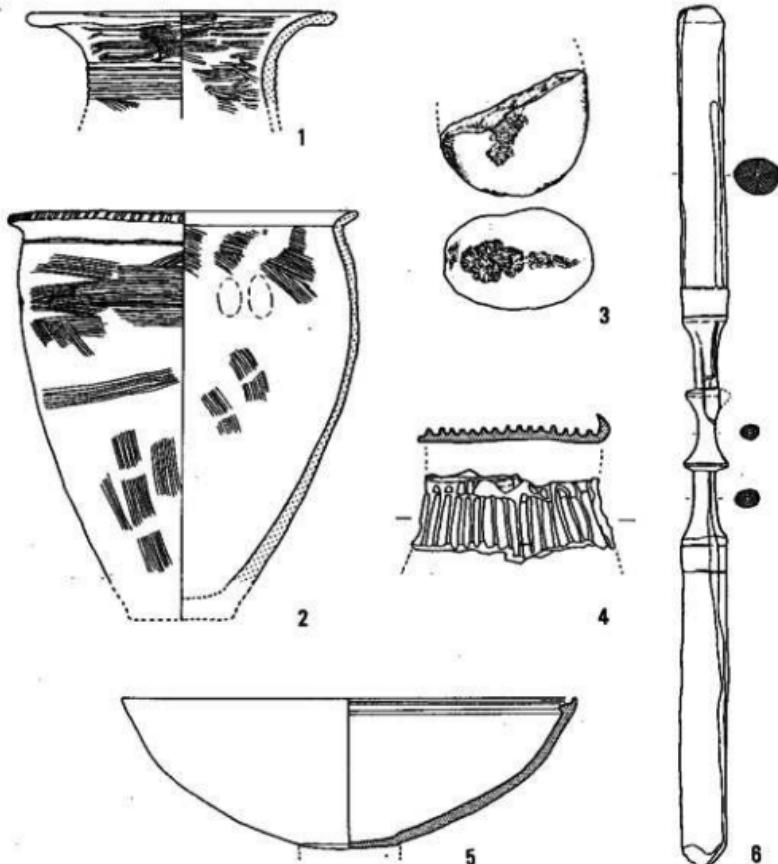
SK 01 (1/50)

弥生土器 臺（1）は頸部に4条の削り出し突帯がある。甕（2）は口縁端部に刻目を施し、口縁部と体部の境には沈線を1条めぐらせる。ともに畿内第I様式の土器である。

石製品 磨石（3）は両面に使用痕、周縁の一部に敲打痕がある。材はカコウ岩。

木製品 堅櫛（4）は基部の部分にあたり、結齒式と呼ばれる形態のもの。表面には朱漆が丁寧に塗られている。小破片のため、全体の形状や大きさは不明。高杯（5）は脚部が折れた後、その部分を平らに削って、杯部を再利用していたと思われる。堅杵（6）は全長143cmの完形品で、芯持材を使用。握部は長い糸巻き形をしており、撫部の先端は一方が丸くすりこぎ状で、もう一方はあまり使用されていなかったのか平坦である。

(久保清子)



SK01出土遺物 (1・2・3・5 1/4、4 1/2、6 1/2)

II. 寺院の調査

1. 元興寺旧境内の調査 第24~第29次

元興寺旧境内において6箇所の発掘調査を実施した。第24・25次調査は都市計画街路杉ヶ町~高畠線の工事に伴う発掘調査である。第26次調査は西新屋町10番地において実施した個人住宅建設に伴う発掘調査である。第27次調査は元興寺町44番地他において実施した(仮称)奈良町・格子の家建設に伴う発掘調査である。第28次調査は脇戸町1-1他において実施した(仮称)奈良市史資料館建設に伴う事前の発掘調査である。第29次調査は奈良市高畠町1083番地において実施した名勝旧大乗院庭園の園池南岸確認調査である。



元興寺旧境内発掘調査位置図 (1/5,000)

第24次の調査

I. はじめに

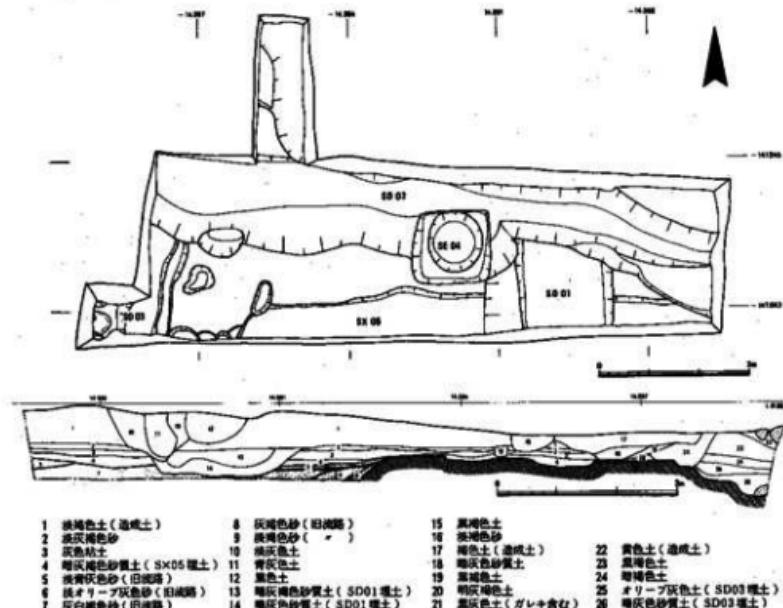
本調査は、福智院町17-2他における都市計画街路杉ヶ町～高畠線建設に伴う事前調査であり、調査地は元興寺禪定院推定地の南西隅にある。

調査地には、最高部で約1.6mの石垣がそのまま残されていたため、まずその一部を崩し内側の盛土を除去した。盛土内には古い石垣が埋まっており、その内部より、中世から近世にかけての遺構を検出した。石垣内の盛土を約8m×13.5mにわたって除去した後に南北3.8m(東端3m)、東西11.5mの発掘区を設定した。発掘区総面積は拡張部を合わせて44m²である。調査期間は平成2年5月7日から5月25日までである。

II. 検出遺構

発掘区の層序は、40～60cmの暗褐色土の下に、南半部で淡褐色砂、北半部で黄灰色粘土が約10cm、さらに灰色粘土が約10cm堆積して地山となる。最も浅いところで地表下約50cmで地山に達する。検出した主な遺構は、中世以降の溝3条と奈良時代の井戸1基である。

S D 01 南北方向の幅1.5m、深さ約0.4mの逆台形状に掘り込まれた溝である。埋土中には時期の推定できる遺物は含まれていなかった。



発掘区平面図 (1/120)・南壁堆積土断面図 (1/100)

S D 02 東西方向の幅1.0~1.5m、深さ0.6m前後の溝である。断面形はU字状で東へ行くほどV字状になっていく。埋土は大きく二層に分かれ、上層は暗灰色土、下層は暗灰色粘土となっている。埋土内からは14世紀頃の土師器が出土した。

S D 03 南北方向の深さ0.3mの溝である。西への拡張が不可能であったため、幅は確認できなかった。重複関係からS D 02より古い時期は不明である。

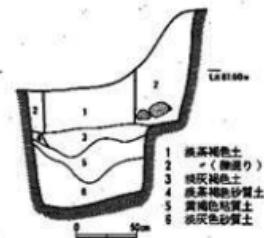
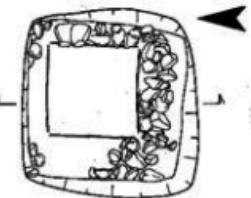
S E 04 井桁状に組んだ木枠を持つ井戸である。掘形は二段に掘り込まれており、上部は一辺約1.5mの方形で、内側に一辺約0.75mの横板組みの痕跡がほとんど土壤化した状態で残っていた。下部は径約1.0mの円形である。おそらく円形部は素掘りであり、その上に木枠を組んだ状態であったと思われる。上部と下部は北辺を除

いて段を形成し、その段部には拳大よりやや大きめの円礫が敷かれており、ほとんどが原位置を保っているものと思われる。類似した形態の井戸が平城京左京六条三坊十三坪でも検出されている。^{註)}方形木枠内埋土から奈良時代の須恵器、円形素掘り部埋土から奈良時代の土師器が若干出土した。

S X 05 深さ0.1mの溝状の落ち込みである。南部が拡張不可能であったため規模、造構の性格等は不明である。重複関係からS D 02よりも古いものとなるが、時期の推定できる遺物は出土していない。

IIIまとめ

今回の調査地は元興寺の別院である禪定院の南西隅にあたる。検出された造構の大半は中世以降のものであり、唯一S E 04が奈良時代のものと推定される。禪定院が元興寺の東に移ったのが11世紀初頭であることを考えると、この井戸は禪定院に直接関係するものではないと思われるが、この地域で比較的例の少ない奈良時代の造構として貴重である。S D 02については性格は不明であるが、地山上面には北西から南東にかけて旧流路が流れしており、S D 02は14世紀以降になってこの流路を改修して利用したものとも考えられる。また黄褐色粘土層(地山)から縄文時代のものと思われる石鎌が一点出土しており、この付近が縄文時代から人々の生活の場となっていたことを示している。



SE04 (1/50)



(松浦五輪美)

石鎌 (1/1)

註) 奈良市教育委員会『昭和58年度 奈良市埋蔵文化財調査報告書』(1984)

第26次の調査

本調査は奈良市西新屋町10で実施した、勝野昭弘氏届出の個人住宅建設に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京条坊復元では元興寺旧境内西面回廊に相当する。調査はその検出を目的として、東西11m、南北2m（面積22m²）の東西に長い発掘区を設定して行なった。調査期間は平成3年1月17日～同年1月25日である。

発掘区内の土層堆積状態は表土の下に、暗褐色土、一部に赤褐色焼土が続き、表土下約0.3mで黄褐色土の地山にいたる。遺構は暗褐色土上面と地山上面で検出した。

検出遺構には土坑、井戸、柱穴、石敷き施設がある。

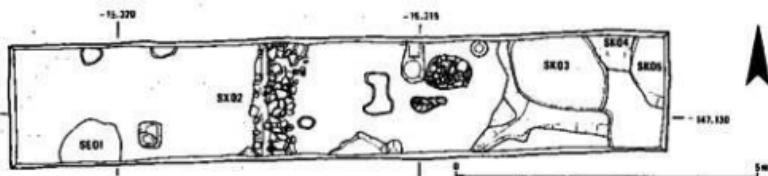
土坑（SK03～05）、井戸（SE01）は前者は発掘区の東端、後者は西端で検出した。ともに近世・近代の遺構であり、暗褐色土上面で検出した。埋土からは土器、瓦、鉄釘、用途不明銅製品のほかに多量の鉄滓とふいごの羽口が出土した。赤褐色焼土の存在とともに戦前までこの場所に鍛冶屋町が形成されていたことを裏づけるものである。

石敷き施設（SX02）は発掘区ほぼ中央の黄褐色土地山上面で検出した。幅80cmで、南北にのびる。径10～20cm前後の平たい石を整然と並べているが、擾乱により石が抜き取られている部分がある。石敷きの西側には1条の石の抜き取り痕跡があり、その形状からみて石材が立てられていたことがわかる。石組みの雨落溝であろうと思われる。ここからの出土遺物には瓦、土師器がある。土師器は細片であるため、正確な年代は不明であるが17世紀前後のものと考えられる。擾乱が石敷きに及んでいることから年代の下限を示すものと考える。

出土遺物には上記のほか、遺物包含層から中・近世の土師器、陶器、磁器、瓦、硯、銅錢、鉄滓、ふいごの羽口が出土している。そのうち、銅錢は、元祐通寶1点、元豐通寶1点、寛永通寶2点、不明1点である。元祐通寶はSX02直上の擾乱土から、そのほかは赤褐色焼土から出土した。

今回の調査は元興寺旧境内の西面回廊を検出する目的で実施したが、近世～現代の削平が著しいため、その資料は得られなかった。

（森下浩行）



発掘区平面図（1/100）

第27次の調査

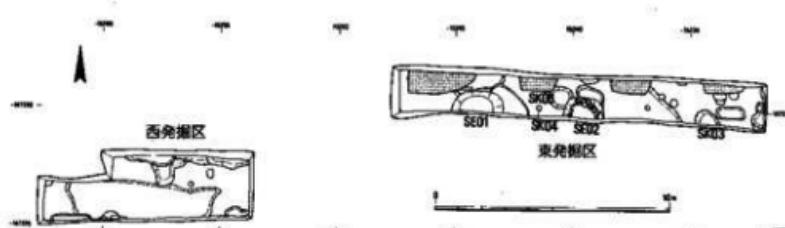
本調査は、奈良市元興寺町44番地、築地之内町20-2番地において実施した(仮称)奈良町・格子の家建設に伴う事前の調査である。当該地は、元興寺旧境内の南方、南院に相当し、敷地の西端には南院と花園院の間の南北小路が推定されるところである。調査は、南北小路の確認を目的として西発掘区(東西9.0m、南北3.0m)を、南院の様相を把握するために東発掘区(東西15.8m、南北2.3m)を設定し、平成3年2月4日から2月20日まで実施した。

発掘区の層序は、両発掘区とも近・現代の土坑や擾乱の重複で複雑な様相を呈している。基本的には、西発掘区では表土下に、明茶褐色土、明茶灰色砂質土、灰色粘土と続き現地表面から約1.3mで淡黄褐色礫土の地山にいたる。遺構は、地山上面で検出した。東発掘区では表土の下に、褐色土、灰色砂、暗褐色粘土と続き、現地表面から1.0~1.3mで黄褐色礫土の地山に達する。まず、暗褐色粘土上面で、つぎに地山上面で遺構検出をした。地山上面の標高は概ね85.0mを測る。

西発掘区 土坑数基を検出しただけで、出土遺物は少なく顕著な遺構もない。

東発掘区 上層では、井戸2基(SE 01・02)、土坑(SK 03・04)などを検出した。SE 01は素掘り井戸、SE 02は石組井戸である。SE 01からは、近世の土器、漆器片、刀装具が、SE 02からは近世の土器類や瓦類が出土した。SK 03は、東西1.0m、南北0.7m以上の掘形で、検出面からの深さ1.2mを測る。埋土からは近世の土器類と瓦類、銅製の鉢が1点出土した。SK 04は、東西0.5m、南北0.4mの平面円形の掘形で、深さは0.1mと浅い。底部には、16世紀前半の特徴をもつ土師器釜が据えられていた。地山上面では、土坑(SK 05)を検出した。SK 05は、一辺1.0mの平面正方形の掘形で、検出面からの深さ0.3mを測る。埋土から13世紀の特徴をもつ瓦器碗が出土。奈良時代の遺物や遺構を検出することはできなかった。

(三好美穂)



発掘区平面図 (1/250)

第28次の調査

今回の調査は、奈良市脇戸町1-1他における（仮称）奈良市史資料館建設に伴う事前発掘調査である。敷地内に東西15m、南北4mの発掘区を設定し、平成3年2月6日から2月22日まで調査を実施した。調査地の基本的な層序は、30cm前後の黒褐色土の下に明黄褐色粘土が部分的に堆積する以外はすぐに黄褐色礫混り粘土の地山となる。地山上面は緩やかに西へ傾斜しており、標高は85.0~85.5mである。

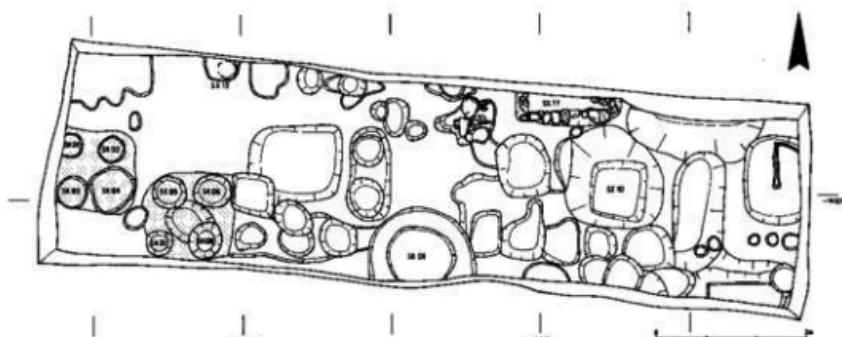
本調査地は元興寺西面中門以南の築地が想定される位置にあたるが、今回の調査では築地に関する遺構を検出することはできなかった。検出した遺構はほとんどが中世以降の土坑である。SK 01~04及びSK 05~08はそれぞれ白色砂が堆積する方形の掘形（アミ目部）の中に掘り込まれており、甕が据えられていた可能性もある。遺物は全く出土せず、時期も不明である。SE 09は現代まで開口していたと思われる井戸である。SE 10は掘形が一辺約1mの方形を呈する井戸であり、検出面からの深さは約1.6mである。埋土からは奈良時代の瓦類と13世紀頃の瓦器、土師器が大量に出土した。SK 11は人頭大の石を積んだ石組みである。内法は東西1.5m、南北0.3m以上で石の小口面がそろえてある。時期は不明である。SX 12は埋甕である。甕は瓦質で近世のものと思われる。

出土遺物については現在整理中であり詳細は不明であるが、全体の約9割がSE 10から出土したものである。ここでは奈良時代の軒瓦についてのみ報告しておきたいと思う。軒丸瓦は6201Aが2点、6235Pが1点、軒平瓦は6661Dが2点、6733の新種が1点出土している。6733の新種は中心飾りが一葉文となるのが特徴的である。元興寺に同范例が知られる。
（松浦五輪美）

註）元興寺仏教民俗資料研究所『元興寺古瓦調査報告書』（1973）



6733型式新種

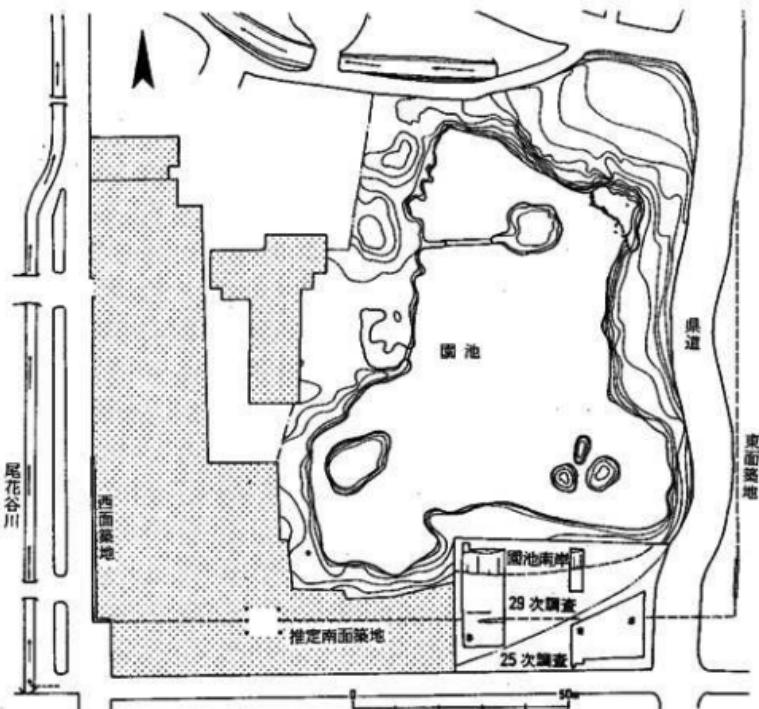


発掘区平面図 (1/120)

大乗院跡の調査（第25・29次調査）

調査地は奈良市高畠町1083番地で、元の市役所第2庁舎があった。調査地の北隣には国名勝旧大乗院庭園の園池があり、調査地の北半にはこの園池南岸が、南辺には大乗院南面築地が想定されている。^{註1)} 調査は敷地の南東部に、都市計画街路杉ヶ町～高畠線が計画されたため、これに伴う発掘調査として第25次調査を、北西部の跡地利用は未定であるが大乗院園池南岸の確認調査として第29次調査を実施した。

調査地は奈良時代から平安時代にかけて元興寺境内の寺域であったが、11世紀の初め、ここに元興寺の別院である禅定院が造られた。1180年（治承4年）の平重衡の乱によって興福寺の北にあった大乗院が焼失したため、それ以後大乗院は禅定院に移転した。大乗院は江戸時代までこの地にあったが、明治維新の廃仏毀釈の影響を受け廃絶する。その後、大乗院庭園は昭和33年国の名勝に指定され保存されることになった。



大乗院庭園地形図（「中世庭園文化史」の第1図大乗院
庭園遺跡地形実測図に加筆）（1/1,400）

第25次調査

街路予定地内の東七坊大路西側溝と大乗院南面築地の推定される地点に発掘区を設定した。調査期間は平成2年12月26日から平成3年2月7日まで、調査面積は250m²である。

基本的な層序は上層から0.2~2.0mまでは建物解体時の客土で、その下に灰褐色砂質土、灰褐色土、暗茶褐色土、茶褐色土、暗灰色砂質土、黒灰色砂質土と堆積し、灰色砂礫、灰色砂、灰色粘土の無遺物層となる。擾乱部分で下層の堆積状態を調べると、砂礫、砂、粘土が互層となって堆積している。この堆積層は調査地が緩やかな谷地形であることからそれを東西に流れていた自然流路の堆積土と考えられるが、出土遺物はなくその時期は不明である。奈良時代の遺構検出面の標高は概ね90.5mである。

検出遺構には奈良~平安時代の溝1条、室町時代の井戸1基、石組遺構2基、16世紀の井戸2基、暗渠1条、18世紀頃の埋甕2基、19世紀の土坑、井戸、近代以降の井戸3基、暗渠3条、埋甕1基がある。

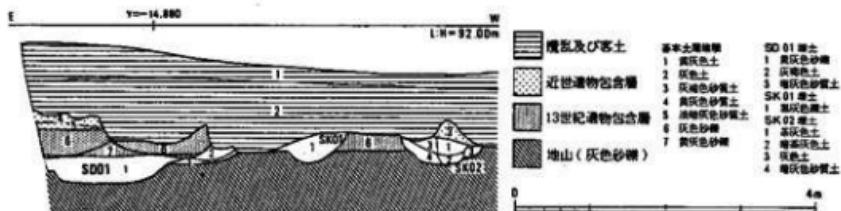
S D 01 発掘区の東辺で検出した南北溝で幅3.0m、深さ0.4m。溝の大部分は旧建物基礎によって破壊されており、その溝底が辛うじて残るのみである。埋土は黄灰色砂礫で、奈良時代中頃から10世紀の土器片、瓦片が出土した。溝の主軸が國方眼方位にあうことや、平城京の条坊復元で東七坊大路西側溝に推定される位置にあることから条坊遺構に伴う溝の可能性が高い。溝心の座標はX = -147,036.000、Y = -14,879.560である。

S X 02・03 南西隅で検出した石組遺構である。共に長方形の掘形の中に長方形の石組を持つものであるが、大部分が破壊されている。重複関係からS X 02の方が古い。

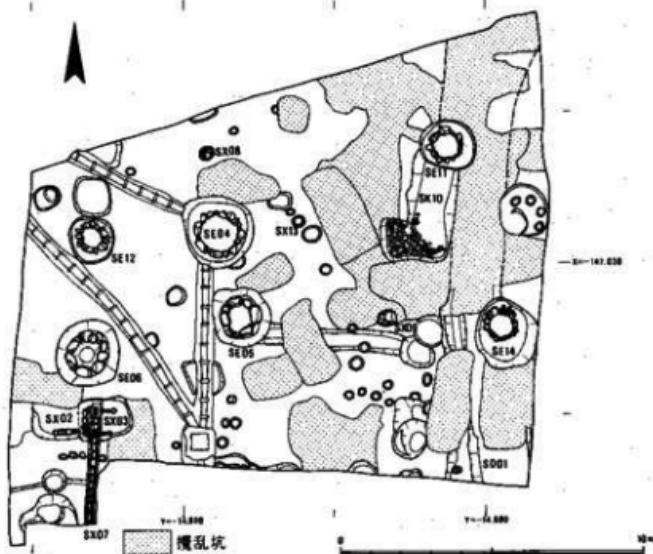
S E 04 中央で検出した円形自然石組の井戸である。掘形は円形で径2.3m、検出面から深さ1.2mである。井戸枠石組は最下段のみが残る。

S E 05・06 ともに円形自然石組の井戸である。掘形はともに円形で径2.1m、検出面からの深さ1.6mである。井戸枠石組は最下段のみが残る。

S X 07 S E 06の南側で検出した南北方向の瓦製土管暗渠で、長さが4m以上ある。幅25cm、深さ15cmの溝状の掘形の中に16個の土管を並べる。3種類の土管が使用されている。受口を北にして土管を組合わせており南側へ排水したものと考えられる。また、北から



第25次発掘区南壁堆積土層図 (1/80)



第25次発掘区平面図（1/200）

7・8番目の土管は特に厚くその部分には東西方向に自然石が4個並ぶ。暗渠の北端は壌されているが、井戸S E 06から南に延びる16世紀頃の排水用暗渠と考えられよう。

S X 08・09 発掘区の中央で検出した埋甕遺構である。径50cm前後の円形土坑の中に大型瓦製品の甕を埋置したものである。S X 08の甕内から土師器皿3枚、瓦片、鉄製品が出土した。また、S X 09の甕内面には白色物質が付着している。18世紀頃のものであろう。

S K 10 発掘区の北東部で検出した逆L字形の土坑である。埋土は黒灰色粘質土で19世紀頃の陶磁器片、瓦片と自然石、木片が出土した。

S E 11・12 円形の掘形の中に円形自然石組の井戸枠をもつ井戸である。井戸を埋めた際に節を抜いた竹筒を立てている。重複関係からいずれも19世紀以降の井戸である。

戰後の遺構として埋甕S X 13、井戸S E 14と南に延びる陶製土管暗渠がある。

第29次調査

旧大乗院園の南岸を確認するため東西2箇所の発掘区を設定して調査した。期間は平成3年2月8日から平成3年3月12日までで、調査面積は260m²である。

基本的な層序は上層から0.4mまでは建物解体時の客土で、その下に近代整地土の黒灰色土、江戸時代の整地層黄褐色砂土、15世紀頃の整地層茶灰色土・灰褐色土・暗茶褐色土・茶褐色土、10~14世紀頃の整地層茶灰色土・灰色土、奈良時代の遺物包含層の暗灰色砂質土・暗灰色砂礫が堆積し、灰色砂礫の地山となる。今回の調査は江戸時代の整地層上面

で遺構を検出した。この遺構検出面の標高は概ね90.8mである。園池範囲確認調査のため下層の遺構は調査しなかったが、池の全容については来年度調査する予定である。

検出した遺構には、池、井戸3基、溝1条、棚、埋甕7基、土坑、柱穴などがある。また、池底下層に奈良時代（S X15）と平安時代（S X16）の遺物包含層があり、池の前身遺構の可能性もあるため、両発掘区の西壁に試掘坑をいれその堆積状態を確認した。

S X 15 西発掘区のSG 17の下層で検出した奈良時代の遺物包含層である。埋土の黒灰色土からは8世紀の土器が出土した。東発掘区ではこの層は確認できなかった。

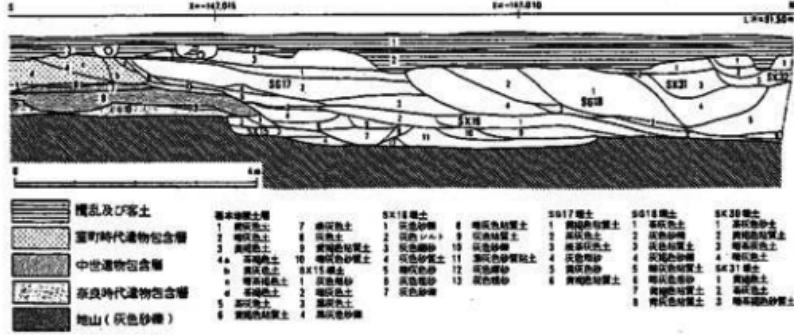
S X16 両発掘区のSG18の下層で検出した平安時代の遺物包含層である。灰色土から掘り込まれている。埋土の黒灰色砂質土からは10世紀の土器が出土した。東発掘区では奈良時代の遺物も混在しており、東大寺式の軒平瓦6732型式F種も出土している。

S G17・18 両発掘区の北半で検出した大乗院園池の南岸である。埋土の堆積状態から2時期の池 S G17・18がある。S G17は15世紀から江戸時代初期までの池、S G18は江戸時代初期の改修をうけた後の池と考えられ、S G17・18の汀線と池底はほぼ同じである。S G18は検出面からの深さ 1.6mである。検出した池の汀の標高は90.1mで現存する池の汀線と合う。池底の植物腐蝕土層からは19世紀の磁器、瓦とともに「文久永寶」が出土した。このことから江戸時代まで、池は埋められていなかったことがわかる。

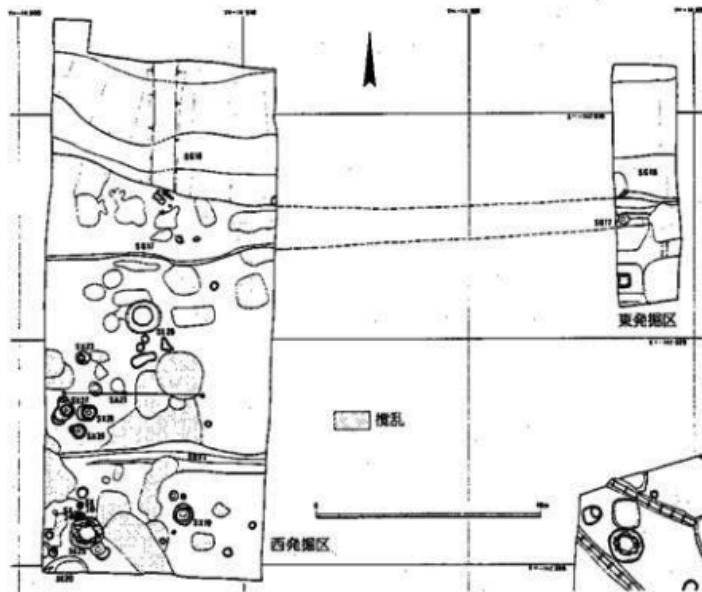
S X 19 埋葬遺構で、甕の上半を欠く。径0.8m、深さ0.6mの掘形内に胸部径が0.7mの大型の瓦質平底甕を据える。18世紀頃の甕と考えられる。

S E 20 東発掘区の南辺で検出した井戸で、北半分を検出した。井戸枠は抜取られている。掘形は径1.7の円形mに復元できる。

S A 21 東発掘区で検出した東西方向の擁立柱列である。一部の柱穴を欠くが4間分の柱列に復元できる。柱間は1.2~1.8mと不揃いである。



第29次西堀区西壁堆積土層図 (1/400)



第29次発掘区平面図 (1/250)

S D 22 S A 10の南側で検出した S A 10と並行する東西方向の溝である。

S X 23・24 埋甕遺構で、甕の上半を欠く。径0.4m、深さ0.2mの掘形内に胴部径が0.3mの小型の瓦質平底甕を据える。19世紀頃の甕と考えられる。

この他に、近代以降の井戸 S E 25、戦後の井戸 S E 26と埋甕 S X 27~30がある。

今回の調査で大乗院南面築地の痕跡は検出されなかったが第25次調査と合わせて、江戸時代の南面築地の位置を検討してみることにする。第29次調査地の S A 21・S D 22の位置が南面築地の推定線とほぼ一致している。さらに、S A 21・S D 21の南側で江戸時代の井戸、埋甕などを検出し、第25次調査でも S A 21・S D 22の東西延長線よりも南側で江戸時代の遺構を検出した。このことから S A 21・S D 22が、南辺を区画する施設の一部であった可能性が考えられる。

次に検出遺構から大乗院の敷地の変遷を考えてみることにする。15世紀の大乗院別領図では現在も大乗院跡を囲む様に通る道路がその範囲となっているが、江戸時代に描かれた奈良町絵図では敷地の東・南辺が町家（片原町）となっている。^{註2・3)}従来この町家の成立時期については不明であったが、今回の調査で井戸など15世紀頃の遺構が検出されたことにより、この時期には町家があったことが明らかになった。

（猿原豊一）

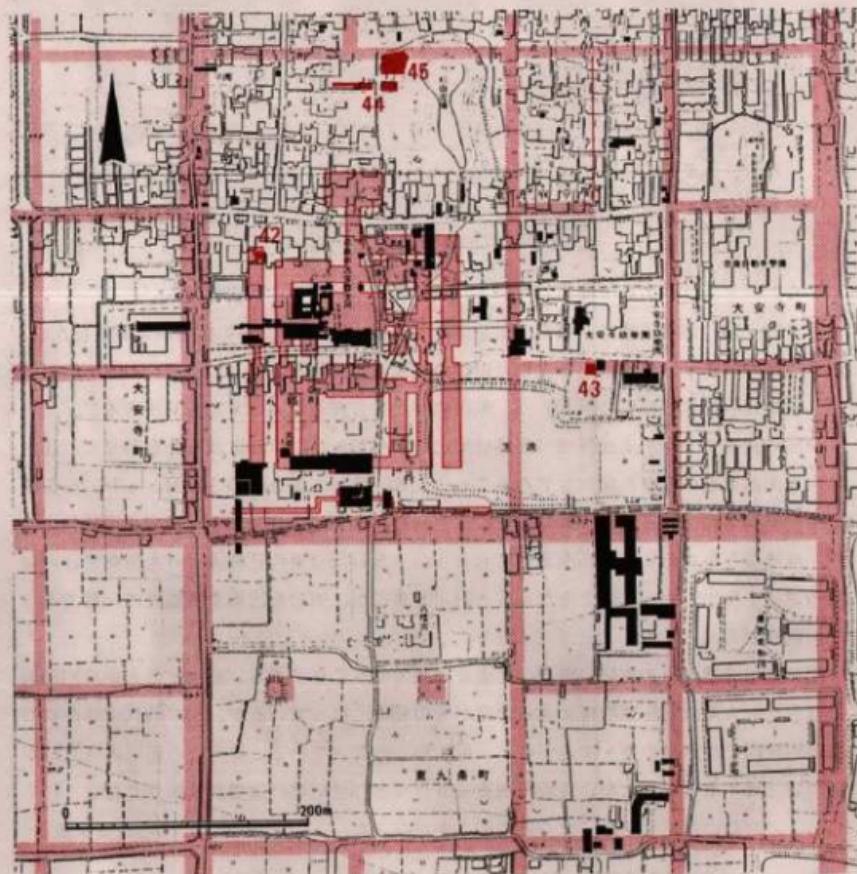
註1) 奈良国立文化財研究所 学報第六番 『中世庭園文化史』(1959)

註2) 奈良市町並建造物群専門調査会 『奈良町』(1982)

註3) 奈良市教育委員会 『奈良町(II)』(奈良町東地区)(1984)

2. 史跡大安寺旧境内の調査 第42・43次

本年度は、史跡大安寺旧境内で4件の発掘調査を実施した。このうち、第42次、第43次調査は現状変更の許可申請に関わる調査である。第42次調査では西中房北列の基壇と礎石据え付け痕跡を検出し、遺構が良好に遺存することを確認した。第44次、第45次調査は杉山古墳の整備に伴う基礎資料を得るために実施した。後円部墳丘裾や、外堤の存在を確認しており、従来推定されていた規模よりもひとまわり大きくなることが判明している。この調査概要については、来年度以降にまとめて報告する予定である。



史跡大安寺旧境内発掘調査地位置図 (1/5000)

第42次の調査

I はじめに

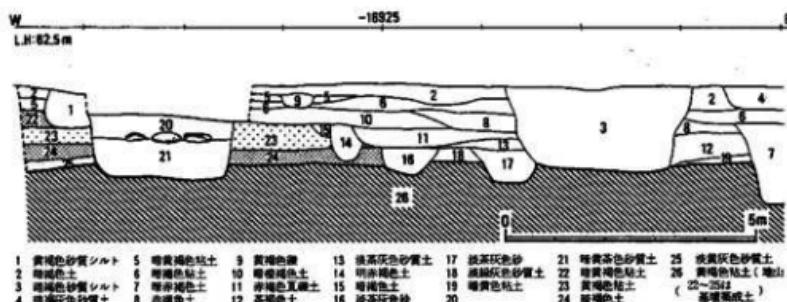
本調査は、奈良市大安寺町1141-1番地において実施した増田喜男氏提出の個人住宅改築のための現状変更許可申請に伴う事前調査である。当該地は、大安寺旧境内の主要伽藍の一部である西面中房北列に相当する。西面中房の調査は、昭和49・52年度に奈良国立文化財研究所が行ない、基壇と礎石据え付け痕跡を検出している。今回の発掘区は、その真北約50mにあたり、前回の調査同様、西面中房の基壇及び礎石建物の検出が予想された。調査は、面積62m²の発掘区を設定し、平成2年4月3日から4月27日まで実施した。

II 掘出遺構

発掘区内の基本的な土層は、表土の下に、暗褐色粘質土が約10cmの厚さで堆積し、現地表面から約20cmのところで基壇築成土を確認した。基壇築成土の下は黄褐色粘土の地山となる。発掘区東端では基壇築成土はみられず、表土の下は、暗褐色粘質土、暗橙褐色土、赤褐色瓦礫、淡茶灰色砂質土、淡緑灰色砂質土と続き、現地表面から70cmで黄褐色粘土の地山にいたる。地山の標高は、概ね61.0m、基壇築成土上面は61.7mを測る。

西面中房北列基壇 発掘区西半部に基壇築成土が残存していた。地山上面に、淡黄灰色砂質土(厚さ約0.1m)、暗褐色土(0.2m)、黄褐色粘土(0.16~0.25m)、暗黄褐色粘土(0.2m)の順に積みあげて築成している。4層分を確認。黄褐色粘土には土師器片が、暗黄褐色粘土には軒瓦が2点含まれていた。基壇東端は、削平されていたために不明である。西端は発掘区外へのびる。

S B 01 基壇上面で礎石据え付け用の柱掘形を4箇所検出した。いずれも掘形内に根石が残る。西面中房北列の南妻柱列から数えて19~21番目にあたる。発掘区中央で検出した



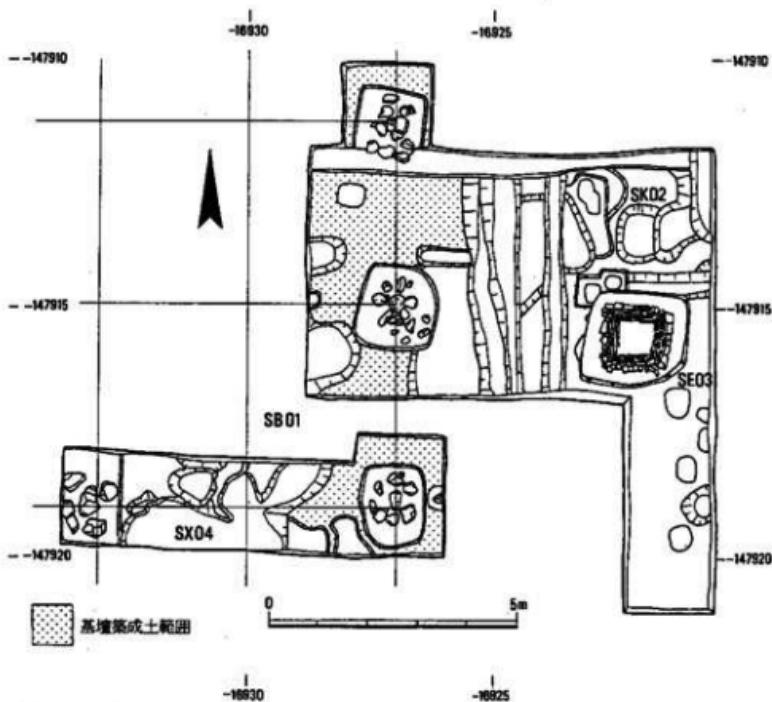
発掘区北壁堆積土層図 (1/120)

南北に並ぶ3箇所の柱掘形は、西面中房北列の東側柱列と考えられる。柱間寸法は、19間目が4.1m(13.8尺)、20間目が3.6m(12尺)と不揃いである。梁間は、東側柱列から2番目の柱掘形がSX04に墳されているため不明である。

S K02 地山上面で検出した東西0.9m、南北1.1mの平面隅丸方形の土坑。検出面からの深さ0.2mを測る。坑内から奈良時代末頃の土器が出土した。

S E03 多量の瓦を包含する赤褐色瓦礫層上面で検出した一辺1.4mの平面正方形の掘形をもつ瓦積井戸。掘形の断面は擂鉢伏である。深さは検出面から1.1mを測る。井戸枠は、掘形に沿って正方形に整え積みあげられている。利用されている瓦は大半のものが平瓦であるが、平城宮6712型式A種軒平瓦1点も使用されていた。埋土から13世紀の土師器釜片が出土した。

S X04 表土下にある暗褐色粘質土上面で検出した土坑。検出面からの深さ0.6mを測る。埋土には、焼土が厚く堆積していた。土器片が少量出土したが、時期は不明。



発掘区平面図 (1/120)

III 出土遺物

遺物は、赤褐色瓦礫層をはじめ井戸、土坑から多量に出土した。そのほとんどが丸・平瓦で遺物整理箱で235箱分に及ぶ。ここでは、奈良時代の土器類と瓦類について記す。

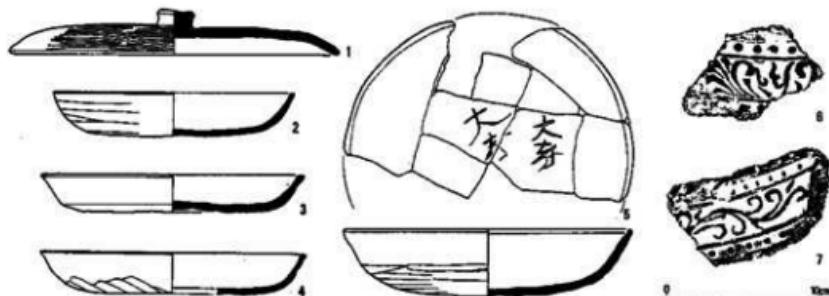
土器類 奈良時代の土器には土師器・須恵器があるが、出土量は少なく遺物整理箱で1箱分だけである。ここでは、SK 02出土のものについて記しておく。

SK 02出土土器 土師器には、杯A(2~5)、杯B、杯B蓋(1)、皿A、皿C、碗、壺B、壺E、甕、製塩土器がある。2はC_o手法、3はa_o手法、4・5はb_o手法で調整している。5の底部内面には、線刻が施されている。「大寺 大寺」と読める。

須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、壺A、壺Q、水瓶、甕がある。

これらの土器は、器面の磨滅が著しく、調整手法が判るもののが少ないが、形態などからみて奈良時代末頃の特徴をもつものと考えられる。
(三好美穂)

瓦類 出土した瓦類は整理箱233箱にのぼる。その大半は丸瓦、平瓦で占めているが、軒瓦については、軒丸瓦28点、軒平瓦46点を数える。軒丸瓦の内訳は、6133種別不明1点、6137-A 4点、6138-C 2点、6138種別不明2点、6231-B 1点、6231-C 1点、6235種別不明1点、6304-D 4点、6304種別不明3点、6308-I 1点、7251-A 5点、型式不明3点である。また軒平瓦については、重弧文1点、6664-A 3点、6699-A b 1点(6)、6712-A 24点、6712-B 3点、6716-C 6点、6716-D 2点、6716-F(新種)1点(7)、6717-A 2点、平安時代以降3点となっており、6712系の出土量の多さが目立つ。なお6308-Iは、西面中房基壇土の上層より出土したものであるが、この型式が平城宮出土軒瓦編年ではⅡ期に比定されているところから、基壇築成の時期を決定する手掛りとなり得よう。6は既知の6699-Aに比べて、中心節の一部に范の彫り直しが認められる。7は6716型式の各種に比べると、第三単位の主葉先端に特徴があり、更に外区をめぐる珠文が円形珠文となっている点でも異なっている。
(武田和哉)



SK 02出土土器 (1/4)

軒平瓦 (1/4)

第43次の調査

I はじめに

本調査は、奈良市大安寺町1255番地における西田正雄氏提出の現状変更許可申請（住宅新築）に関わる調査である。調査地は大安寺の菟院と賤院の間の東西小路の推定地にあたり、昭和58年度の調査地の西に接する位置となる。調査面積は75m²、調査期間は平成2年6月4日から6月15日までである。

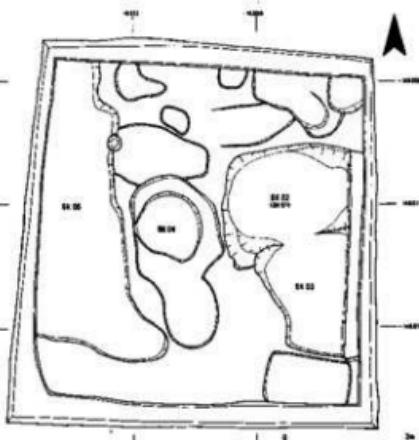
II 検出遺構

基本的な層序は、耕土が約20cm、淡灰褐色土（遺物包含層）が約15cm堆積し、その下が地山となる。地山は南西隅で灰褐色砂質土の他は黄褐色に青灰色の混じる粘土である。

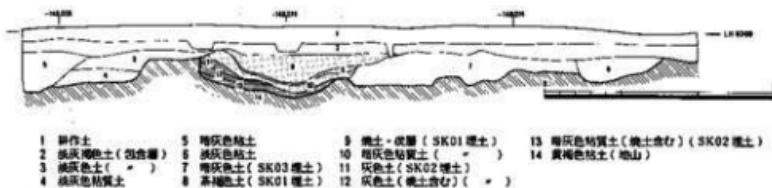
S K01 東西2.5m以上、南北最大3.5m、深さ約0.4mの不正梢円形の土坑であり、SK02とSK03のほぼ直上に掘り込まれている。埋土は上から茶褐色土、焼土・炭層、暗灰色粘質土となる。茶褐色土及び暗灰色粘質土から奈良時代の土師器、須恵器、軒丸瓦、軒平瓦が出土した。

S K02 東西3.5m以上、南北約2.5m、深さ約0.4mの梢円形の土坑である。埋土は上から灰色土、灰褐色砂質土、暗灰色粘質土となり、灰褐色砂質土と暗灰色粘質土の間に焼土と炭が薄い層をなしている。灰褐色砂質土から奈良時代の土師器、須恵器、三彩壺、軒丸瓦、軒平瓦が出土した。

S K03 東西2.5m以上、南北3m以上、深さ0.3mの不正梢円形の土坑である。時期の推定できる遺物は出土しなかったが重複関係からSK02より古い時期のものである。



発掘区平面図 (1/150)



発掘区東壁堆積土層図 (1/80)

S K 04 直径1.5m、深さ約0.1mの円形の土坑である。埋土の淡灰褐色粘質土から奈良時代の土師器甕が出土している。

S K 05 東西2m以上、南北7m以上の土坑である。深さは検出範囲の最深部で0.3mであり、さらに西へ深くなっていくと推測される。埋土から奈良時代の須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦が出土している。

その他の土坑は遺物をほとんど含まず、垂直に掘り込まれているものが多く、粘土探査のあとと考えられる。

III 出土遺物

瓦類 軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦が出土している。軒丸瓦は、6138型式C種が1点、6138型式E種が1点、6231型式種別不明が1点、6304型式D種が1点、6304型式種別不明が1点である。軒平瓦は、6661型式A種が1点、6661型式B種が1点、6664型式A種が1点、6690型式A種が2点、6712型式A種が4点、6716型式C種が1点である。鬼瓦は、小片であるため型式等は不明である。残存部は外区珠文帯の一部であり、珠文の周囲が環状に凹む特徴を持っている。(宮崎正裕)

土器類 ここではS K 03より出土した奈良時代の土器をとりあげる。

土師器には杯、碗、皿、壺、甕などがある。皿C(7)は平らな底部と斜め上にひらく短い口縁部からなる。底部外面には成形時の凹凸を残し、口縁部は内外面とも横なでを施すa₀手法である。底部内面はなでを加えて仕上げている。碗C(8)は丸い底部と屈曲しながら垂直に近い状態でたつ口縁部からなる。内外面とも剥落が激しく調整はわからない。杯A(9・10)はひろく平らな底部と斜め上にひらく口縁部からなり、口縁部の形態は両者とも口縁部下半が内彎、上半が外反する。口縁部は内側にまきこむA形態のものである。9は底部外面が摩滅のため調整は不明。口縁部は内外面とも横なで、底部は内面になでを加える。口縁部内面には一段の斜放射暗文を施す。10は底部外面をヘラ削り、口縁部内外面を横なでにより調整するb₀手法である。口縁部内外面には粗い一段の斜放射暗文を施す。壺A(11)は球形に近い胴部と強く外反する口縁部からなる。胴部は外面をハケ目、内面をなで、口縁部は内外面とも横なでにより調整する。胴部内外面とも二次的に火を受けている。

須恵器には杯、杯蓋、皿、壺、甕などがある。杯A(1・6)は平らな底部と斜め上にのびる口縁部からなる。1は口縁部内外面、底部内面をロクロナデ、底部外面はヘラ切りの後に粗い不定方向のナデを加える。6は口縁部内外面をロクロナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラ切りの後に不定方向のナデを加える。杯B(2)は杯Aに高台を付けたものである。高台は斜め下方に張り、下端面は水平である。前面にロクロナデを施す。壺L(3)は口縁部が外反し、口縁端部が屈曲して凹形をなす。口縁部内外面ともロクロナデ

を施す。杯B蓋（4・5）は頂部がともに平らであるが、4は縁部がそれほど屈曲せず端部が内傾し、つまみが扁平であるのに対し、5は縁部が屈曲し端部が外傾するもので、つまみが高い。調整は両者ともロクロナデで仕上げられている。

奈良三彩壺（12）は下片に聞く高台のつく底部と斜め上に開き肩の張った胴部からなり、口縁部を欠いている。内外面ともロクロナデで調整した後、外面の全体に緑釉、次に部分的に褐釉を線状に流している。内面は緑釉のみ塗釉している。復元胴部最大径は23.4cmである。

これらの土器は平城宮土器Ⅲ～Ⅳの特徴をもつものである。

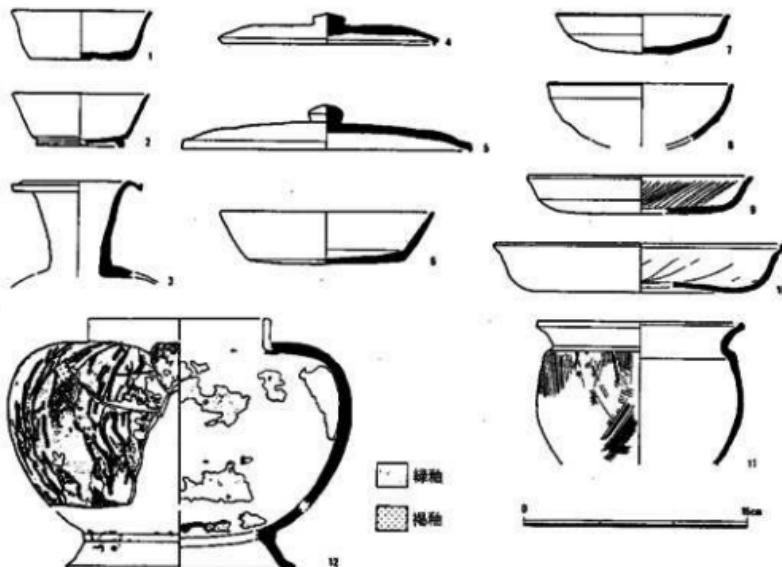
（池田裕英）

IV 番め

今回の調査地は大安寺の麁院と菟院の間の東西小路が想定される位置にあたるが、昭和58年度の調査と同じく調査地の大半は粘土採掘のため掘削されており、小路に関する遺構は検出されなかった。今回の調査では奈良時代のものと考えられる土坑を検出しておらず、そのうちSK01とSK02は埋土に焼土と炭を含むことから、火災等による廃棄物が一括投棄された土坑と考えられる。またその出土遺物に瓦類がある程度認められることから付近に瓦葺きの建物が存在していた可能性も考えられるが、大安寺寺域の東部に関しては不明な点も多く、今後の調査によって明確にしていく必要があろう。

（松浦五輪美）

註）奈良県立橿原考古学研究所『大安寺旧境内発掘調査概報』（1977）



SK02出土土器（1/4）

3. 新薬師寺旧境内の調査 第3次

I はじめに

本調査は、奈良市高畠町600番地の1他において実施した（仮称）奈良市写真美術館建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、現在の新薬師寺本堂の西隣に位置し、新薬師寺旧境内推定地のほぼ北東隅にあたる。新薬師寺旧境内に関する調査は、奈良市教育委員会が過去2度実施しているが、奈良時代の様相については全く不明である。また、新薬師寺は文献史料にも乏しく伽藍配置などの詳細も不明の寺院である。今回の調査は、現存する本堂にも極めて近く、調査面積も大きいことから、奈良時代の様相を知るうえで、重要な手掛りが得られるものと期待された。



調査地位置図

発掘区は建設予定地の中央に南北約40m、東西約25mの規模で発掘区を設定した。さらに補足調査として、東側に南北約5m、東西約12mの規模で拡張し、発掘総面積は約1100m²となった。調査期間は平成2年4月18日から同年7月2日までである。

II 検出遺構

堆積土層は表土である淡灰色土を除去すると、現地表面下約0.2mで黄褐色土の地山となる。遺構は地山上面で検出した。地山上面の標高は東端で概ね128m、西端で126mを測る。調査地は春日野丘陵の一角にあり、東から西へかなりの勾配で下がっている。発掘区中央は攪乱をうけており、地山の旧状をとどめていない。検出した主な遺構は、井戸9基、溝1条、土坑12基、石組遺構1基、石敷遺構1基、石列1条、埋甕2基、柱穴などである。いずれも16～18世紀を中心とするもので、奈良時代の遺構は検出できなかった。

S E 01～05 発掘区北端部で検出した素掘り井戸。掘形は平面不整円形で直径1.0～1.5m、深さは遺構検出面から1.8～2.0mを測る。重複関係から、S E 01よりS X 10が古く、S E 04よりS E 03が古い。いずれの井戸からも16～18世紀の土器が出土した。

S E 06 発掘区北西隅で検出した素掘り井戸。掘形は平面不整円形で南北2.0m、東西2.3m、深さは遺構検出面から2.0m以上を測る。16～18世紀の土器が出土した。

S E 07・08 S E 01～06の南側で検出した素掘りの井戸。掘形は平面不整円形で直径1.0m前後、深さは遺構検出面から2.0mを測る。16～18世紀の土器が出土した。

S E 09 発掘区南側で検出した素掘り井戸。掘形は平面不整形で南北1.6m、東西1.9m、深さは遺構検出面から2.3mを測る。埋土は大きく上層と下層に分かれる。上層には5～

10cmの石、下層には20~30cmの石が多量に混じっている。平安時代以降の瓦が多量に出土したほか、奈良時代の軒瓦1点と15~18世紀の土器が出土した。

S X10・S D11 S X10は発掘区北東隅で検出した東西11m、南北3.8m以上の石組遺構。北側は発掘区外へのびる。掘形は平面長方形になると考えられる。東・南辺の壁面は垂直に掘られている。遺構検出面からの深さは東端で0.4mを測るが、地山が西に傾斜するので徐々に浅くなり、東端から11m西のところで掘形は確認できなくなる。東・南辺の肩部に沿って河原石が一列に並べられた痕跡があるが、石は南側の肩部にわずかに残存するのみである。底部には南北1.5m、東西2mの範囲で20cm大の石を水平に敷き詰めている。S D11はS X10の底部で、南辺の壁面に沿って掘られた東西方向の素掘り溝。全長12m、幅0.8m。遺構検出面からの深さは東端で0.4mを測るが、S X10と同様西に行くほど浅くなる。S D11が埋没した後S X10が埋め立てられる。S X10の南肩から底部にかけて暗褐色粘土が斜に堆積し、この層の上面は南辺の肩部にあったと考えられる石が覆っている。S X10とS D11からは16~18世紀の土器片が出土した。

S K12 発掘区北東隅で検出した土坑。掘形は平面円形で直径2.3m、深さは遺構検出面から0.4mを測る。断面は掘鉢状に掘られている。土坑の底部付近の埋土には、S X10の東辺に並んでいたと思われる石が混入する。16~18世紀の土器片が出土した。

S X13 発掘区北西で検出した土坑。掘形は平面不整円形で南北1.8m、東西2.2m、深さは遺構検出面から0.3mを測る。埋土には10~40cmの石が多数含まれる。16世紀と18世紀の土器片、元佑通寶1点、寛永通寶が1点、炉壁の破片などが出土した。

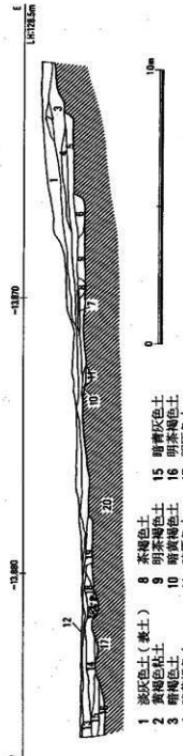
S X14 S X13と重複して検出した土坑。掘形は平面不整形で南北3m、東西4.5m、深さは遺構検出面から0.4mを測る。中央部分で30cm大の河原石を南北方向に一列に二段、積んでいる。重複関係からS X13より古い。17~18世紀の土器片が少量出土した。

S X15 発掘区の東側拡張部の南東隅で検出した土坑。発掘区外に広がるので規模は不明である。埋土は大きく2層に分かれ上層には30~40cmの石が多數混じり、その中に16世紀の五輪塔の火輪がふくまれている。16世紀を中心に13~18世紀の土器片が出土した。

S X16 発掘区中央で検出した石敷遺構。掘形はなく、南北1.4m、東西2.2mの平面不整円形に10cm大の石を敷きつめている。西端のみは20~40cmとやや大きめの石を半円状に並べている。敷かれた石の中に、16世紀の五輪塔の水輪が1点混じっていた。

S X17 S X16と重複して検出した土坑。掘形は平面不整円形で南北3m、東西5m、深さは遺構検出面から0.3mを測る。埋土には5~10cmの石が多數含まれる。重複関係からS X16より古い。18世紀を中心とした土器片少量と、奈良時代の瓦が1点出土。

S X18 S X17と重複して検出した土坑。掘形は平面隅丸長方形で南北1.5m、東西2.1mを測る。壁面は二段掘りされ深さは遺構検出面から0.9mを測る。埋土には炭が含まれ



1 淡灰色土 (表土)	8 茶褐色土	15 喙嘴灰色土
2 黄褐色粘土	9 黄茶褐色土	16 明茶褐色土
3 灰褐色土	10 明黄褐色土	17 明长色土
4 褐黄色土	11 褐黄色土	18 长褐色土
5 褐黄色土	12 明灰色粘土	19 黄褐色粘土
6 褐黄色土	13 褐色土	20 棕色土 (泰山)
7 褐黄色土	14 棕色土	

堀区北壁堆積土層図 (1/150)



発掘区平面図(1/200)

ている。重複関係から S X 17より新しい。18世紀の土器片と、鉄釘 8点が出土。

S X 19 S X 18の西隣で検出した土坑。掘形は平面隅丸長方形で南北1.5m、東西3m。深さは遺構検出面から0.4mを測る。西辺にはS X 18と共有するかたちで、30cm大の河原石を南北1mの長さで上下2段に積んでいる。18世紀の土器が出土した。

S X 20 S X 19の西で検出した土坑。掘形は平面隅丸長方形で南北1.6m、東西2.7m、深さは遺構検出面から0.5mを測る。西側の壁面は2段に掘られ、その上段部に10~40cmの石が集中する。埋土は下段が1層、上段が2層に分かれ。最下層の埋土には10~40cmの石が含まれている。底部には16世紀の土師器釜が2点埋置されていた。

S X 21 発掘区中央よりやや東南で検出した土坑。掘形は平面L字形で南北2m、東西3.5m、深さは検出面から0.4mを測る。底部で10~20cmの石が掘形の底に沿うように並んでいた。近世の瓦質鉢が底部を上にして出土した。18世紀の土器片少量と鉄釘が4点出土。

S X 22 S X 21と重複して検出した土坑。掘形は平面不整形で南北3m、東西5m、深さは遺構検出面から0.2mを測る。底部には30~40cmの河原石を1.2mの間隔で平行2列、東西方向に並べている。石は面を内側に揃えている。重複関係からS X 21より古い。16世紀の土器片少量と、鉄釘が出土した。

S X 23 S X 22の西で検出した土坑。南側はS X 24に壊されているため、規模は不明である。残存する部分の深さは遺構検出面下0.2mを測る。30~50cmの河原石の面を内側に揃え、掘形の底に沿って並べている。13~18世紀の土器片と、鉄釘が1点出土した。

S X 24 S X 23と重複して検出した土坑。掘形は平面隅丸長方形で南北3.2m、東西7.5m、深さは遺構検出面から0.2mを測る。掘形内は石組により、2つ以上に区画されている。20~40cmの河原石で南北1.8m、東西5.3mの長方形に区画し、その中央を南北方向の石列で区切っている。区画の東、西辺にはさらに石が続き、南側にも同じような区画の存在が考えられる。石の面は全て内側に揃えている。16~18世紀の土器が出土した。

石列 発掘区南西部で検出した東西方向の石列。全長5mで30cm大の河原石を一列に並べている。S X 24のように区画を形成するかは不明である。

埋甕遺構 埋甕1は発掘区北東隅で検出した。掘形は平面円形で直径0.6mを測る。内部には18世紀の瓦質甕を埋置している。甕の底部は打ち割られていた。甕内埋土中には、甕と同時期の土師器小皿が含まれていた。埋甕2は発掘区北端やや西よりで検出した。掘形は平面円形で直径0.5mを測る。埋甕1と同様、瓦質甕を埋置している。

柱穴 発掘区北半部で多数の柱穴を検出した。北半部東側の柱穴は、地山上面から掘り込まれており、掘形の一辺が0.6~0.9mを測るものが多い。一方、北半部西側の柱穴は、整地土である明茶褐色土上面から掘り込まれており、掘形の一辺が0.3~0.5mを測り、東側の掘形よりもやや小さい。建物としてまとまるものはない。

III 出土遺物

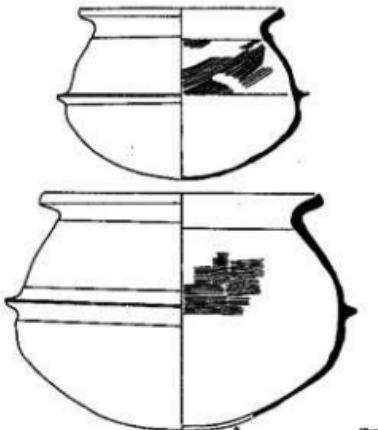
土器類 本調査で出土した土器類には、古墳時代から近世にかけての時期のものがみられるが、そのほとんどは中・近世にかかるものである。ただ遺構の重複が著しいため、時期の一括性を捉え得るものは少ない。ここでは遺構の性格に特殊性の窺える土坑SX20の出土土器に触れる。出土土器には、土師器皿・釜、瓦器擂鉢、盤、瀬戸窯系陶器香炉などがある。土師器皿は、口径8cm程度のへそ皿。また図示した土師器皿には、大小2つの口径のものがあり、大型品は口径20cm程度、小型品の口径は15cm前後である。ともに鉗以下底部が浅く、体部以上頸部までの比率が大きくなり始めるころのものであり、時期的に16世紀後半のものと考えられる。

瓦類 遺物整理箱で106箱分出土した。奈良時代の軒瓦はわずか4点で大半が平安時代以降の瓦である。内訳はSE09より軒丸瓦6236型式A種1点、SX17より軒平瓦6661型式種別不明1点、6732型式Q種1点、遺物包含層より軒丸瓦6236型式A種1点である。

その他の遺物 金属製品は鉄釘が51点と多く、他に鏃、刀子、不明鉄板などがある。銭貨には元祐通寶、寛永通寶が、石製品には砥石、硯、五輪塔（火・水輪）、他に瓦質土器や石を円形に打欠いて整形した用途不明の円盤が出土した。さらに爐の一部と考えられる縦18cm、横16cm、厚さ4cmの破片が1点出土しており、口径は約60cmに復元できる。外側から約2cmの厚さの部分には糊殻が苟として含まれている。内面全体にはカラミが付着している。分析の結果、成分は銅と鉄であることが判明した。

IVまとめ

今回の調査では奈良時代の新薬師寺に関わる遺構を確認することはできなかったが、多数の土坑群を検出することができた。大半のものが削平を受け、年代を確定することは困難であるが、16~18世紀のいずれかの時期に属するものと考える。石を伴う土坑は出土遺物からみて、墓として利用されたと推察することができるが、人骨が出土していないので断定はできない。これらの土坑は、掘形の平面形態、石の配置、遺物の内容などから幾つかのグループに分けることが可能である。これが時期差か、遺構の性格の違いを示すものは今後の検討課題である。



SX20出土土器 (1/4)

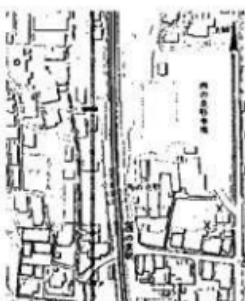
(宮崎正裕・川越邦江・立石堅志)

4. 薬師寺旧境内の調査 第5次

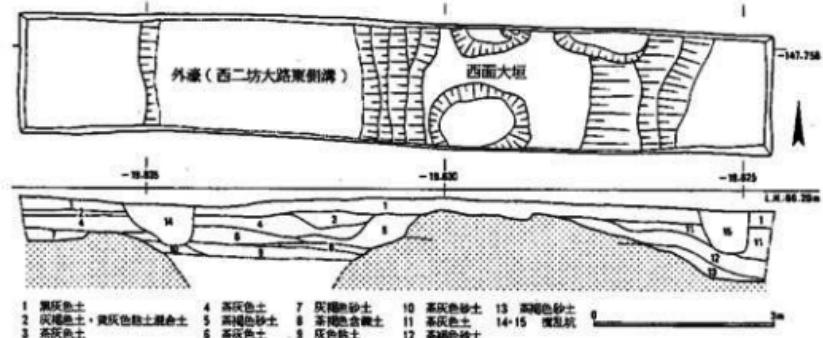
本調査は、奈良市西の京町字柏戸217-1、字金岡408-10において、吉岡陽一氏届出の住宅新築工事に伴って実施した事前発掘調査である。当該地は平城京の条坊復元では薬師寺の西面大垣および西二坊大路にあたり、調査地南側では過去に奈良国立文化財研究所の調査（平城宮第118-27・123-18次調査）で、両者の遺構が確認されている。調査は、大垣の想定位置に東西12.5m、南北2mの発掘区を設定し、平成3年3月12日から19日にかけて行なった。

調査の結果、想定どおりの位置に、西面大垣と外濠（西二坊大路東側溝）の遺構を検出した。大垣は、茶灰色含礫土の地山を削り出した上に、黄褐色あるいは黄灰色のきめ細かな含礫土を積上げて築成されている。基底部の幅は約4mで、盛土部分は高さ約0.5mが残存していた（地山と盛土の境界は立面図に破線で示した）。築土積上げの状態は、保存を考慮して断割りを行なっておらず、明らかにしていない。大垣の西側には外濠（西二坊大路東側溝）が掘削されている。幅3.8~3.9mで、深さは、調査途中で壁面が崩壊したために確認するにいたらなかったが、1mを越える。溝内には灰色の粘土が厚く堆積し、奈良時代の瓦、土器片が若干量出土した。また、大垣築土の崩壊土とみられる茶褐色砂土（土層番号5・12・13）からも少量ながら奈良時代の瓦片が出土している。溝心の国土座標値は、X=-147.758.000、Y=-19.633.160である。

（中井 公）



調査位置図 (1/5000)



発掘区平面図・北壁堆積土層図 (1/100)

III. その他の調査

1. ベンショ塚古墳の調査

I はじめに

本調査は奈良市山町塚廻673～640で実施した、平井章文氏届出の稻荷神社の建設及びその周辺の整備に伴う発掘調査である。届出の提出後、市教育委員会と平井氏との間で発掘調査の話し合いがもたれた。しかし、宗教上の理由で、調査期間の折合いがつかず、先に稻荷神社の建設に先立って、平成2年3月13・14日にその基礎部分の発掘調査が緊急に行なわれている。その結果、後円部墳頂平坦面中央には大きな盗掘坑が存在することが判明した。今回の調査はその周辺部分及び神社にいたる階段が設置されるくびれ部の発掘調査と墳丘測量調査である。周辺部分の調査は上記の理由で変則的な調査となり、困難かつ限られたものとならざるをえなかった。調査期間は平成2年4月23日～7月6日である。

II 古墳の位置・形状・規模

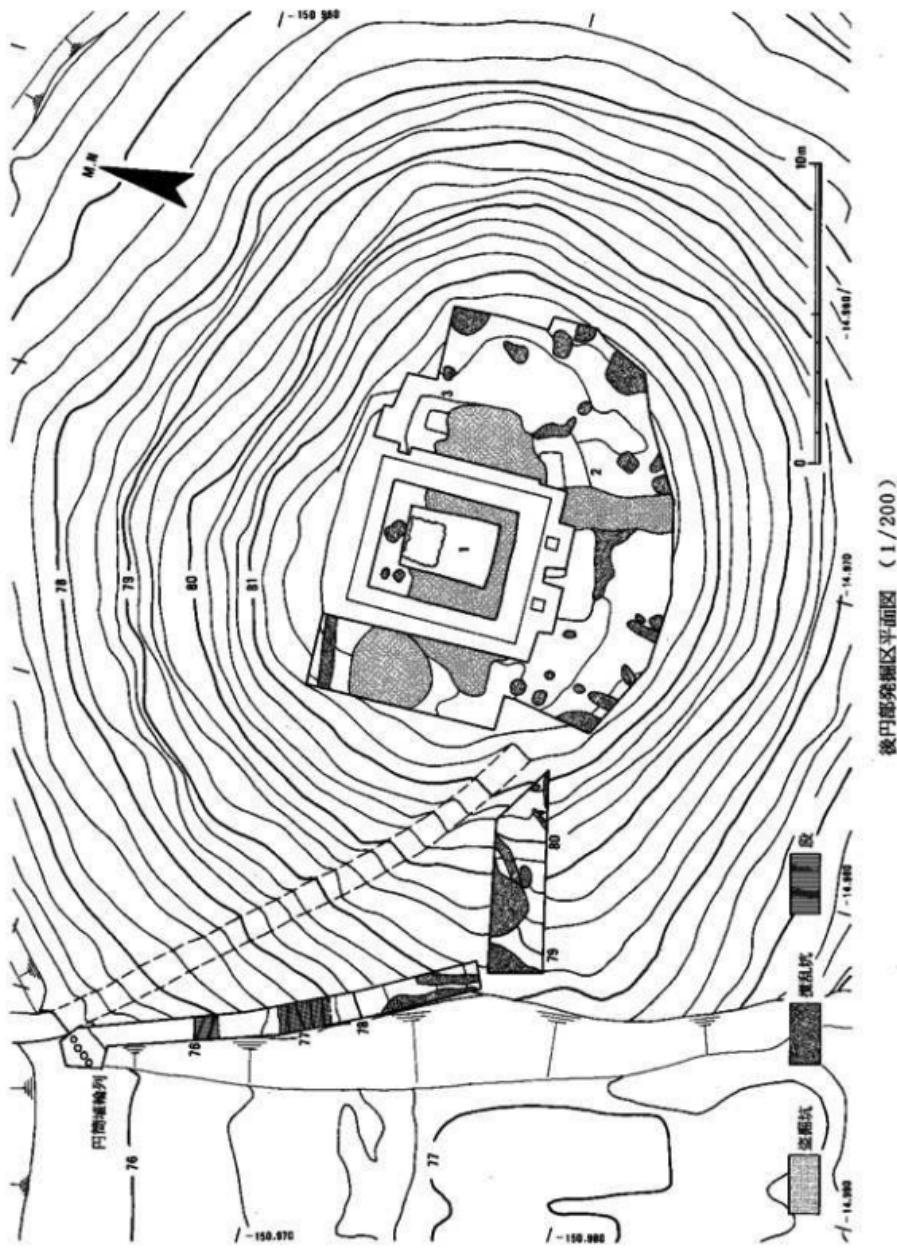
ベンショ塚古墳は、奈良盆地北東、笠置山地（大和高原）から西に派生した丘陵先端の北寄りに位置する。そこからの眺望は北西にひらけ、現在の奈良市の盆地部全域を見渡すことができる。古墳の形状は盾形の周濠を有する前方後円墳で、前方部を西南西に向ける。現状では後円部、周濠はほぼ完存しているが、前方部は大きく削平を受けている。また、遺存地割の状態も比較的良好で墳丘等の規模は復元できる。測量調査の結果から、墳丘全長70m、周濠を含めた全長106mであることがわかった。また、後円部径は38m、前方部幅は遺存地割からみて42m、高さは後円部が現状で6m、前方部は削平のため不明である。くびれ部の調査から、墳丘は3段築成であり、1段目平坦面には円筒埴輪を立て並べていることが判明した。また、1段目平坦面より上部はすべて盛土による築造である。なお、葺石は今回の調査では確認できなかった。

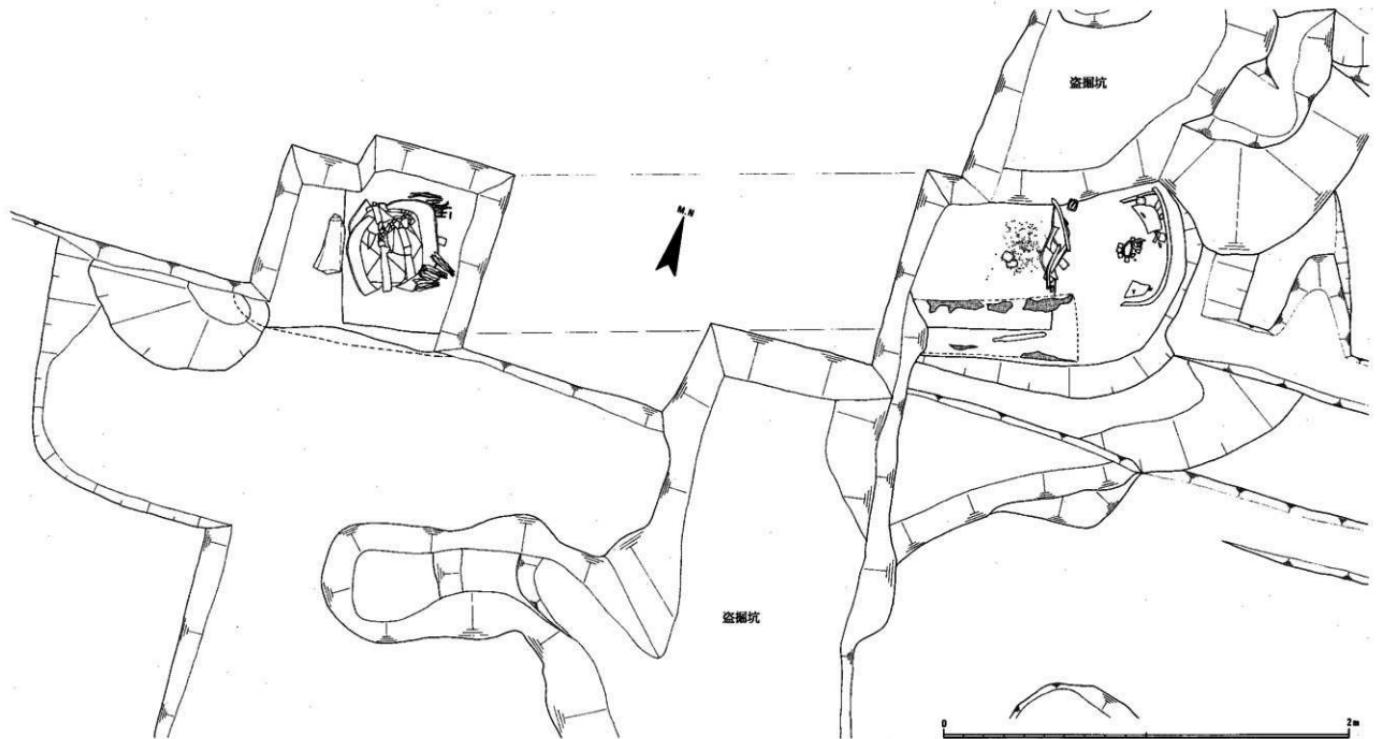
III 埋葬施設

後円部墳頂は大きく盗掘を受けていたが、3基の埋葬施設を検出した。3基ともそれぞれ主軸の方位が異なることからそれぞれ埋葬された時期を異にして順次築造されたものと思われる。盗掘坑があるため重複関係は不明であるが、3基の検出位置、規模から第1埋葬施設、第2埋葬施設、第3埋葬施設の順に構築されたものと思われる。

第1埋葬施設 社殿西側壁面で、墓坑の一部と思われるものを検出した。しかし、ほぼ全体が盗掘を受けており、規模や構造は不明である。ただ、盗掘坑の範囲からみて古墳主軸と同一の東西方向の埋葬施設であつただろうと思われる。墳頂部のほぼ中央にあり、この古墳の中心埋葬施設であったと考えられる。

第2埋葬施設 社殿南側で検出した。第1埋葬施設の南に位置する。部分的に盗掘を受





第2埋葬施設遺物出土状態平面図 (1/20)

けている。主軸は東西方向であるが、東でやや北に振れる（E - 17° - N）。やや不整形の長方形墓坑（長さ6.36m、復元幅2.4m）を掘削した後、さらに棺の部分を一段深く掘りくぼめ、割竹形木棺を据える。棺側及び小口部に薄く粘土を貼り、また棺蓋上にも粘土を貼っていることが観察できた。簡略化された粘土構造である。木棺は長さ3.52m、復元幅0.8mである。なお、小口部の構造は不明である。

第3埋葬施設 社殿東側で検出した。第1埋葬施設の東に位置する。南西部は盗掘を受けている。主軸は南北方向である。長方形の墓坑は復元長3.8m、復元幅2.3mである。墓坑を掘削した後、割竹形木棺を据えるため墓坑内に土をいれ、棺底の形状に整え、棺を据える構造である。棺の位置は墓坑の中心よりやや東にずれる。棺側及び小口付近には薄く粘土を貼り、また棺蓋上にも粘土を貼っていることが観察できた。簡略化された粘土構造である。木棺は復元長2.4m、幅0.5mである。木棺の北側小口部は底板端から30cmのところに小口板を差し込む構造である。

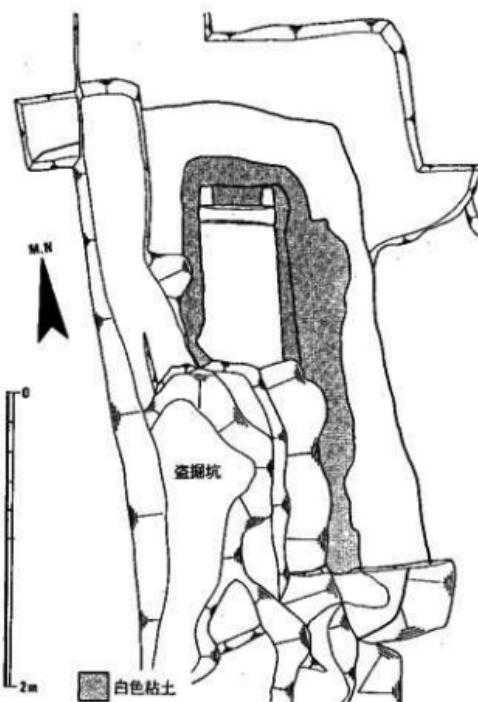
IV 出土遺物及び出土状況

埋葬施設の副葬品、墳丘第

1段目平坦面の円筒埴輪列のほか、盜掘坑、擾乱土からの出土品がある。

第1埋葬施設 盗掘のため、副葬品は不明である。ただし、昨年度調査で中央の盜掘坑から出土した鐵鎌、鐵鎌、そして今回の調査で墳頂西の平面円形の盜掘坑から出土した三角板革綴短甲片がこの埋葬施設に伴う可能性がある。

第2埋葬施設 副葬品として武器・武具（三角板革綴短甲、小札錠留眉庇付冑、鉄槍、鉄鎌、盾）、馬具（鞍、環状雲珠、銅具）、工具（鉄斧、鉄鑿、砥石）、ガラス小玉、針状鉄器がある。埋葬施設のほぼ中央に盜掘坑があるため、



第3埋葬施設平面図 (1/40)

これらの副葬品の出土は東西両小口付近にかぎられる。東小口付近では、棺内から多数のガラス小玉と針状鉄器が出土した。ガラス小玉は直径30~40cmの範囲で出土しており、針状鉄器もその中から出土した。棺外では、棺側に沿って鉄槍先と盾が、棺小口の外側で馬具が出土した。槍先は側面の被覆粘土の中から出土し、鋒部を東に向いている。盾は有機質のものと思われ、表面に塗ったと思われる漆膜のみを検出した。槍先の上を覆うようなくずれた状態で出土しており、おそらく棺蓋上に置かれたものと考えられる。鞍は前輪、後輪の鞍金具が出土しており、後輪は軸をともなっている。鉄板装の木製の鞍であると思われる。土圧と木の根によって変形した状態であるが、副葬された位置にあると考えられる。前輪を小口板（西）に向けた状態で出土した。環状雲珠は鞍の下から出土した。西小口付近では、棺内から短甲、冑、鉄鎌、鉄斧、鉄鑿が、棺外から砥石が出土した。短甲は裾を小口に接して、後胴を上にした横位の状態で出土した。短甲の中から鉄鑿、鉄斧、冑が出土した。なお冑は短甲の中で逆位の状態であった。鉄鎌は短甲の東に接して南北両側に東になった状態で出土した。北側のものは長頭鎌、南側のものは柳葉形の鎌である。長頭鎌は鋒部を短甲内部に入れた状態で、柳葉形のものは短甲の上から出土した。いずれも鋒部は西に向く。砥石は長側面を小口に接した状態で出土した。

第3埋葬施設 副葬品として滑石製勾玉・小玉、土製勾玉・小玉、滑石製有孔円板、不明石製品、針状鉄器がある。これらはいずれも棺外出土で、墓坑内に散らばった状態で出土している。棺を納めたのち、墓坑を埋める際にばらまかれたものと考えられる。

なお、墳頂部の盜掘坑、擾乱土から円筒埴輪、形象埴輪（家・盾・蓋・鶏）、須恵器が出土している。おそらく築造当初は、埋葬施設を囲み、これらが立て並べられていたと思われる。

Vまとめ

今回調査したベンショ塚古墳は、盾形の周濠を有する全長70mの前方後円墳である。埋葬施設はこの時期の通有の形式であり、副葬品の特徴は武器・武具が豊富である点があげられる。現在、出土品等が未整理の段階ではあるが、帶解の地域では現段階では最も古い5世紀中葉前後と考えておく。帶解地域の中期古墳では、ほかに円照寺墓山1・2号墳、柴屋丸山古墳があり、これらはいずれも中小規模の円墳でありながら、武器・武具を豊富に副葬した古墳である。また、埋葬施設では、円照寺墓山ではその周囲に石敷等がみられる点で、柴屋丸山ではそれが墳丘深く位置する点でこの時期の通有の埋葬施設とは異なる様相がみられる。これらの古墳と比較すると、豊富な武器・武具を副葬するという共通点はあるが、墳形、墳丘規模、埋葬施設の違いからベンショ塚古墳は少なくともこの地域の盟主墳的存在であったと考えることができる。また、武器・武具を豊富に副葬した中期の古墳が多くみられるのは、この地域の特徴であると思われる。

（森下浩行）

2. 南紀寺遺跡の調査

I はじめに

本調査は奈良市南紀寺町3丁目290-1、291-7において実施したマンション建設に伴う事前の発掘調査である。当該地一帯は弥生～古墳時代の遺物が散布する南紀寺遺跡として周知されている。しかし、過去に発掘調査が行なわれたことがなく、遺跡の実態はよくわかっていない。したがってまず試掘調査を実施したところ、周辺の地形の傾斜に合わない貼り石造構の一部を検出し、古墳時代の土器が出土した。そこで本調査を実施することとなった。調査期間は平成2年7月9日～8月3日で、調査面積は392m²である。

調査地点の立地 調査地点は、高円山の西側に岩井川と能登川によって形成された複合扇状地の扇端部に立地する。周辺一帯は東方から続く緩斜面地が両河川で三つに開析され、それぞれ独立した段丘状の地形になっている。調査地点は三つの段丘状の地形の、中央の北縁部に位置している。

基本層序 確認した土層は上から造成土、耕土、洪水後の堆積土、洪水の堆積土、濠状造構堆積土、橙褐色砂混シルト層、橙褐色砂疊層である。造構検出面は橙褐色砂混シルト層の上面であるが、下層の橙褐色砂疊層が現れている部分もある。造構検出面の標高は約98.7mである。洪水の堆積土は灰色粘性砂質土で、中世頃に堆積したと考えられる。基壇上造構はこの土で完全に被覆されている。濠状造構の堆積土は灰褐色粘土、淡灰色砂、明灰色重粘土で、内部には水流や滞水状態があったと考えられる。灰褐色粘土は基壇状造構の北側だけに、明灰色重粘土は南側だけに堆積している。これらの堆積には基壇状造構の斜面に貼られた石材が転落している。

II 検出造構

検出した造構は基壇状造構とその周囲を巡る浅い濠状造構である。基壇状造構の上面と濠状造構の底との高さの差は基壇状造構の北側では0.5m、南側では0.6mである。

基壇状造構の形は北西から南東方向に長い長方形であるが、北東と南西の長辺はN40°W、南東の短辺はN45°Eの角度をとり、厳密には角は90°にならない。北の角まで検出したが、北西の短辺は調査区外となった。基壇状造構の上面では造構を検出できなかった。斜面には石を貼りめぐらせる。石材の上端と下端との高さの差は約0.4mで、幅2～2.5m



調査位置図 (1/7500)

である。貼り石の傾斜は20°前後であるが、斜面上半の部分は傾斜がやや強くなる。石材は橙褐色砂混シルト上に直接貼り付けられ、裏込めはない。貼り石の中には列状にならぶものが幾つかあり、その石材は横位に貼られているが、全体的な配石方法はあまり整っていない。各辺の貼り石の状態を見ると、南西の長辺は割合石材を密に貼り付けているが、斜面下半部は幾分まばらになる。下端には人頭大の石材がいくつか配置されているが、石の向きや間隔はあまり整然としていない。南東の短辺には南西の長辺と同様に石材を密に貼り付けているが、貼り石の上端付近では造構検出面に下層の橙褐色砂礫層が現れているため、そこに含まれる石との区別がつきにくい。下端には南西の長辺にあるような人頭大の石材はない。北東の長辺の東側では上端に石材を列状に並べている。この石材の配石方法は他の石列とは異なり、石の小口部分を外に向いている。斜面上半部には石材を極めて密に貼っているが、その下半部は石材が幾分まばらになる。北東の長辺の西側では斜面上半部付近の表面に下層の橙褐色砂礫層が現れており、そこに含まれる石が露出している。貼り石の上端には人頭大の石材が列状に並べられている。北東の長辺の東側上端に石列が遺存しているため、基壇状造構は本来の高さをあまり変えていない可能性がある。また、基壇状造構は漆状造構を掘削し、周囲を低く掘り下げて構築されており、盛土は認められない。

漆状造構は極めて浅く、深さは基壇状造構の北側で0.1m、南側で0.2mである。発掘区内では基壇状造構側と反対の岸が検出できなかったので幅は不明。しかし、試掘調査では北東の長辺から北へ約15m離れた位置で別の貼り石造構を確認している。漆状造構の底はほぼ水平である。北側の底には弧状に石材が貼り付けられている。これは基壇状造構の北東の長辺の貼り石に続いている。長さは8m以上、幅は約2mである。

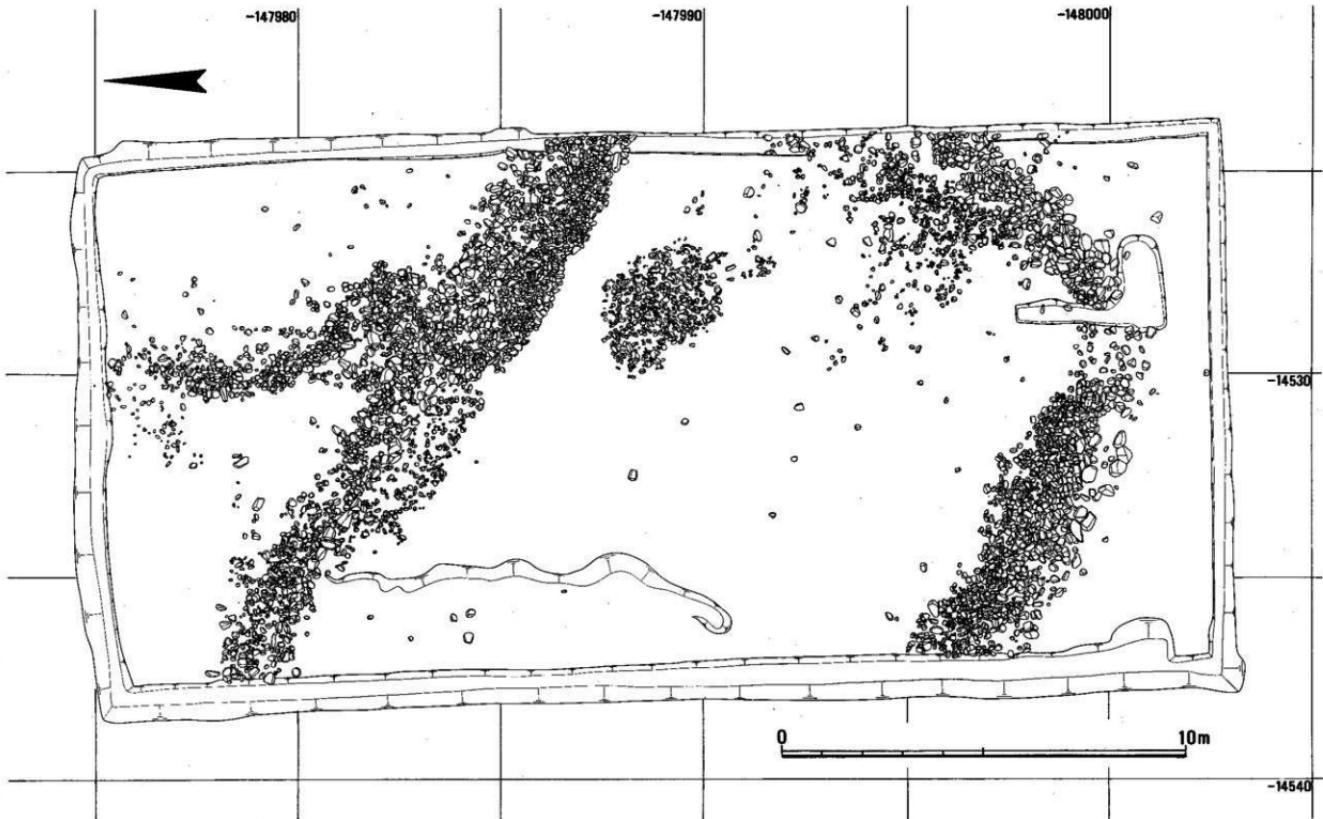
III 出土遺物

遺物の量は極めて少なく、時期を推定できるものもありない。橙褐色砂混シルト層より弥生第V様式の壺、甕、庄内式の甕が出土しているが、造構に伴っていない。漆状造構堆積土から出土した遺物は非常に少なく、長さ12cm、直径3.5cmの棒状土錐が最下層から出土した。この他に5世紀頃の土師器高杯や6世紀後半の須恵器杯身も出土しているが、いずれも破片である。洪水堆積土からは12世紀頃の瓦器椀、龍泉窯系の青磁碗が出土した。

IV 時期及び性格

遺物が造構にほとんど伴っていないため、検出造構の時期を判断することは困難である。橙褐色砂混シルト層の遺物から上限は弥生時代最終末以降に求められるが、下限は不明である。造構の性格についても、古墳、方形周溝墓、居館の一部、園池などが考えられるが、現段階では不明である。これらを解明するには、今後の周辺調査を待って検討していく必要があろう。

(関野 畏)



発掘区平面図 (1/100)

3. 奈良阪町遺物散布地の調査

本調査は奈良市奈良阪町2851番地における野球場建設に伴う事前発掘調査である。調査地は佐保川をはさんで若草山の北方に広がる丘陵の北西部で、佐保川を南に臨む台地となっており現状は畠地である。現在西側は造成されているが、明治31年当時の地形図では本来の台地はさらに西へのびており、本調査地はこの台地の奥部にあたる。標高は約173mである。この付近に鎌倉時代の遺物が散布していることが知られているが、今回はその散布範囲の北端部に東西19m、南北5mの発掘区を設定し、平成2年6月21日から6月25日まで調査を実施した。

基本堆積土層は、耕土約15cm、暗黄褐色粘土の床土約25cmで地山に達する。地山は橙褐色土で礫を含み、さらに25cm下からは灰色と赤褐色の入り混じった粘土層となる。遺構は検出されず、遺物も堆積土中からはまったく出土しなかった。ただし、地表面では小片であるが土器片、サヌカイト片を数片採集することができた。

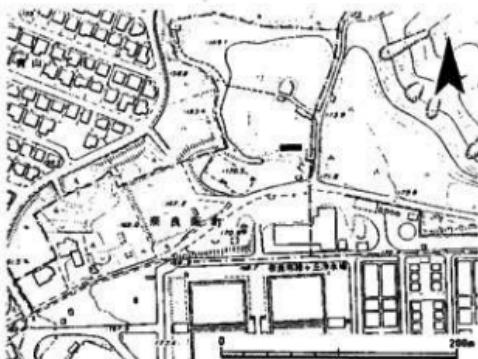
今回の調査では明確な遺構、遺物を検出することはできなかったが、これは散布地の端部であったことが一つの原因であろうと思われる。また、少なくともサヌカイト片が認められることから、鎌倉時代以前から利用されていた場所であったとも考えられる。現在この台地の先端部は造成されているが、台地の先端に遺跡の残る場合も多く、見晴らしのよい台地が古くから人々の生活の場として利用されてきたと考えることも可能であろう。

近年の急速な開発によって多くの丘陵が造成されているなかで、綿密な踏査等によって、そこに残された遺跡の広がりを調査していくことも今後一層必要となってくるものと思われる。

(松浦五輪美)



調査位置図 (1/40000)



発掘区位置図 (1/5000)

4. その他の小規模調査・立会調査

奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所の指導のもとに緊急に実施した小規模な発掘調査と試掘調査がある。一覧表にまとめて示す。また、次表の103件について立会調査を実施した。

次 数	地 緯 名	施 工 地	施 工 内 容	調査日	調 查 施 計	施 工 者
90-1	橿原大路	大寺町1237	古墳建設	4.10	柱穴(奈良巨碑)、土塁(未確認)	平岡 正次
90-2	左京四条西筋八丁目	三条町101-5	古墳住宅建設	4.12	遺跡なし	今中 美穂
90-3	二条・四条・東三條大路	道場町165-1, 164-1, 164-4, 166-2	古墳付帯施設ビル建設	4.17	遺跡、大路未確認	平岡 麻三
90-4	左京二条三筋北洋	道場町165, 145-1, 145-1	事務所ビル建設	4.19	柱穴(鉄道)	パーキング
90-5	左京九条一筋九・十六坪	西大寺町1丁目11-15, 11-17	古墳・古跡建設	4.25	小路削除、柱穴(鉄道)	九山 武司
90-6	左京九条北二条大路	西大寺町1丁目11-5, 11-6	古跡建設	5. 8	井戸(鉄道)、土塁、柱穴	田中 博正
90-7	左京九条北二筋七・八坪+塩小路	西大寺町1丁目2-22	古跡建設	5.15	小路、大路(小野)	奥村 忠男
90-8	左京九条二筋二・二坪+塩小路	西大寺町1丁目7-10, 7-11	古跡建設	5.16	小路、獨立柱埋物	奥村 忠男
90-9	左京二条南筋十六坪・一条大路	法善院町1丁目10-10	古墳付帯施設	5.22	井戸(9時前可)	大西 勝夫
90-10	右京八条三筋十一坪	七条町1丁目312-3, 312-1の一部、311-6の一部 312-2, 311-3, 311-1の一部、311-5の一部	宅地造成	5.29	自然崩壊	杉本 圭司
90-11	右京八条十一坪	西ノ町105-1	事務所ビル建設	5.31	井	株式会社設計
90-12	飛山通の街市	飛山町字町104-1 通5番	古跡建設	5. 5	遺跡なし	二宮義津
90-13	西入谷・西三筋大路	西大寺新町250-20-1号	古跡付帯施設	5.12	井戸、柱穴	岡本 西郎
90-14	御室町通	御室町1丁目1209-1, 201-7	マンション建設	5.25	石碑み(近?)	白木勝利
90-15	左京八条一筋一坪	七条町10-1	工場建設	5.27	井戸(鉄道)	石橋 勝
90-16	南宮町南筋布地	南宮町1丁目573-1, 575-1, 576, 583	工場建設	7. 5	土坑(鉄道)	伊藤吉清研究室
90-17	左京四条二筋十三坪	四条大路1丁目14-1 地10番	古跡削除	7.11	井戸ないし土坑(鉄道)	柳沢リースム
90-18	右京北二条十二坪	西大寺北町18-1, 183-3の一部	古跡付帯・事務所建設	7.23	遺跡なし	山村 幸雄
90-19	右京六条三筋十四坪	六条町1丁目596	古跡付帯施設	8. 6	井戸(鉄道)、大路、土塁、ビット(小野)	宮城 正介
90-20	右京北三筋六坪	西大寺町180-1, 187-10	古跡付帯施設	8.11	遺跡なし	中島 弘和
90-21	御室大路	御室町字南平野町950	施設の整備 地下下水管の埋設	8.25	遺跡、ビット	ゼキラル石井
90-22	淀之庄北木通林	淀之庄町10-6, 6-7-3	宅地造成、庄屋付付帯施設	8.27	井戸(井生)	中野 弘光
90-23	左京三条六筋十坪	中野町13-1, 13-1-2	角庭付帯施設	9.15	遺跡なし	鈴木記録
90-24	左京三条三筋一坪	大宝町1丁目1-3	立派邸車庫建設	10.23	遺跡未検出	辻本マスノ
90-25	左京七条一筋六坪	八条町165-1, 165-4, 165-2, 167-2, 167-3, 168-2	古跡建設	10.25	独立柱埋物(鉄道)	吉部 重雄
90-26	左京三条一筋十三坪	三条大路1丁目2-6	事務所ビル建設	11.19	土坑(鉄道)	共済会石垣保育園
90-27	左京四条五筋七・九坪	三条今里町3-3-4	事務所建設	12. 6	遺跡なし	大路付近石垣保育園
90-28	左京三条三筋六坪	道場町10-2	古跡付帯施設	12.15	小路	福井 一尚
90-29	左京三条三筋五・六坪	大宝町1丁目6-11	古跡ビーリング	12.25	遺跡未検出	増井 徳名
90-30	左京三条二筋二・五坪	三条大路1丁目164-26	住宅建設	1. 8	遺跡(鉄道)	田代 錠
90-31	左京九条二筋二・五坪	西大寺町1丁目10-7	古跡整備	1.30	柱穴(不明)	朝田 博子
90-32	左京三条三筋一坪	大宝町1丁目521-1, 524-6, 524-7, 529-2 地	事務所ビル建設	2. 1	遺跡(鉄道)など	田代 錠
90-33	左京三条六筋十五坪	御室町59-1	社務所建設	2. 4	土坑(鉄道)など	花山 誠志
90-34	御室町69-1	石舟町字今里町55-1, 551-6	住宅建設	2.12	遺跡未検出	吉田 弘子
90-35	西四筋大路	653-1, 653-2, 653-3 653-2, 653-1, 653-1, 653-2	宅地造成・共同住宅建設	2.21	遺跡なし	松江工業
90-36	左京三条三筋十五坪	大宝町1丁目22-1	タワーパーキング整備	3. 8	遺跡なし	知内銀行
90-37	左京五条五筋十九坪	西大寺町	抹水処理施設	3.12	独立柱埋物(鉄道)	小山 雄

その他の小規模調査一覧

道 路 名	起 出 地	届 出 者	立会日	届 出 内 容
左京五条六坊十・十五坪境小路	淨音寺跡町270	岡田 久治	4. 6	住宅建築
吉市城跡	吉市町2312-11	木村 孝雄	4. 7	住宅建築
西一坊大路	三条大路5丁目甲187-3	東口喜久彌	4. 17	住宅建築
左京五条六坊九・十六坪境小路	南堀戸町28-10	酒井 梓子	4. 26	住宅建築
左京四条西坊八年	三条嵐川町94-5	内山 浩三	4. 27	住宅建築
史跡大安寺旧境内	大安寺町1109-2	熊本 健雄	5. 10	下水管理設
東七坊大路	今往家町50-1	池田 行光	5. 15	住宅建築
五条大路	西木辻町166	小寺電業㈱	5. 15	住宅建築
一島条四路	西大寺新田町548-1 他	岡本 光合	5. 19	住宅建築
左京三条一坊二坪	二条大路南3丁目201-1	奈良市長	5. 28	歌碑建立
五条条四路	五条町286 他	奈良市長	5. 30	道路改良工事
左京二条西坊十三坪	芝町3丁目4-2	古田 信一	6. 11	住宅建築
左京三条四坊十坪	大宮町5丁目162-18	東井三千尋	6. 16	住宅建築
左京三条六坊二坪	油坂町字蓮長寺382-2 他	蓮 長 寺	6. 18	書院建築
元興寺旧境内	高畠町字御所馬場104-1	荒井 和夫	6. 25	住宅建築
左京三条六坊十二坪	角原町15-1, 16-3	服部 駿使	7. 2	医院建築
西大寺旧境内	西大寺野神町1丁目6-1(伏見中学校)	奈良市長	7. 4	防球ネット・ネットフェンス設置 位置の設置
西一坊大路	二条町2丁目80-3	奈良市長	7. 5	消防庁合板設
左京三条四坊三坪	七条2丁目789	国立療養所西奈良病院	7. 7	小児病棟建築
左京二条七坊十五・十六坪境小路	今小路町16-2	吉川 正一	7. 10	住宅建築
右京一条二坊十二坪	二条3丁目90-64, 54-10	日本工事副業㈱	7. 13	事務所建築
左京三条四坊十坪	大宮町5丁目162-23	西岡山清一郎	7. 16	住宅建築
左京五条一坊八坪	船木町13(船跡中学校)	奈良市長	7. 20	学校内アスファルト舗装
右京一北北四坊四坪	西大寺新田町1丁目723-13	村田 秋雄	7. 20	住宅建築
左京九条一坊十一坪	西九条町5丁目3-1	相沢石祐	7. 27	給油所建築
吉市城	吉市町2243-1(吉市幼稚園)	奈良市長	7. 30	フェンスの整備
聖天星陵跡地	平田園町字宿間寺組2	尾松 駿雄	8. 7	住宅建築
左京五条六坊十五坪	東木辻町15	岡本 保光	8. 16 17	住宅建築
左京二条三坊四坪	法華寺町225-1, 226	ペアーズ産業	8. 20	店舗建築
左京三条六坊坊四路	内侍原町12-2	朝庄 哲朗	8. 20	事務所整備
左京四条三坊二坪	三条川西町3-1(三条中学校)	奈良市長	8. 24	学校校訓碑設置
法華寺旧境内	法華寺町内	奈良市長	8. 27	下水管理設
史跡大安寺旧境内	大安寺町1005	大西 啓義	9. 11	下水管埋設
東一坊四路	吉町223-3	白鳥 啓夫	9. 14	資材搬運造成 プレハブ管理小屋建築

立会調査一覧表(1)

進跡名	露出地	露出者	立会日	露出内容
右京一集二坊十二坪	二条町2丁目	奈良市長	9.14	公共下水道築造工事
右京一条北邊二坊七坪	西大寺新町2丁目83-8	宮本 伸樹	9.25	住宅建築
史跡大安寺旧境内	大安寺町1093	今西 三男	9.26	下水管埋設
東六坊大路	輪戸町3,4	島野 吉塔	9.27	住宅建築
三条大路	宝来2丁目866-1, 867-1	竹内 正夫	9.28	住宅建築
右京三条一坊五坪	三条大路4丁目134-2	鶴 三 喜	9.27	倉庫建築
四条大路	南新町1-1, 1-2	畠中忠之輔	9.28	住宅建築
左京五条七坊十五坪	紀寺町697	北川 宗一	10. 2	住宅建築
左京三条三坊一坪	法華寺町358	森田富三郎	10. 9	住宅建築
右京五条三坊十五坪	平松2丁目281-122, 123	新庄加寿行	10. 9	住宅建築
元興寺記憶内	中院町29-1	河合 桂子	10. 9	店舗付住宅建築
聖武陵隣接地	半田町向字相間寺塚東2	程姓 陽雄	10.10	住宅建築
左京三条三坊十四坪	大宮町4丁目223-1(大宮小学校)	奈良市長	10.10	バンビーホーム建築
史跡大安寺旧境内	大安寺町1106-1	松井 一弘	10.10	下水管埋設
右京五条三坊七坪	五条1丁目481-35	花尾 利信	10.20	住宅建築
左京二条五坊一坪	法蓮町字ミソ尾222-1	大谷 武馬	10.23	住宅建築
右京五条四坊十二坪	五条3丁目950-1, 949-1	斎内 道	11. 2	住宅建築
左京五条二坊十三坪	大安寺西1丁目342(大安寺西小学校)	奈良市長	11. 5	体育館東建築
三条通開露	三条大路1丁目4	赤坂組監理本部	11. 7 8	交通情報板柱設置
西一坊大路	二条町3丁目4-15	岸上 美子	11.15	住宅建築
左京八条四坊十坪	東九条町846-5	中室 英雄	11.15	駐車場造成
元興寺記憶内	下御門町34-1, 34-2の一部, 33 (奈良下御門町使用)	松森 正明	11.15	郵便局合ビル建築
右京五条三坊十坪	平松町2丁目284-78	川瀬 弘二	11.15	住宅建築
右京三条二坊十六坪	西大寺町見町2丁目385-21	和泉 恵爾	11.16	住宅建築
史跡東大寺旧境内	推司町355(鍛版幼稚園)	奈良市長	11. 1	ネットフェンス設置
左京三条一坊七・八坪地小路	二条大路南2丁目176-2	桃田昌美子	11. 9	駐車場造成
元興寺記憶内	詩福院町33-2, 34-2, 34-3	中西 伸	11. 18	住宅建築
広大寺池遺跡	北之庄町字五桂池723-2	奈良市長	12. 3	ため池護岸改修
左京四条六坊九坪	北風呂町41	北都 益光	11.27	住宅建築
右京六条一坊十六坪	六条町255-8	山本 伸樹	11.29	住宅建築
史跡東大寺旧境内	推司町37(鍛版小学校)	奈良市長	12. 4	防球ネット新設 撤去
史跡大安寺旧境内	大安寺町1044-2	山田 徳	12. 7	倉庫建築
東六坊大路	北風呂町32, 33	村本道路㈱	12. 28	駐車場整備
元興寺記憶内	元興寺町45	橋田 誠平	12. 28	店舗付住宅建築

立会調査一覧表(2)

進路名	届出地	届出者	立会日	届出内容
右京六条一坊十一坪	西ノ京町字ミハカ100-1	柏原光太郎	12.21	駐車場造成
左京四条六坊十四坪	東城西町2-2	大西 一男	12.21	店舗付住宅建築
史跡東大寺境内	総司町97(御坂小学校)	奈良市長	12.25	排水水管敷設
中山瓦窯跡	中山町1383	(京)安楽寺	1.10	廻門建築
左京五条六坊十一坪	西木辻町121-2	御前田住建	1.11	店舗付共同住宅建築
右京西条二坊二坪	四条大路5丁目6-1(前野小学校)	奈良市長	1.11	廻門 ネットフェンス改修
左京八条四坊十坪	東九条町841-7	岡田 真一	1.14	住宅建築
左京八条一坊一坪	吉中町248	奈良市長	1.14	さく井工事
史跡大安寺境内	大安寺町1094	中島 久夫	1.14	下水管埋設
左京八条二坊十三坪	杏町29	杏地区 土地改良委員会	1.16	公民館建設
左京二条六坊四坪	北市町38	宅農 正雄	1.17	住宅建築
左京六条三坊十四坪	大安寺町	奈良市長	1.17	公共下水道築造工事
中ツ道路	池田町4-坪221-1	藤田 昭二	1.22 1.23	駐車場造成
左京一条六坊七坪	桂蓮町1225-7, -17, -18	原家住宅	2. 4	住宅建築
左京二条七坊四坪	鍋屋町15	奈良県市町村職員 共済組合	2. 4	旅館建築
新薦寺跡境内	高畠町1339-3	(京)日本村外教團	2. 7	教会建築
右京二条三坊十四坪	青野町114-1の一部 他	仲井清次郎	2.12	住宅建築
左京三条三坊十四坪	大宮町4丁目223-1(大宮小学校)	奈良市長	2.14	校内改修
左京一条四坊十四坪	法蓮町603-2	西エムディアイ	2.16	住宅建築
東三条大路	法華寺町57	奈良市長	2.16	鐵柵建築
吉市城跡	吉市町宇島ノ城2174	大西 克己	2.18	住宅建築
右京三条二坊五坪	尼ヶ辻北町329-1	杉本 保博	2.19	住宅建築
左京一条六坊四坪	桂蓮町1405-11	宮崎 淳也	2.19	住宅建築
一高南大路	法蓮町地内	奈良市水道局	2.19	配水管敷設
左京二条七坊四坪	半田橋町	奈良女子大学長	2.21 2.22	学生寮建築
右京二条四坊三坪	曾根町字大戸300-3	高木 成美	2.27	住宅建築
元興寺跡境内	西新園町29-1	森口 雅程	2.22	住宅建築
右京五条三坊八坪	五条1丁目481-11	渡邊栄太郎	3. 1	住宅建築
薬師寺跡境内	六条町417-4	尼崎 敏豆	3. 4	住宅建築
左京五条六坊九坪	南城戸南方町44	杉本 文雄	3. 5	住宅建築
右京三条二坊十六坪	西大寺園見町2丁目385-5	藤田 ひろ	3. 5	住宅建築
左京五条七坊十六坪	十輪院町11-6, 11-7	山村 寛	3. 6	住宅建築
西大寺跡境内	西大寺芝町1丁目2457	岡木 誠善	3.13	住宅建築
左京三条五坊十四坪	西之坂町34 他	奈良市長	3.19	緑地整備

立会調査一覧表(3)

図 版



1. 第196-1次発掘区全景航空写真(北から)



2. 第196-2・3次発掘区全景航空写真(南から)



3. 第196-1次発掘区全景
(東から)



4. SF101・SD102 (東から)



5. 第196-1次掘立柱建物群
(西から)



6. 第196-1次東拡張区
(北から)



7. 第196-2・3次発掘区全景
(北から)



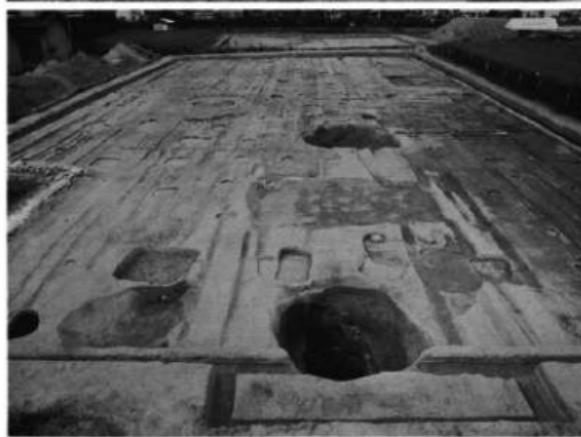
8. 第196-2次発掘区全景
(南から)



9. SF101、SD102 (東から)



10. SD03 (西から)



11. 第196-3次発掘区全景
(南から)

12. SD04 (西から)



13. SE156・SK02 (南から)



14. SE154 出土石製壺





1. 調査地全景航空写真（北から）



2. 第200次発掘区全景（北から）



3. SB104・113 (西から)



4. SB117・139・143 (東から)



5. SB119・137、SK120～132（西から）

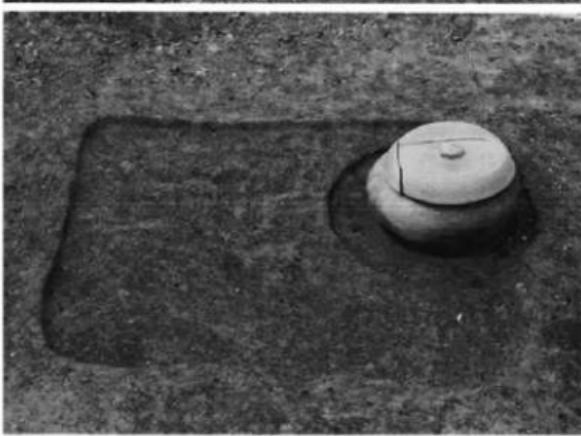


6. SB107（東から）

7. SB139柱穴土器出土状況
(東から)



8. SX105 (東から)



9. SX105断面状況 (東から)





10. 調査地全景航空写真(南から)



11. 第 213-2 次発掘区全景(北から)



12. SB06（南東から）



13. SB05（北東から）

14. SB118・133・134
(南から)



15. 第213-1次発掘区全景(西から)



16. 第213-3次発掘区全景(南から)



1. 第 196-4 次発掘区全景(西から)



2. 第 196-5 次発掘区全景(東から)



3. 第213-4次発掘区全景(南から)



4. 谷埋土除去状態(東から)



1. 東発掘区全景(北から)



2. SD02-03(東から)



3. 西発掘区全景(北から)



4. SD02、SX13(東から)



5. SE09 (南から)



6. SE10 (西から)



7. SE11 (東から)



1. 第186・188・199・218次発掘区全景航空写真



2. SF01・02、SD03、SA07（南から）



3. SF02、SD03・09・10、SA07（北から）



5. 第218次発掘区全景(東から)



6. 第178次発掘区全景(西から) 188
次



7. 第188次発掘区全景(北から)



1. 第 208 次発掘区全景航空写真



2. SF01・02 (東から)



3. SF01・02, SE28 (北から)



4. SE28(南から)



5. SE28断面状況(南から)



6. 弥生時代自然流路
(北西から)



1. 発掘区全景(北から)



2. 発掘区全景(西から)



1. 発掘区全景（北から）



2. SB01・02（南から）



1. 発掘区全景（西から）



2. SB01・02・03・04
(北から)



3. SA11・12 (北から)



1. 発掘区全景（南から）



2. 発掘区全景（北から）